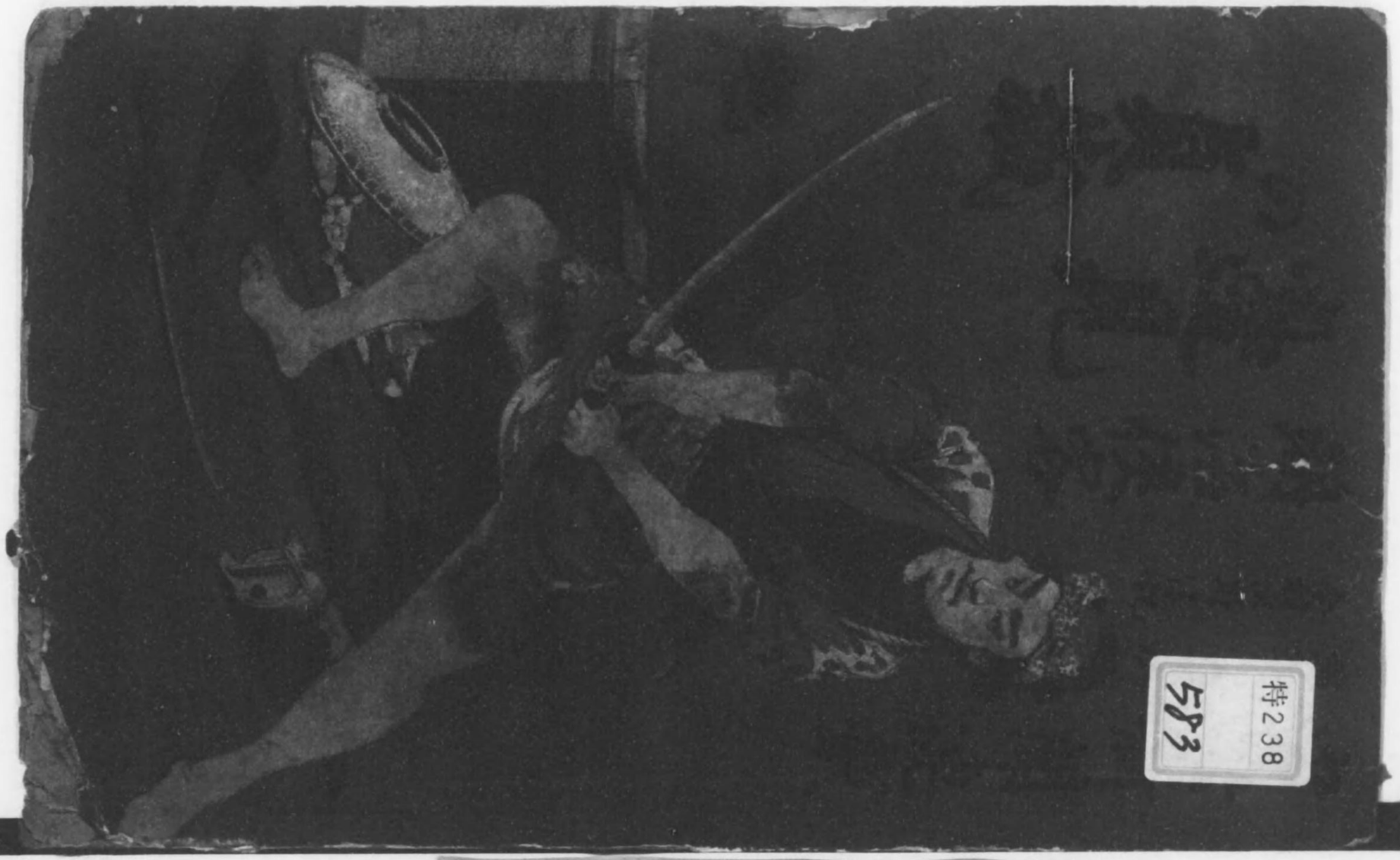


特238
583

583

特238
583

俠客邊見貞藏序

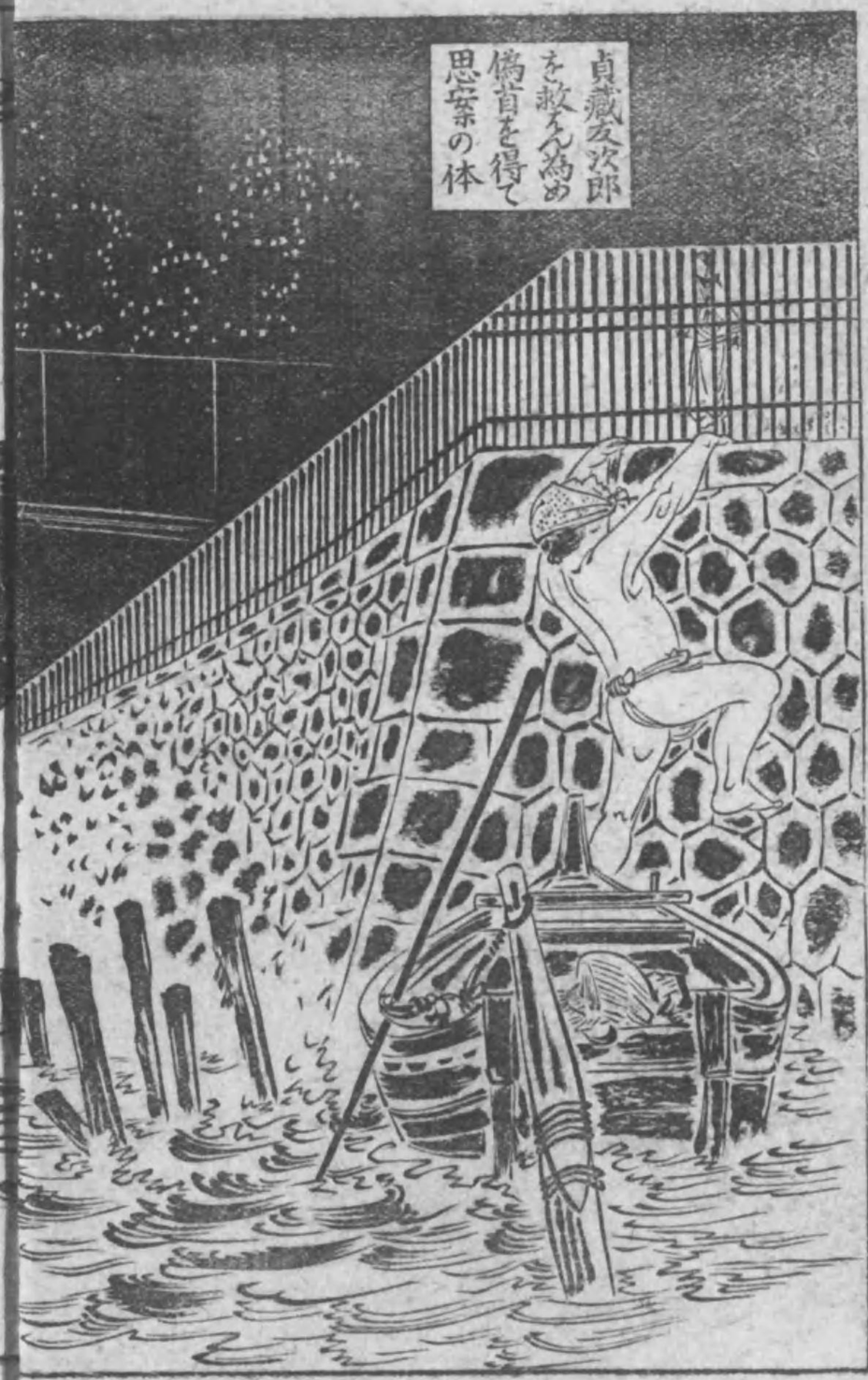
近來社會の理屈として博奕打や盜賊に俠といふ文字を附するは曲おり俠いふ事專ばら喧聞する所おるが、元來此の俠の文字たるや、即はち男氣といふ意味おれは、仮令一方に不正の事あるも一方に於て其の男氣を用ゆるに於ては强がちに俠ならぎとも云ふべからず、正々たる者の精神を以てすれは、不正者に對して俠の文字を冠らするの快よからざるは勿論の事おれども、併しおがら一歩を退きて思考すれは之れ以て已を得ざる所なり、例へば賊を働らくも敢て良民を苦しめぎ、無慈悲非道の者を憎みて夫の物を窃む、罪は固より罪おれども夫の情狀に至ては聊か酌量する所あり、況んや夫の財を以て

倉吉幼兒を抱きて十方にくれ居る圖
辺見貞藏丈助の子分を懲らし帰りの圖

友郎計てくおすほに従ふ

貞藏富之助の子分をおろす圖

弥造貞藏に合ゝんとて獄屋に密行の圖



貞藏友次郎を救ゝん為め偽首を得て思案の体

已れの榮耀にのみ費やさゞるなて之に依て貧民を救ふが如きは即ち俠あり、法律の禁ぜる賭博を以て業とする者に俠客の榮號を與ふるは好まずといへども之又一方に强悪を挫き弱きを助くるに於ては蓋し俠といふ字奇なきか、予は敢て彼等を屈護するにあらず、其の一方の不正は飽まで憎ひといへども一方の俠行は之を悪むに忍びず、仍て此の言を爲す、邊見の貞藏の如きも又然り、其行ふ所時に或は曲ありとする其一方に於て大なに俠行あるを以て其の曲を補ふに足らん、茲に其の傳記成るを聞き愚辞を陳て序に代ふ事爾り

東耕散史

俠客邊見貞藏

錦城齋貞玉講演
今村次郎速記

第一席

此處に下總國は土井大炊頭が本領と聞ねました古河の城下を距る事一里餘り釋迦村といふ小在所がございます、隣り村磯部の方へと立ち越える雜木山の近路を辿りゆく百性体の一人、畫をも欺むくばかりの明月の光と二歩三歩毎に仰ぎ見ては、又力なげに自分の懐に抱いて居る二歳ばかりにもなる稚兒の顔をながめて幾度となく溜息をつき「アーア、汝と云ふ足手まとひせへなけりやア對手が從しお公方樣でも、只置きやア爲ねへだけ

れども何と云ふにも汝が一人あるばつかりで、人並越ねた大の男が此体裁だア」と果は我れ知らず獨語ちて、路傍に例れたる庚申の臺石に腰も拂はず腰を下ろしました、折柄是れも同じく釋迦村の方より雪駄チヤラ〳〵チヤラつかせて手を懷にして急ぎ足で來る一人の若者がありまし、躰は小兵ではあれど腰には確かに長い物を一本ブッ込み荒い格子縞の廣袖一貫素肌に着て、五分月代の薄氣味惡き人体でありまし、前の男は何の氣もなく此の男の顔を見て、驚ろいたる顔附でありましたが、突然聲を掛け「モシ丈助どの待たつしやれ」と呼び止めました、壯者は知らぬ風をして行き過ぎやうと致しましたが、足を止めて「誰だへ、突然に已を呼ぶなア「誰れでもねへだよ、已だ「ナニ已だ、只已ぢやア解らねへや」と言つて此方の顔を覗き込んで「ウム手前は倉吉ぢやアねへか」「如何にも其倉吉だがコレ丈助どの、其方は能も〳〵

已を白痴にして下された、一度會つて怨みを言はうと思つて居たが今どなつちやアそれも言はぬ、言ひたい處だが言はぬに定めた、已も今では斯う云ふ身になつて了つたから、江戸表へでも立退くの外はねへだが、此子一人が足手まとひで、それもならず、何んぼ已がやうな水呑百姓でも、寢返り打つた女房を戻して與れとは言はねへだから、責めて乳離れの出來るまで、こゝ、此の子だけを汝の手許へ預かつて貰ひたいのだ、其方は赤の他人でも、彼の畜生女に取つちや何と云つても腹を痛めた此の子、まさかに打ち殺すほど憎くも思ふめへだから」と鼻詰まらせて袖に縋つて「何んでへ馬鹿〳〵しい、引込み損ねた亡者見たやうに怨みがあるの餓鬼を引き取れのつて可笑しくもねへ、手前が意氣地なしで導アに打捨やられたことア棚へ上げて置いて、其のとばつち

りを已に持つて來る奴がある物か、一時幾干に付いて居る大切な身体だ、言ひ分があるなら、雨降りの日にでも出直して來るが宜いや」と更に取合はずいたして反つて嘲笑をして居ります、倉吉は最う是れまでと拳を固めて思はず丈助が身体へ摺り寄りましたが合憎懐の子の夢を破つて火のつくやうに泣き出しましたので張詰めし氣も緩みて只〳〵口惜さに口をくひしばりました「容ア見やがれ手前なんぞに指でもさゝれて堪るものかへ」と丈助は飽まで不敵の雑言を殘して、开所を立ち去ろうとする時、待ちかねたりと云はぬばかりに大手を廣げて徑の眞中に立ち塞がりたる怪しの一人、身装は左して丈助と異りはなけれど丈は高くいたして何處やらに落着いたる面魂、今を血氣盛りの二十六七とも思はれる人物、餘りの意外にアッと驚ろいて二の何も出ぬ丈助の面を眼下に睨んで「丈助、好い月夜だなア」丈助

は愈よ〳〵荒膽を挫がれ眼を圓くして其人の顔を見て「オヽ貴様は邊見の貞藏ぢやねねか「已の面を見て貞藏と解るうちは手前もまだ幾干か人間の脈が通つて居ると見ねるな丈助は愈よ〳〵荒膽を挫かれ、眼を圓くして彼方の顔を打ち眺めて居りましたが「オヽ、貴様へ邊見の貞藏ぢやアねねか「已れの面を見て貞藏と解るうちは、手前もまだ幾分か血の氣が通つて居ると見ねるな、コレ丈助、諄へこたア言はねへが、貴様と已れとの交情は今夜限り止めにするかか然う思つて臭れ、貴様のやうな人間の皮を着て居るのみにて犬にも劣つてやうな奴に、古河領内を彷徨いて居られちやア數ならねへ已れ達までが出世の邪魔にならアヽオイ倉吉さんとやら、心配するこたアありやせん、汝のお内儀さんてへのを此野郎に奪られなすつたのかへ、成程其様な小さな乳呑兒を置き去りにされちやア、嘸ぞかし困りなさるだらう、

眞實に女も女だ鬼見たやうな奴等だ、サア斯うなつちやあ腕にかけても已れが其子のお袋を取返してやりませう、と云つた處で向ふも息の通つて居る人間だから無理に引き戻した處で、埒は附くめえ、好うは座いますが其子が男ならば尙更ら結搆だ、已れが貰つて育て上げて遣るから、一人前になつた時分に連れに來なせえ」と片手に倉吉を押し宥めて「やい丈助、永年目と鼻の間に居て心安くした仲だから何事も大目に見てやつたが、二三日前の晩にも手前が身内の若へ奴等が、生非の繩張りへ荒しに來たとやら旁〳〵引導の渡し時だが、今までの馴染甲斐に命だけは助けてやらう、サア一時も早く古河領内を立ち去りやがれ」と吐嗟士足にもかけかねまじき横暴であります、丈助は誠心に辯解のなき事が有りませしてか、只無言にて俯向て居ります、初めは丈助にも倍して膽を冷せし倉吉も眞藏と云ふ名を聞きましてよ

りは俄かに胸を撫で下ろしまして「偖て汝樣か此の邊に噂さの高い邊見の小旦那では座りましたか「アッハヽヽ名主の悴に生れた因果で小旦那〳〵と綽名に呼ばれる無賴者では座へます」と笑ひながら答へて再び丈助に向ひまして「ヤイ丈助、言ひ分があるか、犬にも劣つた貴樣の耳へは、已れの言ふ事は聞き取れめへ、フーム貴樣は腹を立つたのか、立てるなら勝手に立てるが宜い、今夜は八月の十五夜だ、十五夜のお月見の晩に此の釋迦の村外れで、已と貴樣が交際を絶つのだ、下總一ヶ國のお搆へをヤし渡してやるのだ、チャンとお月樣だ證人だぞ、但し言ひ分があるなら何時なりともヤし出ろ、舌は一枚しか持たぬお兄いさんだから、サア倉吉さん、已は是れからお前さんの村まで用があつて行く身躰ゆへ丁度幸ひ、一緒に行かうぢやありませんか、ナニ必らずお心配しなさるこたアねえよ」と躊躇ふ倉吉を無理

やりに急き立て、已れは殊更に少しく後れまして、悠〳〵といたして其處を立去りました、丈助は稍暫時の間、瞬きもせずいたして二人が後影の見へずなるまで見送りて居りましたが、額に玉なす汗を拭ひも致しませんで、突然刀の鯉口をガチリと鳴らし、直ぐさま其跡をば追ひ駈けんといたしましたが、フト四方を見回しましてニッコリと微笑ひ「アヽ詰らねへ處へ詰らねへ汝が降て湧きやアがつて思ひも掛けねへドヂを喰つたが、已も塚崎の丈助だ理非は二の次ぎとして賣られた喧嘩を買はずにやア置けねへ、然し然うは云ふものゝ彼奴は何せよ生井一家では一二を爭そふ若手の巾利きだ、チイッと未練なやうぢやアあるが」と言ひかけて頻りに何やらん指折り數へて居りましたが「ムヽ是れから彼奴が釋迦の用を濟し彼の人善しの倉吉奴も乘りかつた船で必度一緒に古河へ連れて歸へるに違へはねへが、其時

一番先へ回つて、ナアに長へところで四時か五時の我慢だ」と左も忌〳〵しげに舌打ちして扨も社手より志ざしたる磯部の方へと急ぎ行きました、

第二席

日本國中俠客社會の三びん小圃に至るまでにも、其の名を知らぬ者なき上州邑樂郡大久保村の住人高瀬千八郎と申しまする、表向き八州の大總代を勤めて居りまして權威代官にも次ぐべき舊家でございますけれども、實は代々關東八ヶ國に蔓延る俠客社會の總家元締と立てられ、苟めにも一方の親分樣と名乘らんほどの男は、從令へ千人二千人の子分を持ちたればとて一度は必らず此千八郎が敷居外に腰を屈めて、直々の盃を手に受けませんければ天下晴れて俠客風を吹かす事ができません掟

法だそうでございました、然れは元より相の川一家といひ、香具屋の一卷とまうしまするも、蔓をかたぐれば皆根は一筋の高瀬が流れを汲んで居りまする者で、其他有名なる棟梁様や澤山ありましたる中に、當時相の川、香具屋の大親分と肩を並べて宛然鼎の立つたる勢ひでありましたるは、此社會の名を生井の彌兵衛、又の名を疵の彌兵衛と呼ばれましたる剛の名にてあります、小兵ながらも膽で造らへ上げたる五尺の身躰に、四尺八寸の大刀疵、左りの小鬢より足の爪先にかけて、弓形に縫つたる疵の跡の殘つて居るところからいたして、疵といふ名を世間に唄はれるやうになりましたろうで、邊見の貞藏は此の彌兵衛が見込んで自分が手に仕上げたる大切の子分にいたして、古河を距る事一里許り同國下河邊の庄櫻井の郷士邊見村の代々名主三田某が次男でございます。扨て其夜も親分彌兵衛を始めといたして、子

分の多くは隣村の賭場に出かけて參り、殊には只仁連の縫吉、越後の彫常の兩人のみでございます「オイ兄弟、一寸と釋迦まで行つて來ると言つて出かけた小旦那の歸りが馬鹿に遲いぢやアねへか、最う彼れ是れ夜明けに間がねやうだぜ」「然うよなア、今聞いたのは永井寺の七ッの鐘だが、明日は又乃木の大場所をひかへてるのだから、宜い加減に歸つて來さうなものだが」と二人ながら煎餅蒲團の中より首を擡げて、煙艸の吸殼を木枕の端にてポンポンと打ち叩きながら話しをして居りまする、折から、どん〳〵と裏口の板戸を叩く者がございます、下手に臥して居りましたる縫吉が先へ此の音を聞き附けまして「ちよ、ちよ、一寸待ちねへ兄弟、唯をすれば影とやら、何うやら小旦那が歸へつて來たやうだぜ」と靜かに致して容体を窺がつて居りまする「早く此處をお明けなすつて下せへ、た、た、大變が起りました、早く

〳〵」と外には聲を枯らして音のふ者がございます「オヤッ、小旦那だと思つたら何んだか耳、馴れねへ聲だぞ、オイ〳〵誰だへ夜明に人の家を叩くなア」「巳でございますよ巳で、早く此處をお明けなすつて下せね「ナニ只巳ぢやア分らねへや、何處の某といふんだ、又何處かで間違いでも出來たのか」「間違も間違、大間違へで、此方樣の小旦那さんが只つた今磯部の手前の石橋の傍で、大勢の者に斬殺されて了ふ處でございます、早く助太刀をお願へヤしやす」と言ふさへ齒の根も合はぬ顏へ聲であります

内の二人は此事を聞いて顏見合せて二度吃驚「な、な、何んだと小旦那が大勢の者に斬り殺されたと、そ、そ、それぢやア兄弟、斯うしちやア居られねへ、生憎今夜は親分も野郎輩も出拂つて居ねへから、兎も角二人で駈け付けるより仕方がねへ、何んだつて此樣な間違を仕出來しやアがるんだなア「何んだッて彼んだつ

て仕方があるものか、オイ〳〵縫吉、手前幾干狼狽てるつたつて股引が逆さに穿けるもんかな、好し〳〵何處の誰だか知らねへが好く早く知らせて呉んなすつた、何れ禮には後で行くから、ナニ釋迦の倉吉てへ者だと、然うかへ何んしても違いところをぬ茂勞だつた」と二人は外の男と應答しながら、手早く身仕度を致し追つ取り刀の向ふ鉢卷で戸を破破つて走り出でました。扨て仁連の縫吉、越後の彫常の兩人は兄弟分小旦那が一大事と聞き、取るものも取り敢へず彌兵衛が部屋を駈け出しまして古河の町外れより並木の松を斜に横切り、磯部を指して韋駄天走りに急ぎゆく事十丁餘にいたして久能村と云ふところへ差かゝる頃は、既に夜も全たく明け放れまして路の邊に置く霜は白きが上に白きを加へて見へまする、先に立ちましたる縫吉は驚ろきたる樣子をいたし、歩を止めて少し後れて居りまする彫常に

向ひまして「オイ兄弟、已の眼の迷ひかも知れねへが、彼方から來るなア如何やら小旦那のやうだせ」「如何さま言はれゝば其の通り、已の眼にも小旦那のやうに見へるから、豈夫間違いはあるめへよ、手前一つ聲を掛けて見ねへか」「そうよな、たがよもや今の倉吉といふ奴が已達を擅いだのでしやあるめねがな」「何んでね」「何故つたつて篦棒奴、九死一生の大刀打ちを爲て居たといふ人間が彼樣に落着いて歩るけるものしやアねエやな「然うよなアぢやア殊に依ると小旦那の亡魂かも知れねへ、何んでも構はねへから正体を見届けるまで駈けて行かう」と又一丁餘り駈け出しました、何樣縫吉が辭に違はずいたして彼方より一本プッ込みたる一人の壯者、日光下駄の片々く鼻緒の切て居りまするのを手に提げて悠〳〵然と歩み來る樣子は疑ひもなき貞藏であります、二人は小躍りをいたして「占めた〳〵正しく

小旦那に違へねへ、アレ見ねへ、片手に鼻緒の切れた日光下駄をブラ提げて居るなんざア、他の博徒にやア眞似の出來る藝當ぢやアねへやな「成程〳〵最う疑ふ處はねへが、それでも餘まり腹の立つほど落着いて居やがるぢやアねねか、已達の氣も知らねへでと語り合ふ間に最早双方の間が半丁とは隔てずになりましたから、氣早の縫吉は手を振り上げて「小旦那〳〵、對手は何處の奴輩でぼ座ねすへ」貞藏は莞爾と打ち笑ひまして「ナアニ塚崎の二才野郎輩、さゝッ塚崎の二才野郎輩が、ぢやア何んですかへ丈助の子分の奴輩ですかへ」と今度は彫常が進んで問へば「然うよ、子分も親分もありやア爲ねへ、ぶッくるんで三人ばかりよ、思案橋の小搆へ投り込んで來た處だ、併し折角手前達のたまの骨休めを無駄にしたのが氣の毒だつたなア「ナアニ小旦那、その儘にやア及でねねが怪我のねへのがまづ〳〵幸福でぼ座へ

ました然うよ怪我のねへのが幸福だが買ひ立ての下駄の鼻緒を片〳〵踏む切つたのが惜しくつてならねへや、アッハヽヽ、それやア然うと今日の處は是れで事濟みだが、到底二三日のうちにやア表晴れて命の遣り取りを爲にやア濟むめへと思ふから手前達も其積りで心仕度を仕て置いて呉れ」と他まで落着き拂つて居りまする貞藏の言葉に、二人の者は少しく呆氣に取られて「それぢやア小旦那、二三日のうちに喧嘩の出返しをする氣なんですかへ「當然よ、先方から騒いで來やアがらねへうちよ、此方から一番決闘狀を打つ附け、塚崎の一ト卷を根絶にしてやる己の覺悟だ」と胸を叩いて決心のほどを物語りましたから、二人の者も元より異儀のあろう筈はなく座いません、それやア面白いだろうと、共に手を打つて二先づ古河へと引き上げました、

第三席

茲に塚崎村の丈助は貞藏を暗打に致そうとして計略美事に外れて已ればかりか語らひゆきたる身内の者まで、一人ならず二人まで思案橋の小溝へ投り込まれ、さん〳〵の目に逢はされグウの音も濡れ鼠となつて逃げ歸へりましたが、丈助とても其頃古河の高砂屋身内に一二を爭ふ若手の貢出しでありまして、旅の恥は掻き捨てと云ふ事もあれど對手も土地ッ子なれば、自分も土地ッ子、苟そめにも人間と生れて而かも世界のうんぶてんぶを盡皿一つの底に收めて、品に依らば生死二ッの境を骨牌の裏と表に決する男と男の達引づくでございます、斯うなる上は最早致し方がございません、有らん眼りの手勢を呼ひ集めて、白晝彌兵衛が部屋へ切り込み、大言吐きし貞藏奴が息の根止めるか

一つ罷り相違て止められるか一つ、偖其の手配は斯く〳〵と、翌日の早朝より長吉、千松、伊勢の五郎なぞ云へる面なる子分五七人を我家へ呼び寄せまして、車座になつて評議の最中、勝手元に酒肴の準備に忙かしく、そこへ子分の一人片たすきのまゝにて走せ來まして親分古河の方から今芝居でする御注進見たやうな裝束をしやアがつて、白鉢巻に白たすき、青竹の先へ何やら紙片をくゝつけた物をおッ振つて駈けて來る奴があるやすが、全体彼りやア何んでば座ねやせう」と怪訝そうに知らしましたから、偖は茲に居合せました丈助をはしめ、居並ぶ子分等は此の言葉を聞きまして「ナニ白襷で青竹の紙切、偖は貞號奴に先を越されたか」と各〳〵顔を見合せて驚いて居ります、別けても丈助は歯噛みをなして拳を握りつめ、何處まで素頭の早へ貞藏でも、よもや今日明日には出直しても來めへと油斷をして居たのが

已等が一生の過失りだ、コレヤイ長吉、千松、伊勢も皆んな男になるかならぬかの天下分目だ、思ひ切つて腕一杯に働らいて呉れ」と言ひまして奥の方を見まして「お仙お仙は居ねへか」と激しく呼びますれば間もなく开處へ出て參りましたる一人の丸髷姿「おさん何んだねへ突然に高聲を上げてさ、何事がはじめつたんだね「オヽ別でもねへが、氣の毒ながら手前は是から直ぐに古河の高砂屋の親分の處へ行つて貰らへてへものだ「私しだつて行けといふなら行きもするが、何にか急に事でも起つたのかへ「起つたの起らねへのッて、手前の事が種になつて、命の遣り取りを爲なくつちやアならねへ事が出來したのだ「オホヽヽヽ妾見たようなお多福一匹の爲めに、お前達が命の遣り取りとはチと腑に落ちないねへ「腑に落ちても落ちなくつても、其樣な事たア跡にて分らア、早く親分のところへ行つて、軍用金を二三百両偖

りて來るやア濟むのだ」と急き立てられてお仙は是非なく「其樣なら兎も角大急ぎで行つて來よう」と不承〳〵にお仙は立ち出でました、それと殆んど入れ替りに、先程より噂さの白鉢卷に白襷の男は、案の條丈助が門口へ來まして、言葉正しく案内を頼むと云ふので、丈助自から立ち出でまして、其樣子を見まするとその男も矢張りかね〳〵賭場にて見知りの、縫吉と云ふ者であります、丈助は態と驚ろかぬ振をいたして、其狀を受取り讀み下しまするとこ、仔細は言はずとも覺ゑあるべし、今年今月十九日正八つ時双方共に當國當郡久能村一の壺に出張つて尋常に勝負を決せんとの短かき文言、其終りに至りまして邊見の貞藏より塚原丈助殿へと作法正しく認めあります、丈助も元より覺悟の上でございますから、直ちに其返詞を認めんといたして又何やらん考がへて居りましたが、物をも言はずッと立ち上りて納屋の

方より豆莢二三束引つ抱へて來りまして我れと我が軒下へと頼み重ねまして、有合ふ燈箱を引き寄せまして其れへ焚き附けました、折しも北風に火先は忽ち暗子に燃へ移りて、烟〳〵と立ち上る黑煙凄まじなんぞ言葉にはヤされません「親分氣でも狂へなすつたか」とをぞろき慌てて外へ駈け出す子分の物どもには丈助更に目も呉れませんで「縫吉返事は是れだ、早やく古河へ駈け戻つて、貞藏の野郎に火の手の靜まるのを待つて居ろと傳へて呉れ。縫吉も去る者で更に驚きましたる氣色も見せません で「丈助殿宜い覺悟だ、早速立ち歸つて、哥兄に委細を返答しやせうと言ひ捨てゝ古河へ引き返へしました、此方は小旦那の貞藏、返答如何にと待ち構へて居りまするこ、縫吉は歸つて參り物語りましたので、斯くと聞くより片頬に笑を含んで「丈助の野郎も今度ばかりやア度胸玉を掘へたと見へるが、それでもこそ相手

に爲べくがあると云ふものだ」とうしろに控へて居りましたる前林の彌藏を顧へり「したが前林、如何したものだらう、此方が十九日の正八ッ時と言つてやつたに、自分の家へ火を放けやアがつて此の火の手の靜まるのを待つて居すと返答して遣こしたからは、遲くも今夜中にやア押掛けて來る手配と見へるぞ、先方が然う死物狂ひなら、此方はあくまで其の先を越して兎も角今日の日暮までに一の壺へと繰り出さうぢやアあるめねか」と相談をかけました、彌藏は頷きまして「哥兄の云ふまでもねへ事、先方が何も彼も然う作法外れに出て來るものなら、搦ふ事はねへ、是れから直ぐに旅途の祝ひをやらかし、品に依つたら一の壺はおろかな事、塚崎までも押よせて、丈助をはじめ子分の奴輩一人もあまさず燃へさしの火塵へ投り込んで手入らずの火葬も一興だらうせ」と云ふに茲で相談一定致して最寄に居合す子分兄

弟分等數十人を呼び寄せて事の概略を知らせましたから、何れも命知らずの血氣の壯者でございます、小旦那の爲めなら骨が舍利に成つても厭ふ事ぢやアありませんと勇みに勇み立ちまして我れ先にと身仕度に取掛りました、勝手には今見上ぐるばかりの大竈を築きまして炊出きしの準備に忙がしふ、其日も彼是ちつ下りと相成りました、斯くて萬端の準備も調ひましたから發頭人の貞藏は上座に直りて土器を取り上げて、先うや〳〵しく一痕の冷酒を味ひ扨それから彫常、彌造、鎌吉は之より、名もなき駈出しの小奴に至るまでにもグルリと一廻り廻したる後、又元の貞藏に納めて开所で盃は納め其次は生鯉一匹大俎板に載せたるを貞藏自分で神棚の前に供へて柏手三ッ打ちならす共に腰なる大刀をスラリと引き拔き、バサリ鯉の頭を切り放ちて、それを其のまゝ血刀の帽子先きへ刺し貫して大聲を揚げ

ましして「サア立たうと云ひながら眞先に立ち上れば、ソレ續けて居並ぶところの面〳〵後をも見ずに土間へと飛び下り勢揃ひ勇ましくいたし、一番手より繰り出さんとする時、今まで姿を見せませんでした釋迦村の倉吉、矢張り彼の子を抱きたるまゝに片隅の方より乗り出しまして、貞藏が傍へと摺り寄り「小旦那樣一生のお願ひでほ座りやすから、巳つち何卒一侶に此の喧嘩のお供にお連れなすつて下せへやし」とおろ〳〵聲にすがり頼みました貞藏は驚ろきまして「アッハヽヽヽ倉吉さん、素人のお前方が出る幕ぢやァねえ、お前が今迄馬鹿にされて居た其の憤慨を己等達が存分に晴らして來てやるから、留守の方に氣を附けて呉んなせへ、危ねへまつた〳〵」と頭を振つて受け附けませんから倉吉は只澁面を作つて本意なさそうに貞藏の顔を見上げて居りました

第四席

扨貞藏は重ねて倉吉に向ひまして「それやァお前の身になつたら、一緒に行きてへのは無理もねへが、然う云ふ足手纏ひがあつちやァ何更の事だ」と倉吉が本意なさそうな顔付を見て氣の毒そうに押し宥めますれば、倉吉は後へ退ろうとも致しませんで「ほ道理では御座りやんすけれども今度の出入の基はと云へば己が身の上から起つた事、譬ひ父子一緒に嬲殺しに遇へばつても、何うも他所に見て居るわけにやァゆきません」と執念く縋るに貞藏も是非なく「宜いや、それぢやァ斯うしなせえ、お前に取つちやァ七生まで忘れられねへ仇の丈助、言はゝ巳達は頼まれもしねへ助太刀だ、其の助太刀ばかりが押し寄せて本人が留守番と云ふのも式のねへ話だから、其の小供を俺れに貸

しなせへお前の名代に俺れが背負つて行つてやらう、然うしたらお前の氣も濟むだらうそれに第一お前はまた知るめへが、長脇差と長脇差との出入に、たとひ一人が半分でも水地の百姓が交つて居たと云はれちや、後〳〵まで己れが世間の胡瀘になるから、お前の行くだけは思ひ止まつて奥んねへ」と口には言へど其實如何なる間違ひ起りて後日まで喧嘩の卷き添ひ喰はせるのが氣の毒と思ひますからでございませう「成程己が惡うぼ座りやした、お前樣方の出入にやア根からの百姓が仲間入出來ねへわけならそれまでしゝぼ座りやんす、それぢやア邪魔でも此の悴だけ連れて行つて下さりませ」と倉吉も初めて得心の色を樂しまして、懷の子を貞藏に渡しました、子供は何にも知りません莞爾やかに両の手を延ばして貞藏が脊に取すがりました

「オヽ久し振で阿母の乳を飲ませてやりてへものだが」と元來情

にはもろき貞藏でありますから、今が今命の取り遣りに立ち向ふ首途で、辨別もなき赤兒を受取り背中に之れを縛りつけるが早いか、大きに待ち遠だつたと、それから一同を指揮いたして表通りは障りが多いからと、わざと人目の少なき裏小路を回りまして、町外れなる田甫路を横切り、案内を知つたる一の靈へと馳せ向ひました、こちらは塚崎の丈助は、重なる怨みを今宵の一擧に晴らしたいものと、同勢五十余人を集め、背水の陣にはありません背火の決心、四斗樽のかゞみを打ち拔いて何れも柄杓酒に咽喉をしめして、日の暮れるのを待つて居りますするが、肝腎の軍用金調達に手掛けました彼のお仙が何時まで過ぎても歸へつて參いりません、丈助は心も心ならず、著しやして途中にて貞藏が手の者にでも攝つ淺はれたのでは有るまいかと、それとも高砂屋の親分が今度の出入に不服と唱へて態と歸して遣こさ

ないのかと、いろ〳〵と相談致して居りまする折柄、物見に出して置きましたる一人、血眼に成つて歸へつて參いりまして「親分邊見方の同勢凡そ五六十人で今方久能の村外れまで出張つて來たやうでは座へやすが、まづ〳〵して居ると此の塚崎までも押して來さうな勢ひでゐ座ねますよ」「ナニ貞藏の野郎が最う出て酒張つて來たと云ふのか、それぢや斯うしちや居られねへ斯うなつたら最う破れ破れだ、やい五郎、一番手から先へ繰出して呉れ、伊勢、五郎は何處へ行つた」と獨りいらちて立ち騒いで居りもすけれども、更に返答のない座いませんのも道理、一番手の大將役を割當てられました伊勢の五郎は、冷酒に酔ひつぶれて、燃ね殘りたる納屋の軒下にて前後も知らぬ大の字形に槍も刀も投げ出して寢て居ります。お話しかわりまして丈助の妻お仙（實は倉吉の女房）は喧嘩の仕度金調達の爲めに古河の大親分高砂

屋安藏の家へと參りましたが、折惡く安藏が不在にてはたと途方に暮れて居ります、だが女の猿智惠とやしまして、斯ういふ時に自分が働らきのほどを見せて、天晴れ姉子と多くの子分の者どもに褒められたき一心にて、二百の三百のと云ふ大金はまとめらないでも責めては小百兩も懐にして立歸へらんと思ひまして其の足で直ぐさま自分の弟、の長之助と云ふが其頃ほひ矢張り古河町に住みて養賣酒屋を營み居りましたを幸ひ、其處へ參いりましていろ〳〵と頼み入れました此の長之助も元より他に金貸すほどの身分でも有ませんし、又薄〳〵ながらも姉が昨今の不品行を聞き知つて居りましたから、左してうれしいと思ひませんで「其れやア事と次第に依つたら血を分けた姉弟の事ですから、店のがらくたを叩き賣つても出來るだけは爲もしやうが全体姉さん、其金を何んに使はうと云ふのだへ、よも

や汝への亭主の倉吉さんが、其樣な事を言つて遣ゐす筈はあるめへが」と急所を刺されましたからお仙はギックリ今更に及んで實は密夫丈助が喧嘩の仕度金にとも言ひ兼ねて、頻りにもじゃもじゃとして居ましたが言ひ出さなければ肝腎の金の工夫が付きませんからと思ひ切つて膝を進めて「長之助まことに面目ない事だが、不圖した心の迷ひから塚崎の丈助と云ふ、汝へも知る通りの無類者と心安くなつて正直一方な本夫ばかりか、西も東も辨別知らぬ乳呑兒までも振り捨てし、一旦丈助の手許へ逃げ出しては行つたものゝ何がサテ愈よ〳〵其内幕へ這いつて見れば愛憎の盡きた事ばつかり、一つ間違へば笠の臺に別れなければならないかと思ふと妾しやア本統に此の一月二月生きた空もありやアしない、如何かして元の通り倉さんの方へお前にでも詫びを頼んで戻りたい〳〵と思つて居る矢先へおまへ降つ

て湧いたる今度の出入さわぎさ、トゞの收りは如何なり行く事か知らないけれども、一文なしの妾を見掛けて是非共今日の夕刻までに百両の金を調へて來いとの難題、無理とは知りつゝもそれを承諾つて出た妾の心では、其の金を當座の手切代りにして、サッパリと丈助の手を切つて了ふ好い潮時と思つたから厚皮間しいと知りつゝも恥面拭つて汝への許へ頼みに來たんだが今までの妾が不埒は嘘かし腹も立たうけれども何とかそれを一工夫してお呉れではないか」と嘘を八分にまことを一分の當座の辨茶羅を並べました、默まつて聞いて居りましたる長之助は何に心に思ひ當りましたと見へ「姉さんそして喧嘩の對手と云ふのは一体何處の身内なんですへ「サア妾も委しい事は知らないが、たしか對手は邊見の小旦那とやら云ひましたよ」「ねッ、そんなら生井身内の貞藏が對手なのか」と長之助は何んた

が驚ろきまして「然うだ」と思ひ出したやうに己れい小膝を叩いて「姉さん金の事は私が呑み込んだ、心配せずに待つて居なせへ」と言いまして簞笥の底から赤總の付きましたる十手を取り出し、笏と羽織の下へ是れをかくしたが早いか、戸外を目がけて疾風の如くに駈け出しました。

第五席

邊見方の同勢五十余人は難なくも見當ての場所なる一の竈へと着いたしまして、先づ石橋の手前に假りの溜り所を設けまして篝火を焚き立て松明を照らして塚崎方寄せて來るのを今かいまかと待ち構へて居りましたけれども、斥候に出して置いた子分の者も今以つて一人も歸つて來ませんから、氣早の彌藏は自烈体さうに舌打をいたして、「哥兄歳蔵ぢやアねへせ、如何したつてねんだらう、塚崎の奴輩は、日が暮れてから最うふ一時に成るだらうぢやアねへか、喧嘩の作法にや違ふかと知れねへが、搦ふ事たアねへ敵の本陣まで乗り込もうぢやアありやせんかと言はれて彫常も傍から同んなじように「兄弟の云ふ通り、此様な處で待ち疲れて居るより、其方が寧そ手取り早くッて好いかも知れねへ」と貞藏を急き立てました、貞藏は只だ笑つて居りますばかりで、背中に負ぶつたる倉吉の子を愛して居りますのみにて更に何んとも返事を致しません、二人も少しく張合抜けて其まゝ口をつぐみ居りました、斯くて又半時あまりも過ぎますけれども、塚崎の方よりは矢張り何とも知らせがありませんん、流石の貞藏も少しく不審と思ひ今まで待つても出張つて來ぬへにやア、何か塚崎方にやア内輪揉めでも持ち上がつたよ違へへ併し自分の住居にまで火に放けて覺悟を見せた丈助の

野郎が今更になつて立怯れるでへ筈はあるめへが、斯うなつた上は仕方がねへから、皆の云ふ通り敵の本陣へ切り込むと爲やうせ」鶴の一聲に一同ッと鯨波を作つて押し出れうといたす時、何者が言ひ出したともなく仲間の内にて「お手當だお手當だ、八州のお出張だ、逃げろ〳〵、逃げねへと首の別れだ」とつゝけざまに呼び立てる聲がするに、寢耳に水の小旦那貞藏、膽を潰ぶして橋の側に立つて居りまする柳の下枝に小手をかざして、古河町の方をば見まするとも、紋決然とは分りませんけれども、一對の高張提灯を眞先に高く揭げて十人余りの同心何れも身輕るのこしらへにて、ぼ用の提灯に道を照らして、此方を目掛けて參いりました「南無三寶手當だ、手當にまされなしだ、オイ彫常彌藏、縱ひ刀は鞘を拂はねへまでも、ば城下を驅がした罪は同一だ、捉まつちやア面倒だから手前達から先へ野郎等を引き連れて逃げ

て呉れ、ナアニ己の事ア心配するにやア及ばねへや、罪は己一人で脊負つて立つて、此地を一先づ立ち退くばかりの事だア、早く〳〵」と手を打ち振りまして急き立てましたから「そんなら哥兄、兎も角此の場は落ちるに定めやう皆んなもドヂを食はねへやうに賴むぜ、そして哥兄お前か背負て居る其の小悴は如何始末を付けなさる氣だ」と彫常が氣遣ふ言葉を耳にと掛け丈「何んでも宜いから、早やく落ねへ〳〵、ナアニ若へ奴輩は大抵最う結城から下館の方角へ逃げて了つたと、それせへ聞けば一安心だ、己れは是れなら緩つくりと仕度を仕替へて、到底他國へ立退き次手に塚崎へ回つて丈助に出遇ひ、五十余人の大の男に無駄骨折らせた返禮をした上、次第に依つちやア此子を土產に置いて來る氣だと露ばかりもおぞろき慌てる氣色もございませんの。子分兄弟分をこと〳〵く逃がして、自分一人所へ踏み止まつた貞

蔵は捕手の大勢が押し寄せて來るを目の前に見ながら、少しも驚ろきませんで、喧嘩支度を手早く取り捨て、脇差は有り合せの酒ごもに包みまして小脇に抱へ込み、小兒はわざと懷ろに抱いて手拭を深くかむり、一寸見た處で此處等邊りの百姓のように姿をこしらへて追〳〵と近く相成りまする捕方の方をば横目に掛けまして笑ひ「彼アして公然に高張提灯で出張つて來るにや、言ふまでもなく氣を利かして逃げて了へと云ふ謎ぞなんだらうが、馬鹿〳〵しい事になれば成るもんだ、一体全体何奴が訴人をしやアがつて、此樣な事に成つたんだらう、幾ら腰拔が揃つて居やアがつたつてよもやに塚崎方の奴輩が訴人して出る氣遣へもあるめへが、何んにしても此のまゝにして手を引くなア喰ひかけの餅を半分どんびに淩はれたやうな心地がして可笑しくねえ、間違つて取つ捉つたらそれまでの事だ、己れ一人になつた以上は、他に迷惑のかゝるまつちやアねへ、一番遣るところまで遣つて見やう」と一旦量見を定めましたからは、鐵砲を胸板へ差し附けられても後へは退かぬ邊見の貞藏、早くも塚崎の方へと駈け附けましたが此時は最早捕手の面〳〵橋を去る二三丁の彼方まで進みて參りまして、今しも東の山の端を離れし十六夜の月影に貞藏が後ろ姿は明〳〵と捕手の者どもに見ゑて居ります、「何が如何した高砂屋の親分が不在で金の出來なかつた事を何十遍繰り返へしたつて、糞の役にも立つものかへ、それから弟の長之助の許へ立ち寄つて如何したてんだ、ナニ金の調達を頼んだ、出逢たのか金は出來ねへが、赤總の付いた鐵棒を腰へ挾んで戸外へ駈け出したッきり、何時まで過ぎても歸つて來ねへから、仕方なしに戻つて來たと吐かすんだな、容を見ろへ、手前の弟の長之助てねなア、それやア必らず目明しの下廻

りか何にか仕て居る奴にちけへねねのだ、金のこたア呑込んだなぞゝ手前に油斷を喰はせて置いて、親方の許へ注進に行つた相違ねねのだ、然うと極まりやア愈よ〳〵斯うしちやア居られねへ己れ一人で上の手が廻らねへうちに貞藏の溜り所へあばれ込み、片端から雞切にして、それでも敵はなけりやア腹掻切つて果てるまでの事、お仙手前の面を見るのも是れ限りだぞ、サア己れに續かうと思ふ者はつゝけ、命の惜しい奴は來るに及ばねへと思ふ事嗚の嘴と喰ひ違うて只さへ心の燥ちたる丈助、今又お仙が弟の所へ立寄りたる事の次第を聞いて、一層自暴の度を增し此上は只狂ひ死に死ぬまでも、遺恨の積もれる貞藏をば、一太刀なりとも怨みて呉れようと、定めるお仙の手を拂ひまして、抜刀を提つさげて暴れ出る有樣は實に獅子奮迅の勢ひとは是の事をヤすのでありましよう、〔言ふまでもねね事、親分一人を殺しにやつて堪るもんですか」と斯る事には鐵石よりも義理かたきところの子分一同、所は醉ひ潰ぶれて居りまする伊勢の五郎を除くの外は、皆〳〵丈助の跡へと繰り出しました、斯く致して此の同勢が塚崎の村外れなる一軒茶屋の前まで差しかゝりまする折柄、貞藏は一人にて乳呑子を抱へて、悠〳〵然と向うから參いります初めはそれと心附きませんでした塚崎方は、無論其處等の小百姓で有らうと思ひまして其まゝに行き過ぎようといたしましたが中に一人眼の早やき者が居りまして、それと悟つたから仲間の者に此事を話すと「其れ逃がすなッ」と大勢にて貞藏の周圍を取卷きました、

第六席

斯く成る事とは百も承知の貞藏は、身は五十余人の大勢の爲め

に取卷かれて一度に拔き拂ひましたる白刃の光りは月影に輝めきて秋の野の芒にも似て居りませうか、眞中に取卷かれながらも酒ごもに包みました自分が帶刀を拔こうとする氣色もなく「野郎輩騒ぐにやア及ばねへや、單身で敵地へふん込むだからには、骨は汝輩に拾はせてやる覺悟で來たのだ、一寸でもそれから先へ進むで來やアがると睨み殺して臭れるから然う思もやアがれ、ヤイ丈助折角手前が家に火迄も放けて對手にならうと云ふ殊勝げな心に免じ八州方の手が回つたのも攝はず、態ざ〳〵此處へ出張つて來て遣つたのだ、お互へに言ひ分を並べて居る間に八州の手に取捉まつちやア本意ねア話だ、尋常に己れと貴樣で勝負を決つしやう」と言ひながら此時初めて酒屋の刀を取り出しまして「時に丈助手前に取つちやア此の子は何んでもねかも知らねへが手前が女房のお仙の爲めにや切つて

も切れねへ實の子だ、茲で己が手前に切り殺されりやア彼の正直者の倉吉も此の土地に居られねね、何處へ立ち退くにしても乳呑子を抱へちや埒が付くめへ、處で又己が手前を打放せばお仙は言はずと知れた獨身者だ、男と逃つて只つた一人の乳呑兒位い育てゝ育てられねへ事もあるめへから、手前も己も息のある間に此子だけはお仙の手許へ渡して置きてねのだ、何んと丈助、出入は出入り慈悲は慈悲、罪科もねへ此子に母親の乳を飲ましてやつて呉れ、そればかりア己が方から頭を下げて頼むのだ」と下手に出られましたので是れば仕方の丈助もいやと言ふ譯にはまいりません「餓鬼の事なんぞは如何とも勝手にするが宜いや、此方は手前の爲には一度ならず二度三度泥を塗られた返禮せねすりやア胸が濟むのだ」と貞藏が子を抱き下ろす間さへ我慢が仕切ませんで「覺悟ひろげッ」と言ふより早く

太刀風するやく貞藏を目掛けて切り込みました「ヤイ〳〵丈助、男と男の出入りに、不意打は未練だ」と心には一寸の油斷もありませんで貞藏ヒラリと身を替して小兒を茶屋の軒下に投げ出し是れも直ちに扱き放なしました「親分確乎遣りなせへ生兵法の貞藏は是れけだの同勢で切り捲られたと云つちやア未世代の面汚しだ」と丈助が味方の者輩は口先ばかりで虚勢を知らせますれど、元より貞藏は幼なき頃より劒術をたしなみ、十七八才の頃より何れの喧嘩場にても負けた事のありませんなかに一人と一人の太刀打にては丈助の及ぶ處ではありません〳〵始終丈助の方が受身になつて退り〳〵て我れ知らず足元を流れて居りまする用水堰の深間へ仰向けざまに轉げ落ちました貞藏は此時なりと躍り込んで只一刀に切下ようとする處をそれ親分が危ないぞと三方四方より貞藏一人を目掛けて無二無三に切り込むで呉る大勢の者ども、ナニ小癪なと渡り合ふ貞藏一軒茶屋の前通り一面の田面は忽ち修羅の巷と相成り何れも血眼になつて馳せ違ふ折柄「ゆ用だ神妙にしろ」「ゆ用〳〵用」の掛聲が起りましたから「其れ手當だ」と塚崎の同勢は忽ち同心衆が縄にかゝり殘る二三十人は蜘蛛の子を散らすやうに逃げ出しました茲に間々田驛の外れに近頃旅人宿を開業致しました久五郎と云ふ男がありまして、表面は堅氣を粧ひて居りますれど實は矢張生井彌兵衛が子分に致して彼の貞藏とは兄弟分の盃を交しました一人で、今宵は泊りの客の少ないもんで近所の賭博仲間四五人を集めて遊び半分の小賭博を致して居ります夜の更けるのも知らず何時の間に午刻過ぎとなり、勝たる者は鼻息荒く、負けましたる方は青菜に塩の悄〳〵然として立ち歸り跡に久五郎一人女房のお柳を對手に寢酒の一酌、チビリ〳〵と

傾け始めました、折柄表の戸をドン〳〵と打ち叩く者があります久五郎之れを聞き附け「何方かは知りませんが今夜はモウ宿みましたからお斷りします」と立も上らずいたして跳附けました「オイ然う云ふ聲は久公ぢやねえか貞藏だ邊見の貞藏だから明けて呉んねへ」と息の苦しげなるに久五郎は驚き「ナニ哥兄だ如何して今時分」と膳を押し寄せて戸を引明け「ナニ小旦那に逢へねへマア上んなせえ何處か怪我でも爲てるのぢやねへか「ナニ怪我も何にも爲ねへけれども塚崎から茲まで盲滅法に駈けて來たからそれで息切がする、のよ「ヤッ塚崎と云ひや、彼の邊で押し手の利く奴は丈助より外にやあるめへが其丈助なら哥兄が平生別懇の中とやアねへか「然うよ其の懇意にして居た丈助の野郎と詰らねへ事から出入を始めて實は今夜塚崎まで押掛けて行つたのだ處が聞いて呉んねへ間のわるい

時にや惡いもので忽ち上の手が回つてアノ一件さ、それでもマア捉まらなかつたことが拾ひものだ何處道己れは當分此の地を立退く外はねえのだ就ちや一度古河へ歸つて親分や兄弟に、も遇つて行きてへと思ふんだが其樣な事をして返つて皆なに卷き添へを喰はせちや氣の毒だから手前に一切後々の言傳を頼んで是れから直ぐに奥州筋へ高飛をする積りさ「成程古河が領ぢや喧嘩と來ちや夜盗人殺しよりも重く扱ふと云ふから温度の醒めるまではそれも宜からうだがそして哥兄對手の丈助は如何しなすつたへ」それやア丈助の野郎の息の根を止めてからの事と思つたので態々塚崎まで押掛けて行つたが何を云ふにも多數に無勢で殘念ながら野郎を取逃して了つたよ其處で手前に頼みと云ふなア別ぢやねへ今夜のさくさ紛れに己は大變な忘れ物をして來たのだ夜が明たら手前に一つ塚崎まで

行て見付て來て貰ひてへのだ「それや哥兄の命令なら塚崎はおろか江戸までいも行つて來るが忘れ物てへなア何樣な物を」「ナアニ小兒を一人置きッ放しに爲て來たが其の成行が案じられてならねへのだ」と何處までも彼の小兒の上を案じて居ります

る貞藏が心ざし實にまれなる心立でございます。其頃古河の城主土井大炊頭殿の藩中にては博徒社會の喧嘩を取締る事頗る嚴重にいたして其發頭人なる者は夜盜殺人の罪人と同じく打首輕きも遠嶋終身の刑に處せらるゝのが常でありますす貞藏も斯る事にて一生を牢舍の内に果つるのは愚氣て居ると思ひまして一先づ奥州の方へと高飛びして時節の到來を待つより外にはないと覺悟をいたし、首尾よく間々田に居ります久五郎が處まで落て參りましたなれども彼の一軒茶屋の軒下に打捨て參りましたる小兒の身の上が心配に相成り久五郎に頼みて

翌る朝丈助が成行を探らせ旁〳〵小兒が安否を糺して貰ひました丈助も矢張昨夜のうちに八州の手當を切抜けて上州邊へ高飛をいたしました事、又小兒は一軒茶屋の婆が拾ひ取つて實の母のお仙に手渡しした事なぞを細かに分りましたから貞藏も大きに安心して厚く久五郎が心盡しを謝し直ぐに其日の晝頃出立を致そうと云ふを久五郎夫婦は無理に止めまして

「マア〳〵哥兄、よもや茲に汝が忍んで居なさるこたアばれッこありや爲ねへからゆつくり別れ酒の一杯も飲んで今夜の夜立としなさる方が人目にかゝらねへでいゝ」と眞實を面に顯はしての言葉に貞藏も振り切り兼ねまして「何から何まで飛んでもねへ厄介を掛けた上に其樣事までして貰つちや濟まねへな」と一室で久五郎と共に別れの酒宴を催し、後々の言傳なぞ頼んで居ります處へ久五郎の女房お柳が血相變へて「モシお前さ

ん妾が目違ひかは知れませんが、何だか同心衆とでも云ひたいやうな風体の人が三四人で今家の戸外を通りながら頻りに家の中を覗き込んで行きましたが若しや萬一の事があつては成りませんからお知せ申して置きます」と言ふに二人は思はず顔を見合せて居りましたが久五郎は聲を潜めて「それや何して油断のならねへ一件だが、と云つて晝日中茲を飛び出した日にや尚更目立つし、哥兄如何したもんだらう」「如何すると云つても仕方がねへから兎も角も日暮までは、穴蔵の中へでも潜つて居るより外はねへ」「其れじやア其うとしてお柳おまへは店に張番をして呉れ卿や脚半をくゝし付けて置きなよ」と逃げ仕度の評議をいをして居りまする最中に「へイお願へ申しやんす、久五郎親分のお家は此方では座へやんすか」と恐る〳〵店口を覗きて居る者がありまする、疵持つ足の三人はゞッと音を止め

て互に顔を見合せて居りまする。

第七席

お柳は氣味わる〳〵と店へ出でまして其の男の風俗を見まするに身には眞岡木綿の垢の付たる袷を着し冷飯卿履の緒のゆるみたるを穿き四十格好の實直らしい人物でございまする「ハイ久五郎は手前では座いまするが何方からお來でになりました「左様で御座りやんしたかそれおや眞平は免下さりませ」と男は框に腰を下して「そして久五郎親分は只今お宅に居さつしやりまするか私は古河の彌藏親分とでろから參りやんしたが少し此方の親分にお目に掛つてお話申してへ事がは座りやんして「オヤ〳〵古河の彌藏親分のお宅からお出ですかへそして何んと被仰いますね「ハア私で厶へますか倉吉てへ者で實は邊見の小旦

那の事につきやんして、態〳〵參つたでは座りやんす」と言にお柳も倉吉と聞きまして前夜貞藏から聞き及んで居りましたから「オヤマア然うでは座いますかへそれぢやお前さんが釋迦の倉吉さんてへのですか」と我知らず口走りました、倉吉は俄かに眼を圓くして「お前さんが釋迦の倉吉てゐ事を如何して知つて居さつしやる」と問ひ返へされてお柳はハタと口を手に當てましたが流石は遊び人の妻でありますから直ぐに氣轉を利かせまして「イエナニ宿の久五郎が平生から能く釋迦や磯部の方へ遊びにいつて歸つて來ますとね極つたやうにお前さんの噂をして聞かせますのさ「アッハヽヽヽお内儀さん在所の者だと思つて馬鹿にしちや困りやんす私はまだ久五郎さんてへお方にや一度も遇つた事せゐぬへだに如何して私が噂なんか「イヽエ全くなんですよ釋迦の倉吉と云ふ人は佛のやうな正直な人で

全で世界にや珍らしい方だつて何時も〳〵噂をして聞かせますのとお茶を濁せど倉吉は何處やらに不審の色を殘して「ハヽア然うで淨座りやんしたかそれぢや尙更幸では座りやすが久五郎親分に如何か早く遇はせて下さりやんしよ」と言ふ間も頻と四邊を見回しつ居りましたが奥の室の話聲でも漏れたのか左なくば何かそれと證據の品でも有りましたのか今まで律儀一方の田舍者らしき言葉で有りました倉吉が忽ち眼の色を變へ挨拶もいたさず、突然袂より一箇の呼子を取出し、外の方を向いて吹き鳴らしましたから一時にバラ〳〵と現はれたる捕方ソレッと言つて一散に奥の室を目掛て躍り入りました其早さ久五郎は奥にて「哥兄ぬかつた此處に搆はず落なせへ〳〵と脇差片手に立ち上りましたる久五郎、元より逃げる覺悟の貞藏は「うれぢやア頼む」と言ひ捨てゝ一目散に二階へ駈け上り裏手

の小窓を突き破つて見渡しますれば南無三寶此處にも最早人の捕方が居りまして手に十手を振りかざしてイザ來いとばかりに待ち構へて居りまする貞藏は進退茲に谷まつて美事其場にて腹を切ろうとも思ひ、それとも尋常に名乘り出でようかと思ひ、考へて居りまする折柄誰とも知らず裏手の方にてズドンと一發種ヶ嶋の小銃に打ち放したる者が有ります。耳を貫くばかりの鐵砲の響きに捕手の面々は言ふまでもなく、貞藏も不審に思ひまして四邊を見回しましたれば何者が何慮にて打ち放しましたのか更に畑の痕さへ知れませんから其のまゝ廂へ飛び出しましてさて此上は如何しようと思つて居りまするうしろにて「貞藏ゆ用だ」と抱き付きたる手先の一人「人違ひだ後悔ひろぐな」と叫びながらに腰をひねつて振り放そうと焦れど又一人前より貞藏の利腕捉へて「ば用〳〵」一つ踏み外さば大地へ轉

び落ちて五体微塵どもなるべき危險の屋の棟に二人を對手の立合ですから、流石負けぬ氣の貞藏も實に手足の出し方も失ひまして無念ながらも茲に縄目を受くるより外にない場合となりましたが不思議にも又々二發目の銃聲ッドンとひゝきますると今迄貞藏が左の利腕を捉へて居りました一人の手先はキャッと云つて蜻蛉返りをして後ろへ倒れました殘る一人も氣を呑まれて是は後退りに足場の丸太へつかまつてのかれました「小旦那様、構ふこたァねねだよ迅く逃げさつしやれ私はア後のこたァ引受けるのだから」と聲を限りに叫ぶ者がありますので貞藏は重ね〳〵の不審に見まするとこの家の裏手つゝきなる田甫の畔の大柿木の下枝に百姓体の男が居ります正しく釋迦の倉吉でありますから貞藏は驚ろいて「オ、お前は倉吉さんかやアねへか」倉吉は其聲の間へてか間へずにか、無性に鐵砲を持

たる手を振つて逃げろ〳〵と急き立てる氣色でありますから貞藏は義に厚き彼が心盡しのほどをよろこび、どうして此場へ來たのかと訝かりましたが此場で其樣な事を問ふのも無益と身を躍らして隣りへ〳〵と渡りました、倉吉は手先共の荒膽を挫き其の寄手の亂れたのを見てよろこびました、其間に貞藏は大地に飛び下りて田甫傳ひに北へ東へ九死の中に一生を拾つて志す方へと逃げ延びました、是れ實に嘉永元申歲八月十七日の事にいたして貞藏二十六才の時でありました。それに引き換へ茲に哀れなのは一夜の宿を致しました久五郎一家と柿木に乘つて鐵砲を放しましたる迦の倉吉の兩人であります就中倉吉は百性の分際を以つて飛道具を附持いたすのみかお役向へ對して手向ひをいたした段、不屆至極なりとて、即座に召捕の上、古河の城下へ引つ立てられまして、其頃古河の新牢として

永井寺の傍に新たに造られました牢舍に打ち込まれましたから生井の彌兵衛をはじめ身內の者輩に至るまで、此日倉吉が如何なるわけにて恩人貞藏が危ふき場所に出會し、又如何して飛道具など持つて居たのかとは誰一人知つて居る者はございません、

第八席

奧州二本松の城下を距る事七里許り百目木と云ふ在所に近頃何處から移りましたか世帶を持つて居る壯者があります、出入り者は多く長脇差で主人の壯者も又長脇差を放した事はなく平生五七人の食客らしき者が居ります、聞先にて其者輩を追ひ使つて居る有樣は天晴斯道の哥兄株とは見受けられます名前を聞きますると下總の金次とヤし、年は二十六才色淺黑くして

眉太く誠に男らしい男で忽ち近所に人知れず想ひを焦して居る寡婦女なぞも居りまする此の金次は渡世柄に似合いませんの女嫌でたとへ飯炊女なぞは使ひませんから見も知らぬ女より狀なぞ送りましても決して封を解くやうな事なく其まゝ引き裂いて紙屑籠の腹を肥さするので此事を聞き知りましたる町人百姓に至るまでも慎み深い金次の心の奥を知れませんせん今日しも金次は差當りたる用もないので食客の一人に肩をもませて四方山の話しを致して居ります「又手前達までが己を馬鹿にしちや困るぢやアねへか、己れだつて人間の片蝶だ、女が嫌と云ふ譯はねねが少し心願の筋があつて金刀比羅樣へ願つて居るのよ「ヘイそれぢやア願解になつた曉になれば差支ないんですね「然うよだけれども其願解きまでが滅法に長へからなア「ヘイそれでも大抵三年とか五年とか「イヤも少し長への

だ「それぢや七年「もそつと長へんだ「それぢや十年「もそつと「ぢやア親分五十年「マア〳〵其處等よ人間の一生は五十年てへから詰る處一生涯女は斷物さ、何と八百吉氣の長へ話ぢやねへか」と笑へば八百吉も笑ひまして「それぢや親分お前さんは一生涯女と云ふ者にや關係はずですかね「然うよ「其奴ア大間違だ、然うと知つたら今度の一件を請合ふぢやなかつたげに「ナニ今度の一件たア「イエナニ少しは代田の先生から内〳〵頼まれた事がは座ねましてと曖昧の中に語をにごらしましたから金次もたつてとは聞きません「手前達も男にならうと云ふ量見があつたら一生涯たア言はねへが成べく女にや關係はねへが宜いぞ、ウム女の關係と云へば與次郎の野良の一件は如何落着したかまだ聞かねへかへ「エイ與次郎哥兄の一件ですかへ彼りやまだ何方とも片が付かねへやうです」と語り合つて居る處へ飯炊き奴の

留と云ふが盛りまして「親分へ、アノ小濱の富之助親分がお前さまに遇ひてへとつて今訪ねて伊座らつしやつたが此方へお通しヤしても宜うは座へまますか」「ナニ小濱の富之助が此奴ア適切與四郎の一件だらうが」と思案をいたして居りましたが「斯ふ事アねえや、此室へ案内をしろ」金次は早速富之助を居室へ通して其用向を聞きまするに、富之助は小膝を進めて「實は金次さん外ではねへが、お前の身内の與次郎と云ふ小奴、流石は生井一家の育ち拵だけあつて萬事渡世に明るい處から私も年來目をかけて使つて居ましたが此頃開けば俺の目を掠めて小濱の驛内で一二を爭ふ會津屋と云ふ呉服屋の女房を潴着かし小使へ取をして居るとの噂さ、私も知ての通りの氣質だから初めの間は知らぬ顔に打捨つて置いたが、何分日に增し世間の噂さもはげしくなり、貸元とか親分とか云はれる富之助の代打でもしたり

中盆でも遣らかさうと云ふ男の癖に飛んでもねえ野郎もあつたものだ其樣な者をば平氣で使つて居たる富之助も富之助だと此節ぢや最う與次郎が事より私が事を惡口言ふやうな始末さ、それもナニお前と云ふ身内もなく私の手で仕立上げた野郎なら疾の昔に何とか片を付けて、口を拭いて居りや濟む話だけれども新顔ながら今頃出しのお前の身内であつて見りや、正可に其んな勝手な事も成らず、それで小濱の富之助自身に相談に出掛て來たわけだがのふ金次さん何とか工夫はありますめへかと開き直つての相談に金次もかねゝ與次郎が不始末を聞いて居りました事とて今更に驚ろいたる顔付もいたしませんで「それは親分に念の入つたお斷りで金次に取りまして冥加至極で伊座へます成程與次郎と云ふ奴は生井の孫分で私が身内に違へありませんが、たとへ身内が親子でも其樣な不仕末を働

く奴ア少しも御遠慮にやあ及ばねへ事殊に彼の與次郎は私より四五年も前からは當地へ流れ來て一方ならねへ厄介に成つて居ながら、そんな不埒を仕出來したからには尙更では座ねます親分のは隨意になすつて下せ」と「流石は金次さんだ、その言葉を聞いて私も大きに安心しました、併し彼の野郎も今が出世盛りの階子段なり眞中程まで昇つて來た處で、詰らねへ心得違へを爲やがつて思へば不憫な奴さ」と獨語のやうに富之助が云ひますれば金次は何んとも知らずして俄かに血相を變へ、上目にヂロリ富之助の面をにらめ付けましたが、直ぐに又氣を持ち變へて笑ひながら「女ゆへにや兎角失敗を仕出來しやがるのでと」是れも獨ごとのやうに云ひました、其日の夕方でありますす富之助が歸りますると間もなく金次は八百吉を呼び寄せまして「オヽ八百公か手前は苦勞でも今から直ぐに小濱まで行つて來ち

や呉れめへか」八百吉は突然なので驚ろき「へッ小濱へ、そして小濱の何處へ行くのでゐ座へやす、「何の富之助の家へ行つて他に知れねへやうに與次郎を呼び出し俺が然う言つたから今夜中に何處へか妻をかくして了へと然う言つて呉んねへ左もなければ笠の臺かオッ飛んで了ふから、それがいやなら早く逃げろつて能く〳〵然う言つて呉んねへ、それから俺を道中の小使はしろと言つて渡してやつて呉れと懷中より十兩包み一つ取り出し八百吉に渡しましして定いか分つたか富之助が此方から歸らねへうちに先回りをして行つて呉れ必ず女になんぞ未練を殘してまで〳〵して居ちやならぬと言つて呉れ」と堅く念を押して直ぐさま八百吉を出しました、此の下總の金次と名乘る者は實は邊見の貞藏で昨年八月十七日野々田の久五郎の宅にて追手に圍まれ既に用になる所を倉吉の爲めに辛くも逃れま

して此二本松城下まで落延て一時松千といふ大親分の許に食客の身となりましたが松十も然る者早くも貞藏の金次が年若に似合ぬ度胸玉の確かなるところを見込みまして同じ一卷の齋藤嘉吉と云ふが先年病死しまして今以て其の跡へ座ろうと人のないのを幸と思ひまして松十が自分は後楯となりまして金次に萬端の世話を爲せる事といたしましたが、元より浮世をしのぶ身で有りますから人目多き城下中よりも、在所の方が却て心安いだろうと此程態〻嘉吉が生れた地であります百目木に一軒を搆へるようになりました、茲に又其頃小濱の之助が弟分に八幡屋の三次と云ふ俠客があります、與次郎とは平生より骨肉の間がらで此頃與次郎が不審行といふ事を聞きました三次は自分のように心配をして兄分富之助が耳に入いらぬうちに何うとかして改心させようと、自分の家へ呼び寄せて再

三意見を加へましたが飽まで色香に迷ひ込んだる與次郎は頑と其心切がわかりませんので日頃堪忍つよき三次も茲に至つては〻愛憎を盡かして、今一邊意見をして其れでも聞かなければ兄弟の義絲を斷つと決心といたして例の通り與次郎を一間へ呼び入れまして「コレ與次郎手前と宜い加減に爲るが宜いぢやねへか何遍同じ語を繰り返したつて仕方がねへから最う俺れや言はねへ氣ちや居るけれども今日と云ふ今日は意見の言ひ了ひだ是れが茶屋の女とか何とかいふのならまだしもだが歴中とした町家の女房を盗むてねなア、それや餘り量見ふさもし過ぎるものだ、お互ひに斯んな渡世をして居るだけに然う云ふ處へは百倍義理を堅くしなけりゃ一匹前の男にやアなれねへ、それいな事は百も承知の手前が、心の迷とは云ひながら思ひ切る事が出來ねへてへなア全体マア如何したものだ」と聲

をふるはして膝をすり寄せて意見をいたしましたから面目なさそうに下俯向いて居りましたる與次郎は「哥兄、勘辨して下せへお前へに云はれる迄もねへ俺れ一人の不量見ゆへに大恩を受けた富之助親分を始めお前方に餘計な心配を懸て、實に〳〵濟まねへ事とは知つて居ながら……」と言ひかけてそつと目を小き笑つて與んなさんな哥兄俺ァ如何云ふものかして彼の會津屋の内儀さんの事ばかりは首と胴とが離れるまでも思ひ切るこたア出來ねへ、我身で解らない程だ」と半ばまで言はないので三次はブル〳〵と身体をふるはして起りまして「默れ、八幡屋の三次を見損くなつたか、手前が惚氣を聞かうと思つて態〳〵呼び寄せやしねへや、與次郎永へ間目をかけてやつたが、語を交すのも今日限りたぞ、手前はまだ知るめへが、今夜親分が百目木の金次が許へ出掛けて行つたのも悉皆手前が今度の不品行ゆへだ、こゝな恩知らずの人非人奴が、トットと此處を歸りやアがれ」と疊疊たてゝフイと戸外へ出でました與次郎は茫然として暫時途方に暮れて居りましたがまゝよ寄を食はゝ皿までだ、乍間違へば彼の女を連れ出して隨德寺を極めるまでの事だ、哥兄や親分にや濟まねへけれども、小濱ばかりが日も照るめゑ」と打ち領づいて、是れも程なく三次が家を飛び出し上町の方へと急いで行く折しも、モシ〳〵其處ゐ行くなア與次郎哥兄ぢやアありやせんかへ」と聲を掛けながら後ろの方より駈けて來る者があります、

第九席

與次郎は我が名を呼ばれまして何心なく振り返りますれば是れや彼の金次の子分の八百吉で沙座いますに　與「オヽ手前は

八百公今時分何處へ行くのだ　八百「ヘエ何處へ行くのでもねんで哥兄に至急な用があつて態々百目木から今さ來た處なんで　與「ナニ俺に急な用たア　八百「ヘイ別ぢアねんですが哥兄一寸耳を貸て下せゑ少し他聞を憚かる事なんだから　與「ウフ、、、、剛勢に改まつた物の言ひ方ぢやアねゑか」と與次郎が耳を差出すれば八百吉は四方に身を置きながら低聲になりまして親分金次よりの言傳てを告げ且つ懐中の十兩を手渡いたしますれば與次郎は押戴きまして是れを收め　與「イヤ恐れ入つた八百公歸へつたら親分に宜しく言つて呉んねゑ八百哥兄ろれりや承知しましたがお前さん其金てもつて又女なんぞと巫山戯散して居ちや不可ませんせ親分が能く〳〵念を押して遣しなすたんですから其親切を無にしねゑやうに爲て下せゑへよ本統に他事ぢやありませんから　與「大丈夫だよ八

百公手前が三里餘りの道を態々斯して來て呉れた親切に對して其樣義理知らずの事ア出來ものかな、安心して歸つて呉んねへ」と眞面目に禮を述べまして其場は八百吉と立ち別れました　が、思ひがけなき十兩の金子が手に入りました嬉しさ、れか、八百吉の後影の見ゑずなりまするまで足爪立て見送りました　與次郎、幾度となく其方を伏拜み　與「ア、流石は二本松の松十親分が見込んで取り立てたはぢあつて、金次親分は屆いたものだ俺れと金次親分とは、ホンの生非の一卷と云ふ名ばかりで平生の交際せゑも祿々にした事もねゑ此の俺に十兩と云ふ金子まで送つて呉れて今夜中に姿を隱せと云つて遣して呉れた親切は普大抵のわけぢやねゑ……が然し待てよ、俺も彼の女ゆへに斯樣な事になつて了まつたのだ今更此の土地を見捨てるくれゑなら獨て逃るなア白痴の皮だ金次親分の樣に反くのも濟

ねゐが正可富之助親分だと言つて今夜百目木から歸つて來るが早いか直ぐに俺れを切り殺して了はうと云ふ程の手筈もあるめゐ」と獨語を云うながら俺れの首頸を靜と抑へて「イヤ、然うでもねゐ普通勝れて物事に呑込の早い金次親分が態々八百吉を遣して呉れたからは餘程事が急になつたと見ゐるそれに親切に金子まで斯うして送つて來たのだ、マア〳〵何方道旅の仕度を調へた上の事だ」とそれからいたしまして窃かに親分富之助の部屋へ引き返しまして見ますれば薄暗き行燈の傍に一通の艶書らしき物差置て沙座いますれば不審ながら取り上て讀下しますれば名前こそ記してはありませぬが正しく會津屋の女房よりして遣しましたるもので　與「何んた大々至急に遇ひてゐ事か出來したから、今夜中に是非裏の木戸まで、難有てゐ此方でも大々至急に遇ひてゐことが持上つた矢先へ斯うい

ふ手紙が來るてゐのは愈々天道樣が彼の女と一所に逃けろと云ふ導引して下さるんだろう」と親分兄弟分の意見さへ感じませぬ與次郎は懇しき女の艶書と見ますより精神忽ち愚となりまして貞藏の金次が折角の心盡しも頓と打忘れました如く一刻千秋の思ひで只管夜の更るのを待て居りました。小濱驛に會津屋とヤしまするは同驛中でも一二を爭ふ富豪の呉服店がは座いまして主人の名を利兵衛とヤ妻はお辰家付の娘て我儘氣儘の限りを盡して育てられました上に金錢の自在なる處から自然と品行自墮落に流れて是まで既に店の小厮などしあられもない浮名を立てられました事は本夫利兵衛も萬更知らないでは座いませんが雙の身の悲しさ出來得るだけは穏便の手段を取りまして會津屋の暖簾を汚さぬやうにとのみ心掛て居ました、然にお辰はそれを宜い事と思ひまして亂行日

に增し甚だしく本夫が餘所ながら意見など加へますれば却て返對に逆捻を喰はせて出て行けかしの惡口雜言に利兵衛も殆んど持て餘しまして今更小棟三合の身分を唱つのみでは座いません。之れはまだしも近頃お辰が血道を上げて束の間も忘れ得ざる情夫とやまさは即ち彼の富之助が中盆役を勤めまする野州生れの與次郎にて月の內には二度三度つゝも用に托し女の身の只一人で他行し驛內の小料理店又は旅籠屋などにて與次郎も密會するが常で彼座いますが元より二百戸にも充たざる田舍の驛のことで噂さは忽ち夫れからそれへと擴まりまして今では最早誰一人として知らぬ者もなく利兵衛にまで內々右の始末を注進する者も多く座いまして堪忍强き利兵衛は默すに默しかねまして幾度か親類會議を開きまして此身が去るかお辰を隱居させるか二つに一つの處置をなさんと決心して

は見ますものゝ斯く益々事を表沙汰にする上は俺れが無意久地をさらし出すの道理と夜の目も合さず思案を凝して居ましたお辰も流石それと氣取て本夫より切出されぬに先に此方より一と工夫回らすに如かじと偖こそ俺れが腹心の下婢に命じまして與次郎が許まで今宵忍び來いとの手紙を遣りました、そこで與次郎は夜の更るを待まして窃かに旅立の仕度を調へまして案內知つたる會津屋の裏木戸へ忍ゆきまして內の容子を覗ひ居ますること小半時ばかり過きまする頃裏座敷の雨戸を窃つと繰り明ける音のいたしますれば與次郎は的切お辰に紛れなしと飛立つ胸を押鎭めて持ち居りまするとは知るや知らずや內より木戸の扉を開て咳拂ひし乍ら出て來りましたはお辰にあらで雲突くばかりの大男でありますのに與次郎は案に相違したものですから、急がしく身を小唄き方に潛めまして夜

目ながら瞳を凝して篤と其の風姿を見ますれば何處となく親分の富之助に似ている處があります、一度は驚き一度は呆れて暫くもせずに居りました　與「偖てはお辰の畜生阿魔奴が俺れと彼れ程の堅ひ約束をして置きながら何時の間にか親分の富之助と痴々繰りあつて居やがつたのだナ道理こそ今迄それほど喧しくも言はなかつた親分が急に態々金次親分の處なんぞへ出掛て行つたのは俺といふ邪魔物を無ゐものにして了うといふ下心に違ひねゐのだ、汝れ今にもあれ此處出て來やがつたら如何して奥れるか見て居やがれ」と拳を固めて木戸の内をジット睨めつけました又も小半時ばかり立ちまして雨戸をスル〳〵と開く音がして、やがて足音微に出て來る者があります　すれば與次郎は今度こそわと扉の蔭に息を殺して篤と容子を窺ひ居りますれば　お辰「與次郎さんお待ち遠たつたろう」と

低聲に會釋しつゝ手に持つて居まする金燈籠をフット消して「合憎今夜は裏座敷に餘計なお客くがあつたものたから遲くなつてすまなかつたねエ」とお辰は嬉しげに與次郎の傍へ摺り寄りますれば早くも與次郎の旅仕度に氣がつきまして　お辰「ヤ〳〵與次郎さん、お前何んたか妙な裝束をしてお在でたねエ笠を持つたり合羽なぞを着てサ」と一方ならず不審の体に與次郎は始終勃如してお辰の顔を睨め付居りましたが漸やく此時身動き一つして　與「お辰さん是れから直くに逃げて呉んねゐ」突然の相談に相擊のお辰も稍、呆氣に取られて　辰「エッ是れから直ぐに逃げろとお言ひのかへ　與「厭たと云ふのか　辰「イエ厭どころぢやない妾の方から頼んでも連れて逃て貰ひたくて實は今夜お前の來るを待ていたのだが今が今といつちやあんまりそれやお前」と躊躇ふ言葉を與次郎は皆なまで聞かず　與

厭やだらうよ、厭なのも無理はねゑや、ヲイお辰さん自分のことを棚へ上て置て言ふぢやねゑがお前は能くも俺を欺しなすつたな」と思はず聲を張り上げますればお辰は慌てゝ與次郎の口を抑へて　お辰「マア〳〵お前靜かにしてもお呉れよ若しや家の者にでも知れると困るぢやないか　與「搗ふもんかへ家の者に目付られて茲で打殺れて了ふ方が餘程と氣が利てらア　お辰「モシ與次郎さんお前の言つてる事は妻しにやサッパリ解からないヨ、全体マア、如何したといふんだへ　與「如何したつて大きにお世話だ手前の胸に聞て見るが宜いやお前が今夜逃げるのが厭やだと言ひや仕方がねゑから此場でお前を叩き殺して俺れも美事死んで了ふまでの事だ、長年世話を受た親分富之助に楯を突くと云つちや濟なゑが、戀と仇の富之助の野郎を打たざられるのを待つてるはどの野暮はしたくねへつもりさ」と他

まで厭味みの限りを盡しますれどお辰は合点ゆかぬやうすにお辰「ナニ戀の仇の富之助とは、それやお前富之助さんと可笑しな事でもあるやうなお言ひのかへ、ヲホヽヽヽ間違ひもそれ程まで間違へば可笑くなるねゑ　與「空惚けるねゑ其樣なら言つて聞かせるが只つた今此の木戸から出してやつた男は彼りやア何者だ　お辰「エッ只た今此木戸を……」とお辰は少時思案に暮てをりましたが　辰「妾の方には心當りがないか今夜裏座敷へ來たお客は富之助さんかも知れない　與「吐せねゑ口は重實な者だ知らぬ者を強て聞こうとは云はぬ代りに是れから逃るか逃げぬかサア返事をしろ　辰「だから今夜一晩待てをくれナ　與「今夜一晩待呉れへなら此仕度はして來ねゑ」と與次郎はお辰が細腕を捉へて無理に無体に裏田甫へと引き摺り行きました。

第十席

斯くいたしまして其翌朝にあひなりますれば會津屋では女房お辰の姿が見ゑませぬのに家何中は宛然鼎への沸返る大騒動となりまして番頭小僧下婢下男をはじめといたし暖簾での者雇親族誰彼に至る迄も手に手を盡して近郷近在の心當りを詮議いたしますれど其の功もは座いませんでした其當座四五日が間に稼業も殆ど休業同様の有様で勿論主人利兵衛はお辰が今度の逃亡うに就きまして心は窃に會得する處があると見へまして驚きまする内にも何處となく落着拂つて　利「皆なが然うして心配をして呉れる親切の段は粗略には思はないが今に自然に知れて來るだろう、打捨つて置て呉れるが宜い」とばかり他の心配して呉れる十が一だと胸を痛むる容子も見へません

肝腎の旦那様が彼やうに落着いは座るからに何にが目的のあることであろうと果ては一同も手を引きました、それからいたして十日ばかりも打過ぎました頃、或日利兵衛は上等の呉服物二三反立派な袋斗を添へまして丁稚の駒吉と云ふに背負せ俺れも垢のつかぬ衣裳を着替へ店を立出まして程遠からぬ富之助の家を訪づれました幸に富之助も在宿にをりましたゆへ内へ通りまして先づ駒吉に持たせたる產物を差出しますれば、富之助も幾度か辭退いたし　富「會津屋ともあらうお宅の旦那が我々風情の住居へお訪下さるさへ勿体至極もは座いませぬのにお土產など頂きますおぼいは毫頭は座いませぬ　利「イヤ富之助殿此は私が初てお訪ねヲたホンノ手土產先づ〳〵納めて置て下さい就ては先達て中から種々此方にも心配を掛た女房お辰の一件私が不取締ゆゑとは云いながら到底聞き及ばしや

る通の譯柄ゆへイヤモウ世間へ面出しがならぬ場合となつて我ながら愛想のつきた始末今更お辰に未練を殘すなどと云ふ心は露ほどもなけれど悲しい事には彼は居付私は入聟如何も世間へ對しても此儘打捨て置きかねる場合もあるので態々今日は此方の智惠を借りに來ました」と疊へ頭を摺つけぬはかりに言ひますれば　富「これはしたり旦那樣飛んでもない事被仰ります、詰りは此樣事には成ろうと存じましたゆへ些と手暴へ仕事とは存じましたれど。彼の與次郎の野郎を首にした上で貴方樣へお詫を爲やうと存じましたに却て野郎の爲に先を越され此蜂取らずに成りましたので貴方樣も嘸ぞ賴み甲斐のない男だと思召したでは座いませうが。まさか彼の曉の中に與次郎の野郎がお內儀さんを唆のかして姿を隱さうとも存じませぬ油斷をして居りましたのか富之助一生の不覺では座いました其代りや旦那樣、茲で七日間の御猶豫を頂きさせなすれば縱へ彼の二人が蝦蟇松前の陣に匿れて居りましても屹度探出してお內儀さんは貴方の手へお返しヤし旦那樣のお顏へ土を塗ました彼の與次郎奴は美事首にして貴方のお顏の立つやうに計ひますから必ずは懸念なせなするな」と屹と承諾ひまする義俠の一言を利兵衛は小膝を叩いて打喜びまして　利「富之助殿嬉しうは座る其語ばだけでも私は最う重荷を卸したやうな心地がしました　富「旦那樣其のお褒め語はお內儀さんをお連れヤして來た時の事、七日の後までお預けヤして置きます」と大口開て呵々と笑ひました利兵衛は用談の濟むと間もなく暇を告げて立ち歸りました富之助は自身上り框まで送り出しまして再び元の居室に退きまして兩眼を閉きたるまゝ思案にをしてをりました　「モシお前さん大變な事を引き受けてお了ひだね、と

突然間の襖を開て出て來たのは富之助の女房で富之助はヂロリ尻目に睨て苦笑ひをいたましたが忽ちに又下俯に當惑の眉を蹙め　女「ねゝお前さん女の差出口とお叱りか知らないけれど會津屋の旦那に彼アして立派に約束をお爲たからは少しは與次郎の居所でも當りがついての事かへ、と重ねて問へども返答なく　女「お前さん他の人と違い對手は會津屋の旦那樣だよ小濱の富之助とも云われる貸元が彼れ程に堅い約束をして置てお約束は致しましたが七日經つても知れませんでは座いますとおめ〳〵何の面下げて行かれるものでもあるまいに、と執念も問ひまするも將來へ案じまするる妻の赤心流石富之助も無下に叱り飛ばしもならずいたして澁々ながら面を擡げて富「貴樣に似合ねゝ當てがある位なら七日の猶豫を言出しや爲ねゝや　女「其樣ならお前丸で當なしなのかへ　富「然うよ雲を

掴つかむやうな探し物さきにはお前旦那樣に何の面下て　富「そこだ貴樣は如何感づいたが知れねゝが遂いぞ來たことのねへ會津屋の大親玉が態々此んな立派な土產物を持て來たのは云はゝ此方の痛たくねへ腹をさぐるに違へねゝへのだ實は先達て俺が百目木へ行て歸つて來た晩に會津屋へ立寄必ず與次郎を首にしてお詫を致しますと堅く約束して家へ來て見ると最う與次郎の妻が見ねねサア翌日の朝になつて見ると案の條お辰さんを連れ出して駈け落ちして了やがつたろう、其處で會津屋の親玉は適切己が二枚の舌を使て與次郎の野郎を取り逃がしたものと斯う相塲を定めて居るに違ひねゝのだ考て見りや無理もねへ話しよだから俺の方でも一番其上を越して今のやうな返辭をして親玉を詰したものゝ如へて見りやチイット向ふ見ずかも知れねゝ　女「そうして若しや知れながつた曉

女「考て見なくつてもお前九州の果てに居るが中國の眞中に居るか分らない人間が如何で七日や十日の間に知れつてあるものかねへ　富「然うよなア、と富之助は又も兩腕を拱て無言の初めに返りまして暫時してア、と溜息を吐きまして　富「お喜代酒を一杯燗をして呉れと詮事なしに酒の力を藉とする時「哥兄其心配に及ばねへ燈臺足下暗しで今日までは些とも知らずに居たが奥次の野郎の隠れ家は只つた今内の若へ奴が突き止めて來ました。とガラリ格子戸を開て入り參りました一人見れば彼の八幡屋の三次でお座いますに夫婦は驚て　富「ヲヽお前は八幡屋如何して野郎の在所を　八「ナニノ意外ことから手掛りがついたんだが此處から一里と隔てねえ栗山在の山の中に蟄つて居やがるとの話だ　富「エッ栗山在の山の中にそれとや眼と鼻の間とやねへか油斷して取逃しちや取り返しがつかねえ

から直ぐ是れから　八「哥兄彼の青二才の一匹位い俺達の手を下して後ッ〳〵のさつどう喰ふのも可笑くねえから若へ奴等を五六人能く言ひ含めて遣る方が好からうせ　富「イヤ〳〵そうでねへ對手は何んな木葉野郎でも女は會津屋の旦那から預りの品だ間違があつては辯解がねへから、俺が自身で出かけて行く氣だオイお喜代部屋へ行て野郎等を二三人呼で來てくれと言ひつけました。却説もいたしまして彼の邊見の貞藏事今の名を下總の金次が身内なる野州生れの奥次郎にをきましては一時の迷ひとはヤながら主ある花のお辰の色香に現を抜かしまして金治親分の折角かく路用まで送りくれました大恩を思もはずいたしてお辰と共に手に手を取るやうな不量見を起しまして彼の夜謀らずも會津屋の裏木戸より高尾よくお辰を連れ出したはいゝがお辰の心では到底幾万と云ふ身代を見捨てゝ

男と共に立退く上は少くも二年三年の間は寢て居て喰はれるだけの金を懷中にして後のことゝ云ふ野心のあつて與次郎に向て其事を說き勸めましたなれど與次郎の方とは一日の猶豫も出來ないとの事情からそういふ事とならば寧そ此處四五日は近き邊りの山中へ姿を隱して深夜會津屋の金庫に忍び入り思ふが儘に金錢を盜み出して然る後に志さす方へ國越しようと不敵にも又淺果の考へを起しまして相談共に一決いたしまして二人共々其夜の明けぬ暇に小濱より一里ほど東に隔りまする栗山在の山中に落延びましたが其の山中にはおたつが永年見世へ薪炭など商ひに參りましたる六右衛門と申炭燒の老爺を便り少なからぬ金子に與へまして當今二人共に匿ひ呉れよと申ますれば六右衛門は深き仔細のあることは知りませぬから金子と云ふものために眼が眩まして

六「宜うございますとも〳〵酒屋へ三里豆腐屋へも三里と云ふ此山里お前方さへ物の不自由と汚ろしいのを我慢さつしやれば私の口からはハテ舌の根が麻てもしはしねと二人がためには此上もなき賴母しき一言で涉座います茲に一と先草鞋を脫きまして小濱の容子を伺ひをりますに一時は中々會津屋でも金太郎でお辰を探しましたが六日が七日と段々日を過て十日も過た今日となりましてはパッタリ噂もなくなりました與次郎とお辰の兩人はそろ〳〵此方の時節に向て來たと窃に胸を摩て居ります、丁度十二日目に朝の事とお辰は餘り一室にばかし引籠て居るも身躰毒と思ひまして裏の雜木山に登り何心なく栗などを拾ひをりますと二三丁眼の下なる谷間で丁半を爭つて居る若者のあるに驚て逃んと思ひまする時に其中の一人がお辰を不圖見付たかと思ふと仲間の者に耳語ますれば皆々一時に此方を見返りました

のにお辰は一倍世を潛身の恐ろしく顔色替へて山を駈下りまし
たがこれからいたして與次郎とお辰の身の上に一大事件の
起りまする事は次席にたつぷりヤ上まします。

第十一席

引き續きヤ上まするは邊見の貞藏のお話では座います、お辰は
雜木山へ登り栗なぞを拾ひ居まする處を謀らずも野田賭博若
者等に見つけられまして面色かへて立歸り與次郎に話します
れば與次郎も顏色を變へまして　與「若しやヒョッと其中に富
之助の子分でも交つて居やがつた日にはそれこそ二人の首道
具だ油斷大敵と云ふから何んでも今日中に二人の隱れ家を取
り返して了ふ事にしよやう、就ちやお辰俺れは是れから直ぐと
出掛て巢替への塲所を探して來るから手前はボッ〳〵始末をし

て置きねゑ、それから今にも六右衛門老爺が歸つて來たら内々
此事を打明て置きねゑと言ひ捨つるが早ひか古手拭に面てを
包み成るべく人に目立ぬ身裝を粧ひまして六右衛門の家を立
ち出でました斯くいたして其日も夕暮近くなりましたが主人
六右衛門も歸りませ又直ぐに歸ると言ひ置て立ち出でまし
た與次郎も歸りませぬよりお辰は淋しさと心細さに堪へませ
ぬからして我れにもあらず緣端に立ち出でまして柱に肩を凭
れて暮れかゝる秋の夕の野山の景色を詠て居ました折しも森
の彼方と思しき方に當りまして俄に人の立騷ぐ聲のいたしま
すのに若しや與次郎が身に何事か起りしにはあらずかとお辰
は心も心ならずいたして我れを忘れて門口へ馳出で篤と聲の
する方を見ますれば、這はそも如何に命と頼む情夫の與次郎は
髮は亂れ衣服は破れし上に手足は血に塗れまして一散に此方

を差して逃げてまいりまするにお辰は胸も宛然早鐘を撞れる念ひで居りまする處へ與次郎は息も絶れ〳〵になりまして漸う六右衛門が門口まで戻りましたれども口さくろくに開かれず其儘バタリと大地へ倒れましたをお辰は打顛ふ手に辛くも抱き起しまして内に扶け入れんと燥りますれども與次郎は頷と手を打振り水を〳〵と言ふにお辰は早速に筧の水を掬びまして與次郎が口へ注ぎ入れながら　辰「モシお前さん氣を確かにお持よ、そ、そ、そうしてマア喧嘩の對手は、と急ぎ込で問ひますれば與次郎は縱かに頷き　與「お辰モウ駄目だ、手前も覺悟を極めろアレ〳〵向ふの方から三四人で駈て來るのは俺と手前を殺しに來たのだ彼りや悉皆富之助の家の若へ者だ、と苦しきながらも彼方を指し示しますれば　お辰「眞んにねゑ三四人の追手がアレ〳〵今方彼處の一本松の下を此方へ曲たからは追付茲へ

來やう程に、お前、苦しくもあらうが早く此塲を逃げる仕度を、とお辰は愈々血眼になりました　與「駄目だ〳〵俺は最う此通り傷は負つてるし手前は足弱彼奴等の目に止つたからにやア到底最う諦めもんだ、アヽ此樣事になる位ひなら彼の晩の内に金次親分の指揮通りにすれば好かつた　お辰「今更お前其樣愚痴を言つたつて仕方がないぢやないか、與次さんや妾や如何したら宜んだらう、とお辰も果ては其處へ座りましてワアワットばかりに泣き出しました、與次郎に於きましても稍暫時胸の動悸を撫で摩りまして居りまする内に最早富之助の子分等三四人何れも氷の白刀を打振りまして與次郎が跡を追ひ詰め來りて門口近くまで押寄せますれば最う是れまでと垣根の抗を力に立ち上つたる與次郎生たる空もなくて泣き崩折れるお辰を顧まして　與「オイお辰博徒の女房になつたからにや、是れ位ひの事

は有りがちだ此場になつて吠面は見ともねねや、遣るだけ遣つていよ〳〵敵はなくなりや二人一侶に此の栗山の露と消へるまで此方へ來い、と言ひさま無理にお辰が帶際捉で内へ引き入れしが生憎所持の長脇差はお辰が既に他の荷物と共に荷拵へした跡にてあるべき場所になひものですから與次郎は折角取り直しました元氣も再び爰に怯みまして　與「アヽ能く〳〵二人が運の盡だアヽと力なげに呟きながら荷物の藁縄解き捨る間もなく追手は此方と呶鳴を作つて一時に表口より躍り込ましたが今は絶体絶命進むんにも退かんにも棒片一本手に持ません與次郎背後に逃げ惑ふお辰をばがばうて太刀風鋭く踏み込來る多勢ぬ壯者輩を對手に有合ふ火鉢煙草盆偖ては手道具に差別もなく取つては投げ取つては投げ必死となつて挑合ふ内に不圖眼につきたるは長押に掛けたる主人六右衛門が獵に用う

る笹穂の鋏槍是れぞ屈竟の右手を延して取り下さんとする時富之助方の壯者は一人躍りかゝつて横撲りに與次郎が手首の邊を目掛て斬付ければ何條堪まらんザット逃る血汐諸共手首はブラリと下に垂ました死物狂ひの與次郎はアット叫びさま其場へ打倒れもせで又々左手を差延辛くも槍の柄を握詰めましたが然うはさせじと又横合より躍り込だる他の一人眞向にかざしたる太刀先過またず與次郎が左の肩を掠めて斜に背筋へ切り下ました心のみは矢竹に逸りますれど鐵石ならぬ身の與次郎最早手向ひすべき勇氣も失せ紅ひの瀧なす眞只中にがタリ打倒れましたまゝさも怨めしげに眼を瞬り居る有樣無慘にも又浅猿しの限りで浮座いますお辰は此の有樣を眼の前に見て其身も今は免れぬ所と覚念の眼を閉ぢて俯向て居りました壯者等は何やらん眼と眼で知らせ合ひましながら打倒れま

したる與次郎には止めをも刺さで血刀を其まゝ鞘に収めて今度はお辰を取繞き　若「ヲイ内儀さんお前さんの可愛い男は見なさる通りの容だ此野郎も永ゑ間俺等と一侶に親分の世話になつて一つ鍋の汁を啜つた仲だが博徒の作法で仕方がねお前さんと云ふ他の女房を盗みやがつたばかりで氣の毒ながら成敗してやつたんですお前さんも嘸お力落でほ座いませう道ならねゐ娯しみを盡した酬と諦め野郎が息の根の通つてる内に何んとか一語言つてやりなせゐと慰むるのやら毒突くやら譯の解らぬ挨拶にお辰は口惜さ腹立たしさの口返答すべき元氣もなく飽まで眼を閉て身動きだにせざれば壯者等は稍張合抜けの氣味で　壯「モシお内儀さん俺等が是れだけ親切に言つて上げるのに何んとか返事くれゐはありそうなものだ言ふことがなけりやねゐでそれまでだか縦ひお前さんが此の野郎

と一所に殺してくれと頼みなすつても殺すわけにやいかねゐんだ與次の野郎に言ふ事がねゐなら是れから直ぐに俺等の行く處まで行きなせゐと此中での哥兄株郡山の國と云ふがお辰の手を取つて引き立てにかゝればお辰は荒々しく其手を振拂つてお辰「殺せ、寧そ此場で殺して呉れ」と言ふもおろ〳〵顫聲○「アッハヽヽヽお前さんも與次さんと一所に死にたいと言ひなさつてもそれやお殊勝なお心掛けだが然うはいかねゐんだ命せゐありや又與次郎に百倍勝さつた好い男も出來まさアねマア〳〵其樣野暮を言はねゐで歩きなせゐ」と又手を取れば又打拂い虫の息なる與次郎が身躰へ靠と縋て　お辰「與次郎さん妾しも追付跡から行くから必ず待て居てお呉れ」と泣き伏しました淫婦ながらも眼前の悲哀は流石に斷念かねたと見へます　盤「チィ〳〵哥兄此内儀さんも何不足のねゐ立派な家の娘

お生れて居ながら此様男と痴々繰りやつて駈け落をしやッてゐはどの捨鉢なんだ俺等が勸めたぐれへでヲイッレと動く玉ぢやゐや何んでも搏はねゐ野郎は此通りやつつけて了つたし是れから先は此の内儀さんを親分の手許まで送りつけせゐすりや役目が濟んだ如何してもゐやうだが引縛て麓の村まで擔て行かうぢやあるめへか「成程盤若の言ふ通り此様な處に長居は恐れだ親分も嘸待遠いだろうからそれが好からうと泣き伏すお辰を手荒に抱き起して「サアお内儀さん息きの根の止りかゝつた男に縋み付て居た所で埒は明かねゐ、ソレ見なせエ與次の野郎はモウ此通り眼を瞑つてるとやありやせんかアッハ、、、、俳し考へて見りや此野郎も野州下りから流れて來やがつて小濱で一と云ふ會津屋の内儀さんに是れ程までに思ひ込れるたア能く〳〵果報な生れ

だ、のふ郡山　郡山「然うとも〳〵俺もこう云ふ美しいお内儀さんに思ひ込れりや勿論殺しは偖措逆磔に遭されたつて怨みはゐへやと各々に口から出任せの悪体をきゝましてお辰を手取足取り無二無三に縛し上げんといたしまするにお辰は悲鳴をあげて殺せ〳〵と泣き叫べど其甲斐もなく忽ち高手小手に引縛られし上に途中で若し聲でも立てられては面倒と緊乎と猿轡さへ嚙されましたれば身内はいたみ呼吸は苦しく今にも命の絶いるかと思われ最早是れまでと壯者輩の指揮のまゝに立上りましした偖て又與次郎は此時迄まだ息きの根全く止まらずにありましたなれど夜中と言ひ混雜の折柄とて壯者輩は無論死しに切つた者と思ひました者か、はた憎の餘り一刻も長く苦しませんとのつもりですか其儘に立去らしめんといたしまする中の一人が郡山の國に向ひまして「ヲイ哥兄女の方はそれで大

丈夫だが此野郎は此のまゝにして行ても差支いはあるめへかの」と氣をつければ國は打頷きて「見た所傷は可成深へやうだがもういゝかげんでぬた時分だろう如何せ手次手だから手前達二人ばかりで裏の谷いでも投り込で來てくれ「好し〳〵合点だそれじや哥兄女を連れて速く親分の處へ往てくんねゝし」たが哥兄途中で口說たり何にかしてはいけねゝせ「馬鹿いへ手前たちじやなしサア内儀さんキリ〳〵歩きなせゝ」と引き立藏の方へと急きました

第十二席

偖而與次郎お辰の兩人が頼にいたしまして一時我が家に宿し置ましたる炭燒老爺の六右衛門は我が留守の間に斯る珍事出來いたしましたとは夢にも知らず馴れし山路を夜の子の刻近き頃に及びまして獨りいきせき立ち歸り見ますれば門口は開け放しましたまゝ家中には燈もなく血腥き息の鼻を掠めて何んとなく胸惡き心地のいたしまするに中へも蹈込かねまして「與次さん今歸りましたしよお辰さん最う寢ましやりましたか、と皺枯聲を振り立てまして呼べども〳〵應へるものもありません六右衛門は氣か氣ならず「ハテナ留守居があるともつて安心して里まで用達して居た間に押込みでも入つたではあるめゝそれにしても二人が二人ながら搔浚はれて行くてゝわけもあるめゝだが、と吱きながら腰なる燈灯石袋を出して燃へさしの松の根子に火を燃つけ怖々内を差覗きますれば這は抑も如何に座敷は一面の血汐に染りたる中に器物は投げ出され戸障子は打倒れ其のすさまじきゝ言ふばかしもない剩つさへ男女二人の死骸も見へませず六右衛門アッと驚きながら早

腰を抜かし暫時は起きも上らずありましたが漸く氣を取り直しまして如何はせんと思案に暮て居りました折柄裏手の方に微かに人の呻く聲のやうに聞へまするのに六右衛門は二度吃驚り「ヤッ、誰れだか知らねねだが裏の方で呻て居りまするに若しや與次郎さんぢやあるめねがと急しく裏手へ回りて其方此方を見回しまするにそれぞと思ふ者も見ねませぬに「アヽ俺が氣の迷ひかも知らねね」と再び家へ駈け入らんとする時「六右衛門殿、六右衛門殿、と二聲ばかり虫の鳴くやうな聲へして呼ぶ者のありますに六右衛門氣味わるき事限りなく流石に捨ても置き兼ねまするに聲を便りに直ぐ眼の下の谷間へ下りゆきまして倒れかゝつてをりまする柳小屋の近所を回り見ますに小屋の戸口を枕として蟲きをりまするは全身血に染り倒れておりまする與次郎で慌座りますれば　六「ヲヽ與次さんかお前は

ヤア如何したゝへ、俺が留守の間に大變な事が出來したゝのふと肩を抑へて抱き起んといたしまするを與次郎は緩に眼を細く開きまして　與「老爺さんトウ〳〵小濱の奴等に臭ぎ付られてお辰を奪れる俺は此の容に成つて了た老爺さん一生の頼みがたら百目木の金次親分の許まで此事を知らせてやつてくんねねそれだけが臨終の依頼だと言ふさい今は絶れ〳〵　六「それとや百目木の金次親分さんてねに此事を知らせて仇を打てくれと言傳するんだの解つた承知した俺が屹度引請けたから安心さつしやれ、と與次郎が耳に口寄せ念を押しますれば與次郎は安心いたしまして左も嬉しげに打頷き其まゝ息は絶へました　六「成程のふ此の深傷ぢやア助かるめね今の遺言は屹度俺が引請けたから安心して成佛さつしやれよアヽ俺に遇て此の遺言がしてへばかりに今まで息を引き取らず居たと見へる

がても偖ても慘たらしく切られやうたと六右衛門は他ながら
に死骸に合掌しまして其傍を立ち去り兼て居ました お話一轉
まして百目木の驛に世を忍びて居りまする貞藏の金次は曩の
日與次郎が危難を察しまして子分の八百吉に十兩の金を持た
せて急に知らせやりましたる甲斐もあり與次郎は其夜の内に
何れへか姿を隱したと言ふことを傳へ聞まして先づ安心も胸
を撫りて喜び居りました元來金次は其頃よりいたしまして出
羽越後地方へかけ漸く羽を延し兼ました彼の與次郎が栗山の
山中にて小濱一家の者に殺害せれました金次が恰も越後五泉
在の村松の俠客五左衛門どゞものに逢ふべき用事の差起りま
したから二人の子分を連れて出發いたしました跡の事て夢に
も是を知ずに無事に五左衛門が在所へ到着しましてゆる〳〵
用を濟せまして歸國の途に就きましたのは霜月半のことで越

の名物の雪は最早四方の山々の頂きに降りまして寒氣はいと
ゞ嚴しくは座いまして只さへ嶮しき山坂路もいとゞ歩行に惱
みました今を血氣の金次郎が事て少しも怯まず夜を日に繼き
まして早くも會津領内に立ち越へ其邊に名高き熱海と云ひま
する温泉場近くの峠路へ差掛りました金次は長の道中にて寒
氣でも引き込しものか俄に持病の疝氣差起りまして初しめは
左程とも思ひませんでしたが峠の絶頂迄登りました頃には一
歩も進む事が出來ませぬまでに甚だしくなりました鬼と引き
組んでも氣丈の金次も病てふ大敵には如何とも爲すべきやう
なく俱ある茶店に立寄りまして準備の藥など服みをりました
が勿々元に腹すべき模樣も座いませぬ金次は二人の子分に
向いまして 金「ヲイ手前達は俺に構はずしてそく〳〵山を降
りて呉んねねと言へば二人は顔見合せて 子「それとや親分病

人のお前さんを跡にして俺等ばかり先へ行くわけにはいきませんやね　金「ナアニ俺の病氣は性が知れてるから心配するにや及ばねねや實は此に通りかゝつた次手に二三日熱海の湯へ入るて療治をして行かふと思ふから手前達は兎も角も先へ歸つて呉れと强て言ひますものですから然はとて金次一人を茶店に殘して出立いたしました跡に金次一人茶屋の女戻に賴みまして小駕籠を雇せそれに乘て峠を下り一人嶮ぎ谷間の岨路を曲りまして熱海の方へと急きます折柄我が乘る小駕籠も先になり後になりまして是れも同じく湯治場の方へ急ぎ行きます二人の旅人一人は六十近き老爺と一人は二十前後の壯者道々高聲で語りながらまいりまする雜談を開くともなく耳傾けますれば如何やら與次郎の身の上らしく金次は驚き續いて其先を聞かんといたしますれば生憎旅人は捷徑の方へ曲り込みました爲め金次もいと本意なく思ひまして屋、今彼處から細道の方へ曲つた一人の者は矢張り熱海へ行くんだろうな　駕「然うです後歩て行きや彼方を行く方が餘程近ねもんですから馴た奴等は皆な彼れを曲るんでは座ます　金「ウム、然うだろう、ぢやア氣の毒だが彼の二人か泊る宿屋を氣をつけて呉んねね　駕籠「ヘイ宜うございます座ますとも、お客樣は彼の人達をば存ですか　金「ナニ存でねわけでもねねが彼方の人達は二本松邊の者と見たから少し遇つて容子を聞て見たひと思ふことがあるのだ、と問答の間に何時しか駕籠は熱海の驛の入口へ着きまいりました。最前二人の旅人は熱海宿の山根屋とヤまする宿屋に草鞋を脫ぎました貞藏の金次を載せました駕籠昇夫もつゝいて金次を山根屋の軒下に舁き込みました金次は駕籠を下りて猜〻其の家の容子を見まするに何處となく穢

くろしくさびれ果てました宿屋ではありますが與次郎が消息を聞かうと云ふ目的のありますれば何氣なき体で脇差を投げ出し草鞋を解きまして宿の女が案内いたしますまゝ表二階の一室に打通りました幸ひ持病は思ひの外は薄らぎましたなれども見もあれ名物の一風呂浴て手足の筋を延たる後の事と旅仕度を脱き捨てながらそれとなく隣り座敷を窺ひますれば案の條先刻道中にも眼に入りましたる二人の旅人に紛れも侵座いませぬから先づ便宜好しと打頷きやがて入相近くなりました頃に浴みいたして勝の上で一酌く傾け始めました、隣りの二人も道中の骨休みとおぼしく同じやうなる酒を取り寄せて飲み始めました金次は今や與次郎が語を遣り出すか今や與之助の噂を始むるかと油断なく耳を澄して目を配つて居りますれども更はそれぞと思ふ話も出ませず手酌の一本は空しくなりますまでも思ふ話が始りませぬに氣短な金次は自烈だし「先刻、二人が道中での話は與次郎は與次郎でも何處か他國の與次郎かも知れぬ此方から聲を掛て聞き出すも造作はねゝが此邊は隨分富之助の身内が蔓びこつて居るとの事ゆへ懇ごな事して恥面かくのも氣が利かねゝと呟きながら罪なき煙草盆に當り散す折柄チラト一語下總與次郎と云ふ事を漏れ聞へまするに金次は占めたと足音靜かに襖の傍へ躙り寄りまして聞く身立てますれば初め年老いたる方の聲とて然れば困つた事には今ぢや其金次さんも越後の方へとやら旅立して歸りのほども分らねゝと云ふ事だから時節を待てるより外にや仕方があるめへ、年若き方は打沈たる聲にて「六右衛門さん何にから何に迄お前さんの親切は忘れませんしたが遥々と哥兄を便つて來て見れば富之助の一家の者に打殺されて此世に居す心は親分に過

いてゐと思つても其人も今は他國へ旅行をしていてエヽ僅にならねゐ者だッと力なげにやますを偖ては與次郎は富之助の一家に殺害せられしか然るにても其殺害せられた場所は何國ぞ此六右衛門となら云ふ老爺は如何なる緣故のあるものにて與次郎の最後の始末を知り居るにや又年若き方は與次郎が身内の者らしく思われるが義理の身内か骨の身内か若し義理の身内でも俺に取りては同じく身内理非はともかく不憫の者、何には偖措き今日此處で邂逅ひたるこそ冥土の與次郎が引合せりてあらん此方へ呼入れて詳しき話を聞しに如かじと金次は驚き且つ驚て直ちに手を打鳴らして女中を呼びました。

第十三席

隣り座敷には六右衛門と彼の若者が類りと與次郎の最期の噂をいたして餘念も傍座りませんで所へ折しも突然に此家の女中障子を開けまして　女「若しお客樣方、此方のお憐り座敷のお客樣が貴方お二人にお目にかゝりたいと被仰つては座います、とやまずに二人は膽も潰しまして　六「ナニ隣りのお客人が遇いたいていいとそれりや何んの用でも六右衛門はマズ不審を打ますれば　若「六右衛門殿殊に依つたら二人の話を聞かれたのぢやあるまいか萬一其富之助の身内でしもあつたらそれこそ二人が首の別れだ障らぬ神に祟りなしぞ何んとか斷つたがいゝ、と壯者も傍より小聲で囁きますれば六右衛門もそれと合点しまして　六「誠にお氣の毒ですが姉さん己ア病は知らない人の傍い出て話しをすると直ぐ其場で重くなるだから其お客人にるべくやふお前さんから斷つて下だされと言へば女中は可然笑さに堪へ兼ねまして　女「ヲホヽヽヽヽそれではお壯者方お

一人でも　壯イヤ姉さん私は又他人の前へ出ると直ぐに病氣で　女「ヲホヽヽヽお二人共妙な病氣でゐ座ますチエと女中は笑ひながら立かゝります時、間の襖を明て悠々と入り來りましたる下總の金次「お二人さん何に其樣にお氣遣いなさるには及びますすめね俺はそのお前さん方が尋ねなさる下總の金次だ今日越後からの歸り途で持病が起り俄に思ひ立て此湯治場へ回つたきさ、と會釋しながらに座に直りますれば六右衛門等は半信半疑「へイお前樣が下總の金次さんで、と瞬きもせずいたして金次の顔を疑めて居りまする可笑しさ　金「其の驚きは尤もだが俺等が百目木に居る金次に違へねねのだから心配するにや及ばねね今も隣で聞て居りや與次郎の野郎は頭到富之助一家に打殺されて了つたとやら氣の毒な事をしたと言いてねが、自業自得で仕方がねねそして全休お前さん方は彼の野郎とは如

何いふ緣故の人達だね、と落着拂うて問いまするに六右衛門は初じめて誠の金次なることを知りまして面目なげに席を退きまして　六「コレハお初にお目にかゝりまするでゐ座います實は與次郎さんと知り合ましたるわけとヤまするは」と彼の最初與次郎がお辰を連れて逃げ來りし事より縱の金に目が眩み二人を我家へ匿ひし事偖は已れの留守に與次郎が殺害せられお辰が奪ひ返されし事を一伍一什落もなく物語りますれば金次は始終眉を打蹙て溜息をつきて　「六右衛門さん與次郎が臨終の時に是非共此仇を打て貰ひてねと言つて息を引き取つたのだねエ　六「そうでゐ座いますだよ親分、與次郎さんも一時の心得違ひとは言いながら唯今お話ヤやうな譯柄でゐ座いますから何うかお前さん仇を打てやつてくださいそれにお前さん此壯へ男は與次郎の實の弟でゐ座います今度遙々兄を探して下

だつて來た所が目的の兄は殺されてしまい途方に暮ている所で御座いますだコレ與吉殿お前も親分にお頼みやうさしやれと紹介されまして與吉は恐る〳〵前へ進まして「何うか親分哥兄が臨終のお願へでは座いますから修羅の妄念を晴してやつてくださいまし、と涙ながらに手を合せますれば金次は如何なるわけにや更に承知の色も見へませず　金「折角お二人の頼だがこの仇打は平にお斷りだ親分それや又何故で御座りますと六右衛門與吉の兩人は膝押し進めまして問い返しまするを金次は笑ひて受流し　金「何故と聞かしやる迄もねえこと與次郎は俠客にあるまじき不義を働てそれで殺されたのだ云わゝ俺の面まで泥を塗た義理知らずだ其樣野郎のために仇を打てやるわけはありやすめえ、したが六右衛門さんとやらモー一つお前さんに聞きたいのは不儀の對手のお辰とか云ふ其女だ勿

論小濱の富之助の事だから與次郎一人打殺して女ばかりをめ〳〵と生してそんな片手落ちな捌きはやりや爲めねエ　六「そ、そ、其處がなんです親分其お辰てゝ阿魔ッ子はお前さま會津屋の方へでも歸つてるなら末だしも今ぢや富之助親分の妾同樣になつて居くさるとの噂さ、そりやお前さまの言はしやる通り不義を働き自業自得で殺された與次郎仕方がねえにした處で富之助てゝ親分も與次郎さんを殺して女は自分の持物にするとは餘り男甲斐のねえ取り計ひぢやゝ座りやしねえか、と六右衛門は心からロ惜しさうでゝ座います「成程ナアと金次も此最後の物語りを聞きましたる時は面色稍激しましたる樣で改めて六右衛門に向ひまして、「お二人共安心しなせい與次郎が仇を打てやるは不承知たが眞實富之助が其樣依怙な捌きを遣たに違ひねいならそりやア與次郎やお前さん達に關はらず此

下總の金次が承知出來ねェ理由があるのだ縱へ仇は打たねへでも俺が顏も立ちせいすりや、自然と與次郎やお前さんの顏も立ち念晴しにもならうからと又呵々〳〵と打笑ひますれば二人も金次の奥底は解せませねど顏も立念晴しにもならうと言はれし一語が何に依りも嬉しくつてたまらず「親分がそう被仰つてせい下されば與次殿も元より此樣悅ばしい事はぬ座いませんと疊に頭を摺つけて禮言を延ましたそれからいたしまして金次は三四日過ぎましてから六右衛門等に別れを告げまして山根屋を出發いたし急げば歸らるゝ道程りながら其夜は態と二本松の松十親分の家に一泊いたし翌朝松十の家を辭しまして彼の富之助の繩張内なる小濱の驛へ着しましたのは彼是其日の正午頃で幸ひ金次は取り敢ず富之助の家へ訪れ見まするに富之助は在宅の由で座いますれば金次を直ぐさま一室へ案内し程なく富之助も出てまいりまして双方てとなく一別以來の挨拶終りまするや金次は殊更に語を柔げまして「金時に親分外の事でも座りませんが彼の思知らずの與次郎の野郎はまだお手許に厄介になつて居りますで座いますか、と何にも彼も一切しりぬいたのを知らぬ体に問いますれば富之助は額をなで「今越後から歸り途ぢや知りなさねへもの無理はねへが此前態々私がお前さんの許へ行て斷つた通り、野郎が持病の不行跡は以上經ても癒ねェので不憫ながら他の奴等の懲戒の爲にもと思つて到頭殺して了へましたよ」「金へッ、それぢや野郎は到頭親分の意見を背かねへでへ……然うでは座いやすかへ彼樣碌でなし野郎はそれが一番早手廻しで宜う座います、そして親分野郎がそゝのかした相手の女ていのは如何しましたと疊かけて問ひかけますれば、富之助ハット返答

に詰りましたが左あらぬ風情で　富ナニ女の方は健康で居ますよ　金「ヘイ健康に何方に居りますな、と金次はいよ〳〵執念く切り込むに富之助早くもそれと感付まして俄に眼を剝出しまして金次の面てを果たと睨みました金次は尙更落着拂いまして「モシ、親分、イヤサ富之助さん與次郎の野郎は不行跡を働いた廉があるから打殺されて了うが柴漬に遇はされやうがそれをどやかく言ふぢやありませんが不義の相手の女ばかり生かして置くたアそれや餘りお前さんにも似合はねへ仕方だ、それとも奥州筋の俠客仲間ぢや其樣事が流行るか知らねへが俺が國にはねへ式サ、殊に聞きや其女てへのは會津屋の方へ戻してやる約束で連れて來ながら今ぢや公然お前さんの妾にして圍て置きなさるとの噂さ、チイッと立入たお願へだが其女は如何か賢斗を付て俺におくんなさるわけにや行きやすめへか、と睨

立て直して屹度言いますれば富之助は稍呆氣に取られまして富ヲイ金次さんお前は已の處へ喧嘩を賣りに來たのかへそれならそうで此方にも了簡があるが　金「イヤ喧嘩を賣に來やしねエ與次郎が連れて逃た女を貰へに來たのだ　金「如何しやうと貰た以上は此方の品物、細首を叩き落して與次郎が墓へ一所に葬つてやるまでの事サと言ひ放つて天井を嘯きますれば富之助は一倍に額へ青筋を現しまして「コレ青二才奴他國から流れて來やがつたくせに、口廣い事を吐すにも程があるぞ小濱の富之助を見損なつたかと片々の手は最初背後にありまする脇差にかゝりまするを　金「ヲヤ如何にも見損なつた今日の今まで男の端くれと思つていたのが此方の眼違ひ、子分が連れて逃た女を横奪りするやうな意地汚なの男とも知らず親分待遇ひにして居たのが癪に障つて堪らねへ、オイ富之助手前は長い

物に手を掛たな面白い其錆刀が清淨潔白な金次の身体へ五分でも刀が立ちや手前の譽れだ、サア何處からなりと切て呉れ、と双肌脱きまして首を叩きますれば愈々急込まする富之助の面色は鐘馗の如くなりまして「ヲヽ能く吐したと是れも同じく膝立て直しましてスラリト抜き放しましたる刀の下をば掻潜るより早く富之助が利腕緊乎と引捉み　金「ヲイ富之助與次郎風情を死すせへ三人五人の子分に骨を折らせ手前の腕じや未た俺に刀向ふとは無理な仕事と力を込て捻上ますれは富之助は痛を忍んで漸く引き外しまして又も切込む太刀風電光石火の如く何に小癪なと金次は飛鳥の如く身を交しまして有合座蒲團取るよりはやく美事富之助の刀を捻き奪りました、偖而此結果りは如何相成まするか後席に申上ます。

第十四席

偖而前席にて申上ました る金次と富之助の格闘にて何にいたせ金次の勢力には到底かなはないせぬ富之助は金次に美事刀を捻ぎ取られまして　金「サア富之助何故俺を切らねゝんだ、ハヽア素手ぢや正可に斬る事も出來めゝ、彼のお辰を俺に渡すが惜しけりや今日から改めて下總の金次が子分になるか、それがいやなら女を渡すが躰は小粒でも下總の金次だそ、追付奥州越後を一縛めにして縄張にする計畫首尾よくいつた曉には盤城岩代二ケ國の駒は悉皆手前の手に呉れてやらア」と天をも衝かん大氣焔にさしもの富之助グウの音も出ず思はず疊みに平伏ました年功より云ひましても手際より見ましても殆んど比較物にならぬ新參の金次に蛆虫か何んぞのやうに扱かわれまして今

日より改めて子分になれと言われましたる一言譬ひ天地の覆へるとて今更小濱の富之助ともいわれる俠客が爭かでウンと合點のまいりましよや腸たを搔きむしられる如き無念も口惜さ遺る方なく然りとて今に至つてお辰が首打て渡そうとも云われませず如何して此場の結局をつけんかと富之助は怒り得堪へませず五躰を打顫ふまして頓に返辭もいたしませず居りました金次は爰ぞと尙も語を鋭く「ヲイ富之助返答は如何した此等が手前の我の折れ所だ手前の腕で大概身内の奴等の腕も分つた氣の毒ながら名乘あつて決闘から道中疲れの此疲腕只つた今切つてくれと愈々出てゝ愈々烈しき惡口雜言に最う此上は五躰が微塵に碎くるまでもと又起上つて猛虎の勢ひ一摑みにと金次を目掛て躍りかゝらんといたしまするに富之助は何に思ひけん俄に胸を撫りまして三人退り「金次さん惡か

つた了簡して呉んねへ彼のお辰の一件ばかりは成程俺が勝手過た遣方今になつて事が付たと云つちや遅ねやうだが全く一時の迷いか此樣事になつて了つたので年下のお前に然う言はれて見ると尙更面目ねゑ如何にもお前の望み通り女も渡し已も今からお前の子分になつて働らけるだけ働く心体ゆへ是までの一件はスッパリ水に流して呉んねゑと打て變つた下手に出れば金次は左もあるべしと片微笑「お前の方で惡事は惡いと早く譯を言つてくれりや此方でも餘計な口を叩かずに濟むのだ併し富之助さん其語に詐りはあるめへナ　富「沙念には及ばねへこと　金「それ聞て大に癇癪の虫が落着たと金次は心から打解けたる体を粧ひ「それぢや富之助さん必らず待ている体にて肌押入れて歸りの仕度に取りかゝれば富之助も他まで柔せと「したが金次さん三日の猶豫はゆるして呉んねへ

金「三日が十日でも約束せへ反古にしなれりや此方は携はねへと言ひ捨てまして金次は富之助の家を去りまして百目木の我家へ差して歸りました、金次は我家へ歸りますれば待兼ました子分は嬉し喜で上を下へと大騒ぎいたしまして何には偖置を取り揃へまして無事の歸國祝いに夜の更るも迄も飲み且つ唄いますれど金次は如何なわけにや今日富之助が家へ訪れましたことなゞは口へは出しませんでした一同が面白可笑しく踊り跳ねまする内も金次は何にやら打鬱ぎて居りまして何にか思案を運らし居りまするやうでは座います斯くいたしまして其夜草木も眠るとゞ丑滿頃去る者は去り醉ふ者は潰れて座敷は一面宛然合戰上の跡の如く皿は覆り箸は落ち散る大狼籍の眞只中に獨り踏止まつて手酌に醉を加へつゝあるまする金次苦々しく四隅を見廻して何日も何日も騒々しい奴等だと呟く

折りも訝しや戸外風もなきのに裏の竹藪の遠かにバサ〳〵と音のいたして塀に夢を貪る小鳥ども一時羽叩きして激しく飛び出でしやうなるに身は武士には座いませねど霜降る音にも心をゆるさぬ金次窃つと立上りまして板戸の隙より覗きますれば小鳥どもの驚きまするのも道理雲突くばかりの大男が二人大地に耳を押し付けまして息を殺して内の容子を窺ひ居りまする「ウム……大概此樣ことだらうと思つた態と欺された振りをして歸つて來たが案に違はず最う遣つて來やがつたが併し此方も今が大切の實出し時富之助の子分輩に寢込へ暴れ込まれたと云つちや外聞が見つともねへ返對に一泡吹かして追ひ返してやりてねものだがと金次は簞笥の小抽出しより一口の合口を取り出して懐中へ押入帶を緊乎と締め直しまして醉ひ潰れていまする子分をしり目にかげずガラリ表手の雨戸

を開けば茲にも既に二三人の若者輩何れも身輕に扮裝して刀の鯉口を寛ましして待ち構へて居りまするは元より覺悟の金次少しも騒がず中空に冴へ渡りまする冬の月影を鼻唄ながら打仰きまして手を懷中に悠々と門口を立出てました最前より待焦れて居りました壯者等は金次が跡をつけ百目木の驛を東に離れ只ある松並木の下道へ差かゝりますれは我こそ第一番に躍りかゝつて只一刀に切り下げ呉れんずと云ふ者なく折あらば隙あらばと只管金次が油斷を狙ひつゝ行くほどに何日しか松並木も打過て見渡す限り靑畫しましたる稻田の面てにこそ出でました、金次は心の中にて笑いながら意句地なし奴がといゝながら煙草入を取り付して一服喫ぱんとする時跟け來りまする壯者等は一同に白刀を打振り「際限がねえ打締て了へと其中の一人が遽かに歩を早めて一齋金次を目掛て迫詰

來り「晝間の返禮だぞ金次覺悟」と口々に罵しりながら斬込む刀を金次は物ともせず嘲笑つて手に持ちをりまする鐵延の煙管に眞先へ進みまいりまする一人の刀を打落し其手で直ぐさま續々いて切込一人が肩間を充、か喰はしますれば三人の中の二人までが瞬く間に捲り立てられまして殘る一人も立ちも向ず躊躇いたして居りまするを金次は隙さず猿臂を延しまして ギウと其奴が頸首引き寄せ月の光が面てを見ますれば先達て湯治場で出會ひましたる與次郎が弟の與吉でゆ座いますれば ヤッ手前はと百人の剛敵を引き受くるとも怯ともいたしませぬ下總の金次も餘りの意外に思はず知らず突放して其身も撞つと尻餅搗きました「それ遁すなと又入れ替つて切込二人を金次は轉ひながらに足をすくつて投げ飛し突き放しましたる與吉か胸先を息きの根止らん迄絞め上て「ヤイ靑二才、好くも

己が眼の目を賑したナ何の口で與次郎が弟なぞと吐したイヤサ下總の金次を白痴にしたなア何の口だ「親分命だけは勘辨して下せねまし俺が腹から出たわけとやは座いません悉皆家の親方から吩付た狂言で情願命たけは助けてくださいまし、と手足を悶へて打詫まするに金次は尙も眼を怒らし「然う聞いちや尙更だ吩咐た富之助の野郎も堪忍出來ねへが、うして一体手前の名は何んと云ふのだ「へイ私の名は盤若の六ッてんで其處にのめつて居るなア俺が兄分の郡山の國てねんでは座います　金「フンそれぢや栗山で與次郎を殺りしにしたのも矢張手前達の業だナ「それも富之助親分の吩咐で是非なく　金「巫山戯た事を吐すナ如何に跡の關係あひが恐ろしいといつて卑法末練にも程があるコレ盤若とやら手前等のやうな狗畜生の息の根を止るも無益の業だから命だけは助けてやらア「へ

ッそれとや親分命は助けて下さねますか　金「ヲヽ手前ばかりちやねね三人共に命は助けてやると云いながら盤若の六の上唇の肉を一寸餘り剝切りまして「如何だ六、嘘を吐いた酬は覿面なもんだ」と突き放してやりました金次は血刀を逆手に持して郡山の國が帶際捉でグイと引き寄せ「手前は此の手で金次にまで切付やがつたナ」ト右の腕の小肱の邊り骨を徹れと刺し貫きました殘る一人を引き捉へんといたします間に其奴は素早く眼の前の用水堰を飛越て命から〳〵逃げ失せました金次は合口の血押拭つて鞘に收めまして二人は眼を白黑いたしまするを顧みまして「遠路の處態々手前達が書間の返禮に來てくれたのは實し代に下總の金次が土産の品は是れでは座いますと面や手腕を親分の前へ差出しやそれで濟のだ富之助も世間の義理を知つた奴なら今度は自分が返禮の仕直しに出て來

るたらう其時手前の紙が癒つたらゆる〳〵挨拶に來るが宜やと言捨てましていう〳〵と立去りました、偖而茲に二本松領内に原野町もヤまする城下を距りまして十五里許金次が住家なる百目木より六七里在の太田村とヤしまする處に鎮座ましますす妙見の社があります して年々五月中申の日をもちまして大祭を營むと申慣例にゆ座いまするが氏子叢皆平親王將門時代の甲冑を着いたし騎馬の行列勇ましく町々村々練歩き其日の雜踏譬ふるに者もは座いません領内の博徒等は俗にたかまちとヤまして所謂書入のおんくは賭博を開かるゝ當日では座いますれば金次も大勢の子分を引き連れ此のたかまかに出かけん者と數日前より準備に餘念もは座りませぬ折から突然門口に人の訪ふ聲のいたしまするに例の八百吉眞先に聞きつけ駈せ出して見ますれは偖

ても不思議絶へて久しき小濱の富之助三人ばかりの子分を連れて酒肴を充かに擔はせ小腰を屈めながら靜やかに入り來りましたは是れより金次富之助との間に一大騒動の起りまするお話は次席に辨じまする

第十五席

金次は思ひも依ませぬ富之助の訪れにうろたへる子分等を戒めまして富之助を一室の内へ通しまして金次は程なくそれへ出まして　金「富さん只つた三日の猶豫と云ふ約束で別れて小半年も挨拶なしたア遲れるにも程のあつたものぢやねへか」と突然荒腹を挫きますれば富之助は疊へ額きまして　富「金次さんたア言はねエ親分重々俺が濟まねエ事ばかり出來にくい勸辨だろうが其處は何卒勘辨して今日から改めてお前さんの子

分同樣に使つてくださいまし」と言ふを金次は皆なまで聞かず「それや不可ねへや富さん此方の運の强さに一度ならず二度までもお前の罠にかけられても斯うして無事に生き延て居るからこそ宜いやうなものゝ美事お前の計略が圖に中つて金次の首が消し飛んで了つたらお前も正可に其樣弱い音は吐くめゝ今更愚痴ぢやねゝがのふ富さん男は男らしく交際て貰ゐてへものだ何れ程此の金次が怖かゝらねゝが病氣保養の湯治場までも先回りをして神佛にも明さぬ男の腹の底へ探りを下ろすたア餘り狂言の筋が入り組みすぎてらア地藏の顏も三度どやら幾干間抜な金次でも最う其手は喰ねゝからイサクサ言はずに引取て呉んねゝ男らしくもねゝお前のやうな子分を百人千人持た處で小指の爪はゞ力になるやうな男とやねへとあらゆる惡体を盡して怒るだけ怒らせて見んと金次が心底なれど富

之助は飽まで面を柔らげて「何卒親分其腹立は道理至極だが今度と云ふ今度ばかりは自分の卑法末練を心の奥底から後悔してのお話しだ親子の盃だけ交してくださゝ何うでもそれが出來ねゝと云ふなら此場で富之助のソッ首を打た切つて重なる腹立を癒らして下せへ」と首差延て膝に手を置く、金次は別段に思案の容子もゆ座いませんで「富さん好い覺悟だ貰つた要もねへッ首だが望みとあらば打た切つてやるから」と言ひながら脇差を引寄せ鞘を拂つて立ち上らんといたしまする時「金次國暫時待たしやれ私ぢやゆ代田の馬鹿侍士ぢや」と慌ゝしげに次の一室より聲を掛くる者がある立ちかくる金次首差延たる富之助不意に掛聲へにアと驚きまして躊躇まする間にサラリ開の襖を蹴開けまして現れ出てましたるは年の頃四十五六色淺黑く背高くして見るからに逞しげなる浪人体の男爾人共

にかねく見知れる仲で沙座いまするにそれと見て直に席を引退き「アッ貴方は沙代田の覺之進様ぢやぼ座いませんか如何して茲へと異口同音に訝しみ問いますれば覺之進何に氣なく打笑つて「ハヽ如何して茲へとは言はれるか手前は矢張り例の膝栗毛に打跨つて參つたぢやろれは兎も角手前が只今彼れにてチラと承はれば何か沙両所が爭論のぼ容子に見受けたが金次殿と申し富之助殿と言ひ何方も手前が年來のぼ懇心一杯の酒を半分つゝ飲み合つた仲でぼ座つても手前身に取り甚だ心外至極の儀でぼ座ると今日の處は痩浪人の拙者に何にも言はずにお預け下され」と両人の間へ割込で座りますれば金次は暫時富之助と覺之進の面を見較べ何にか思案の体なりしが事となげに打頷き忽ち刀を鞘に收めながら　金「イヤナニ外ならぬ覺之進様のお扱ぢ元より俺の方から望んで爲やうと云ふで

はなし富之助せぢ默つて引き取る事なら毫頭異存はぼ座へません　覺「それでは金次殿早速手前が辭を用ゐてそれは重疊々々して富之助が返辭を促す　富「先生のお辭ではぼ座へますか俺は何も喧嘩口論に參つたわけぢやぼ座へませんので先生がぼ承知ねぢのもぼ尤もですが是れまで段々金次親分に對して道ならぬ事どを働た廉を詫びに來たのでぼ座へますから金次親分せぢ了簡して不足でもあらうが此の富之助を弟、分として乃至は子分なりに爲て呉れしばそれで俺は本望なんでなり　覺「フヽム何樣それでは兩所が別段喧嘩口論に及ばれて居るわけでもぼ座らんの　富「飛んでもねエ其事はモーヲ去年の昔しに通り過ぎて居るのでぼ座います　覺「左樣でぼ座つたか然らば何更金次殿さへ今までの事は一切手前が此通り歎願致すに依て如何なる事の原因かは存せぬが小濱の富之助どもあら

う人物が折入つて頼みぢやとあるからは情願丁簡してやつて下さらぬかと覺之進が宛然我身の上の如く打詫ますれば金次もはと〳〵否やを言ひかねまして「それほどまでに仰せらるれば此度限り先生のお顔に面とまして覺「なんと云わるゝ然らば拙者の顔に免じ富之助殿が望み通り誓ひの盃をしてやつて下さるか然すれば拙者は差詰媒介役でも座るてアハヽ犬も歩行ば棒に當るとかヤすが覺之進が歩けば酒にありつくが不思儀ぢやと獨合点に金次少しく不興の面色なりしが覺之進こんな事には頓着せず「時に金次殿今日お前が參上致したるは別儀にあらず承れば貴殿は此程導場をお造ひ相成り專ら子分の方々に劍道を指南なさるとか斯道のために恐悦次第の儀では座るが何んと手前にも一本ほど指南を願ひたうは座るがお聞き濟下さるまいか拙者とても昔時は脇坂淡路の守の藩中に

て少しは人に知れらし者の一人なれども見らるゝ通り浪々致して米味噌の代にも心を惱すやうな身の上となりヤてからは竹刀なぞゝヤものは頓んと手にも觸れヤさず」と思ひも依りませぬ覺之進の話に金次は身を謙へり下り「是はしたり先生ぢ申蔵ばつかり道場なぞを造ひたなぞゝは何者のヤ觸しかは存せねどホンノ壯者輩の奴等が氣晴旁々惡戯事では座いましよ覺「イヤ金次殿、遠慮は無沙汰ぢや昨日今日心安くなつた仲ぢやなし是非とも一本教へて下されと强ての望みに富之助も傍よりロを差出し「親分勝負は時の運です先生が折角のお望みで御座へますから一本使つて見せて下せへましと言ひますれど金次は再三辭退いたしましたなれどなか〳〵應ずる色も見へませぬ者ですから餘義なく酒の準備の出來るまでと已れが自分案内いたして近頃家の横手に建て增した道場に至りました

富之助も跡より窃かに覺之進に目配しながらまいります、金次は心中窃に思ひまするには富之助が今日意外に酒肴を携へ詫に來るさへ尋常事ならずと思ふに日頃餘り親しき仲と云ふ程でもあらぬ覺之進が押問答の中へ飛込で双方を押宥め呉れたる口の下より無理無躰に仕合を所望するこそ不思議とも奇怪千萬然れども痩せても枯れても對手は侍士世が世であれば博徒風情の我々とは語ばも交すまじき覺之進打負して面皮を缺したとて名譽にもあらず此方は元より竹刀一本に浮世を渡らと云ふ心をもちませぬゆへ此場で覺の進を打のめしたとて明日は百石取りの侍士に召抱へらるゝではなしとれほどの腕がある

から知らねど負けてやるに工夫もなにもあつたものでない金次心の臍を固めて立向いたると知るや知らずや覺之進は煞ち打込來るを態と受損じたる振りして恐入つたと頭を下げます

れば覺之進は稍立腹の体にて座いますれば金次は語靜かに覺之進に向いまして「イヤ先生少し今日は腹工合惡しくば座れば何卒又の日までお預りを願いたい　覺如何あつても厭て

ゐ座るの　金「相成べくは何卒……　覺「宜しい然らば致方ゐ座らん」と覺之進は不興面いたして面

小手を脫捨て改めて金次に向いまして「金次殿　金「何にかゐ用でゐ座いますか」と金次は手早く道具を脫ぎまして答います

れば覺之進は威猛高になりましてハタと金次を睨つけ「コレ金次殿覺之進は浪人致してをれど目は二つ持ていますゐ能うも貴殿は拙者を盲目にいたしなされたイヤサ富之助殿の面前にて勝りものにしてくだされたナ元來面小手に身を固め竹刀で打合などは小供の遊戯にして面白からず貴殿とても斯く道場の眞似事でも遊へ置て子分共卿道を指南せらるゝからは眞

劍の勝負位いに膽も冷される此人でもあるまいサア立會人はそれに居る富之助殿ぢや立上て尋常に勝負さつしやれサアサアと敦圉荒く金次へ詰寄りましした金次は愈々出でゝ愈々奇怪なる覺之進の辭に暫時打案じて居りましたがポント小膝を叩きで「好うほ座るそれ程までに先生のお命がお廉い命なら金次美事頂戴致しませう」と吃度言へば覺之進益す肩肱を突張り覺「其大言忘れしやつさるな、然らば富之助殿それにて篤と檢分さつしやれ」と言ふより早く袴の股立取つて刀の柄へ手を掛けました金次は倘も落着拂つて「先生暫時お待くだされ　覺「ナニ此場に至つて待てとは氣怯いたしたナ　金「ハヽヽヽ氣怯れはいたさぬがモシ覺之進樣竹刀の勝負と違つて何方が負けても首と別れの眞劍勝負斷つて此場で打果ても亳頭怨みはなといふ一札がもらいたいナぜと言へば後日に先生の遺兒など

が出て來て仇だなどと名乘れては大に迷惑いたします尤も狙われるたけの筋があつてなら厭す賣られた喧嘩の對手を勤めて後々までの關係は馬鹿々々しいヲイ富さん此場に立合つた因果だ能く腹の底に承知して置て呉んねへ」と言ひ捨てまして金次は最う是迄と料紙硯を引き寄せまして已れも認め覺之進にも認させ是れは立會人の富之助に渡しまして双方身輕に仕度を調へ道場の眞中へ對立向ひましたるは宛然世虎の相對する如くで浮座いなき儕而此勝負は如何相成まするや次席のお樂みといたします

第十六席

大言は吐きますれど腕前は左程でもは座いません覺之進が鋼子齋迅の勢ひをもちまして斬込まいりまする刀先をば好い加

減に受流しては更に身近く寄せつけませぬから覺之進はエイ小面倒と愈々熬ちまして飛込まする時に金次は素早く身を沈めまして覺之進が足をすくいますれば五尺ゆたかの大男美事バタリと後へ倒れて腰の骨の碎けしかと思ひまする床の轟き金次は跡さず乘りかゝりまして覺之進が咽喉笛へ刀を逆手に差付ますれば覺之進は身悶いたしながら澁面作りまして如何いたしましたことゝや金次が問に答もいたしませず頻と富之助殿々々と呼ひまするばかり勝負如何にも瞬きもせず凝視てをりました富之助は今有樣を見まするより中腰となつて逃げ仕度の容子で御座りまされば金次は左もあるべしと心に頷きまして覺之進をつゝき伏せまして馬乘に踏跨がり　金「サア吐せヤイ覺之進斯なつたからはモウ武士とは思はぬぞ武士は武士でも手前の樣な奴は野山にぶらつく犬武士だ、何日まで經

ても性懲もねえ奴等だサア誰れに頼まれて今日此金次の命を取りに來た吐せ吐せサア吐さねえかと富之助の方を尻目にかけながら押へつけて責められまする覺之進今は絶体絶命となり　覺「金次殿々、苦しくて堪らぬ最早致方なし依て存分にしてくだされとヤまますが其實命は惜しいので金次に向も烈しく小突回されまするのに傍て見て居ります富之助は見るに見兼まして有合煙草盆を手に取るよりも早く「先生確乎遣て下せえまし」と聲を掛ながら金次目掛て早速の眼潰し遣また方眉間の邊りにバット降來る流石の金次も不意を打たれて思はず小手を緩めし途端に覺之進ムッと跳起き再び金次に斬つくるなら、と思の外今の手並に恐れましたか　覺「富之助殿逃るか勝なら早く〳〵」と四隣の戸障子蹴破り突きぬき戸外へ逃け出しました金次は目口へ入りましたる灰を押し拭いながら道場の

入口に立ち騒ぎをする子分を顧みして「野郎達酒だ酒だ緩喜直しに酒を飲まうと逃げ行く二人を追ふともいたしませず居りますのに子分輩は稍不思儀に思ひますものから「親分俺等が行て二人の奴等を引縛て參りましよか　金「馬鹿を言へ彼れでも中か〳〵手前輩の手に引縛られるやうな奴等じやねえ打捨て置け〳〵縦ひ命を取られねでも後半月と經ねば間に自滅も極てらア併し何日でも逃るに妙を得る奴等だと金次は苦例の如く泰然として　金「馬鹿程恐しいものはねえと金次は苦笑ひをしながら子分が取り急ぎて持出しましたる二升樽を引き寄せまして樽の口からいたして口移しに五合餘りを一息きに飲み下しますればやがて少しく酔が廻つてまいりますす思ひます頃に金次は俄に腹痛を覺へまして痛みは益々烈しくなりゆきまして手足まで次第に打戰き何んとも彼とも例へやうも

なき厭な心地と相成まして自然と顔色も尋常ならぬやうになりまして今か今まで覺之進と眞劍の勝負をいたしましたる勇氣は何處やら我知らず床に俯伏して呻きまする聲を子分が聞付其驚愕一方なら「モシ親分如何なせなしました、何んだか滅法に顔色が變手古になつて來たせ、と一人が言へば「變手古も變手古も平常の顔の色艶はありやしねえモシ親分寒氣でも爲なさるかと右と工から容子を問いますれど金次は苦しさの餘り頓は返答も出來兼ます体で頻りと頭を打掉まするばかり　子」出にしても困つたものたナ合憎と此近所には醫士もなし藥りといつたら何にを飲ましていいやら俺等はわからず、アシ親分一体全体何處が何な工合ひなんですと重ねて問はれまして漸く金次は頭を擡まして「別に變つた物を食つたではなしだが胸元から下腹へかけて針で突き斬れるやうで苦しくつてなら

なゐと歯茎いさうに眼を睨りて呟と傍にありましたる酒樽に目をつけ「ウム讀めた此酒に違いねへ此の酒を飲むと間もなくキリ〳〵痛み出して來たのだヲイ八百吉此酒は何處から取つて來たのだと言ふより苦しさに堪へ兼ましてバタリ酒樽を足で蹴飛ばしますればドット酒は溢れ出でましたすると見るさへ小氣味の惡い黒蚯蚓の指よりも太きのがぬる〳〵と流れ出ましたのに金次は更なり居合す面々是れはとばかり膽を潰して暫時開た口も塞がりませんでした八百吉は何にか初めて思ひ當りしものやうに「そんなら此酒は今富之助が土產に持て來て臺所にあつたのを親分に飲せたのたナそれに違いねゐと今更の如くに騷き出しますれば金次は切齒を致して腸と怒り　金「チョッ其樣ら此酒樽も富の野郎が搗き込んで來やがつたのかそれを意地汚く飲んたのが已の不覺だ何んでも

早やく毒消を持て來てくれアタ……ヲイ八百吉新助己の命が助からなきやそれまでだ手前達は是れから五六人で富の野郎の落着先を突き止て見當り次第仇を取て來てくれ、腕と腕との比較ならば五分とも跡は退らねゐ金次だが黒蚯蚓と來ちやお了いだ此樣ら先刻むざ〳〵と生しちや歸しはしなかつたものアイタ、、、ヲイ毒消は如何した早やく持て來てくれと氣丈の金次も毒のために全身一時に痺れ渡りまして起上る事とさへ出來ませぬ苦痛實に此分で一時乃至二時が間も苦しみつゞけましたら到底も命は助かるまいと思つてますお話二つになりまして彼の富之助も覺之進金次方で思はぬ失敗を取りまして一二里と行ものは向見ずに逃て參りまして唯ある野中の辻堂を見つけまして暫時息休めと覺之助も流れる汗なぞぬくいまして今日の出事につきまして樣々仕方話なぞいたし覺之

進も自分が餘り意ぐ句地なき今日の働きを富之助に詫なぢいたしまして覺之助は金次が並々ならぬ劍道に優れて腕前の確かなのには殆んど舌を卷きました　覺「時に富之助殿此樣ことになるなら拙者が最初から眞劍な勝負なぞを好まずいたして例の毒酒から先へ飲せた方が好かつた手足を利かなくして置て闘り殺しにしてやつたもの重ね〳〵不覺は實に殘念では座つた、と語り合つて居りまする處へ此日富之助が供もに召連ました子分の一人が息きせきと駈けつけまいりまして「親分先生もは悅びなされました金次の奴は例の酒を煽つていま毒が五臟へ廻り殊に依つたらモ今時分は極樂往生を遂げたかも知れませんとの注進に「ソンナラ金次が彼の酒を毒と知らずに飲んだのか　子「飲んだ處ではありやせん五合近くもやりました上七轉八倒苦しんで居るのを俺が裏の隙間から確に見ていまし

た此注進に富之助も覺之進も蘇生りたる心地致しまして「先生何にか僥倖になるか知れませんねね　覺「重ね〳〵の怨みを一時に晴らしてこんな心地のいゝことはない　富「金次が首尾よくゞねたとなれば又此方にも目的があると腕撰ぬきて思案の後に注進の子分を顧見ましして「ヲイ松藏氣の毒だがモー一度金次の容子を見届けて來てくれと言はれまして松藏は是非なく立上りまして物の十丁も行きませんに血相變へまして走來り「親分先生早く委をお隱しなさい早やく〳〵と腋の下の汗押ぬくいつゝ料びまするを二人は顏見合て二度吃驚富「松藏、如何したのだ。たゝはやく隱れろぢや分らねや　松「最う直き向へ金次の子分が三四十人二組に分れて一組は小濱街道の方へ一組は此方へアレ〳〵〳〵と言ふ　覺「親分の金次が九死一生の危い病氣の處へ我々の方へ打手を向ける筈もなくそ

れは何にかの間違いたらうと不審ながらに覺之進がヤまする
を　拵「そんなことを言つてる暇にこゝへ來てしまへば大變だ
命あつての物種だそんならお前さん方は此所にをいでなさい
俺は先へは発蒙りだと後は野となれ山道傳いに駈去りました
富之助は青息吐き　「合點の行かぬ話たが萬一金次の子分であ
つた日には取つて返しもつかねゝから兎も角先生此先の稲野
と云ふ村には俺の子分も居ますゆへ其處まで逃て行き容子を
見た上の仕義にしましよと言へば覺之進は不精々々此期に及
んで敵に後ろを見せるは本意なき次第なれど富之助殿又挽回
の秋もは座らう、と我と我が心を慰め辻堂の縁から下りまして
稲野の方へ落延びました。此方は金次に置ましては卑怯未練な
富之助覺之進の跡を追はしまた一方には醫藥の手當ていたし
ました處其日の夕刻より少しく五臓の苦しみも薄らきそれか

ら段々と心地も平常に復するやうになりました富之助の跡を
追はしめましたる子分の一方は歸つてまいりましたが終に無
駄骨とあいなりそれから小濱の方へまいりました子分衆も歸
てまいりましたがこれも手を空しくいたしてかへりてまいり
其内で八百吉と新助が見へませんから如何いたしたと聞きま
すると両人は草を分けても富之助の有所を突留て親分の敵を
取らずにや歸れねゝと言つて別れましたと言はれて金次は其
心に感心いたしまして　金「其志だけでも澤山だ五万石の領内
は云はずと知れた己れの縄張り自然と手前達のうだつと上る
道理だからそれを張合に骨を折つてくれと言い渡しました其
後三年を過ぎませぬ内に金次の名は愈々轟きまして招かすと
も聽きまいりまする俠客博徒は益々多く相成ました。

第十七席

偖而其後二三年は別段に申上まする程の事もは座いませんで打過ましたが此間も金次は絶へず奥州と越後の間を往來いたしまして只管縄張りを廣めんとばかし思ふてをりました金次は久々にて仙臺邊より歸つて見ますれば懐かしや故郷の子分數が三四の連名を持まして一書の書簡が到着いたしました珍らしきこともあるものよと取る手遅しと封押切つて讀み下しますれば先第一に金次の實父の死去せし事是れに次きて生井親分の彌兵衛が老病にて九死一生なる事過き去り上月日と共に八州の詮議も今は大に緩みたるゆへ一先古郷へ立歸るべしとの事又金次が實母は夫も病死の後邊見村の所帯を畳みて當時は重なる子分等が盡力に依りまして古河の御城下に三村屋

と云ふ遊女屋を營み居る事の由なぞ十二三年來打絶し古郷の事細々と認めたる終に呉々も一先歸郷して親分彌兵衛の臨終に逢ふべしとの事で御座いますれば金次は心中にては未だ幾分か古郷の地を踏むのは何んとなく氣味惡くは思ひますれど大恩受けし大親分の大病と聞ては持て生れた氣性として爭でか一寸の間も猶豫なるべき今日仙臺より歸りしばかりの旅仕度を其まゝにいたしまして出立は明朝ぞと子分一同へ言ひ渡しましたいずれも事の突然なるに驚を潰しまして中には萬一の事ありてはとそれとはなしに諫めます者もは座いましたが思ひ立ては中〳〵に心を飜ずことが出來ませぬ金次で御座いますれば其後は夜を徹しまして大勢の子分等と別れの盃を汲交しまして明る日の早朝星を戴きまして金次のためには第二の古郷とも申まする百目木驛を出發することにいたりました去

るにては勿論普通の旅立でゐ座いますれば五人三人の子分を供に召連れまする筈でゐ座ますするが年月過しとはゆながら首も落ちまする程の大罪を犯しましたる事でもゐ座いまするしそれのみならず跡を晦しましたる生れ古郷へ立歸る事でゐ座いますれば第一は人目を避るため二つには正可の時の進退の自由ならん爲め殊更一人旅を思ひ立ましたゝされど金次が今度に歸國こそ生れ古郷とはゆながら敵地へ踏み込むに均しく實の危嶮の旅でゐ座いますれば素面は事もなげに笑ひ與じまするが心の奥では万一此身の召捕にでもなりましたる曉には生きて再び百目木の我家も見られず三年以來引立てたる子分に是れが一生の別れになる事とかと思ひますれば流石剛氣の男も自と後髪を引かれますやうな氣もいたしまして足の進みも何時になく捗取れませず虫が知らしまするか見送りの子分等

も皆言ひ合したやうに打濕つて居りました身を延び上りまして殘り惜しげに見送の者を凝視「チョッ折角の思ひ立た首途に縁喜てもない鶴龜々と金次は我と我と心を取り直しまして それぢや皆な後を頼むぞ遅くも來月の初旬には歸るから、と言捨てまして本街二本松の方へと急ぎ行きました是れぞ貞藏の金次が身に不運の糸の、まつわり始めまする緒口でゐ座います。お話一轉まして曩に親分金次が富之助の計略にかゝりまして彼黒蚯蚓の毒酒のため一時生命も危ふなき程でゐ座いましたる砌り己は死んでも富之助と覺之進の二人を打殺して來よとの頼を引受まして吃つ度承知の一言を跡に大勢の子分に率先まして其行術を突き止めに出立いたしましたる八百吉と新助の両人目指す敵は奥州筋へ逃げ延びましたと聞くより無念骨髓に達しまして他の兄弟分の引止むるを聞かずに譬ひ死す

るとも二人のッ首刎飛ばさゝる限りは再び百目木へは歸るまじと決心を確めまして只一筋に奥州街道を急ぎ富之助が立寄りそうな所へはそれとなく探りましたがかいむ行術が知れませんでしたればとて野に倒れて死ねばとて金次への義理がすまぬとそれより庄内津輕秋田は更なりあさりつくしましたれどたゝい徒らに骨折損の草臥儲けでは座いました流石の二人は一先仙臺の城下まで引返しました時には金次が古郷より書簡で歸國いたしました後では座いました故にモーッ斯うなつては一命を捨てまで詮義せずんばならず此上は日本國中人の搜き溜とも言ふ江戸こそよけれと急ぐに其翌日仙臺を後にいたしまして江戸表へと志しました現在自分の腑の緒切りました二本松の町を過ぎながらもいたして知己の許へも立寄らん心も起しませず只管道を急ぎ早くも郡山の城下外れへま

いりましたる處丁度後ろからまいりまする女は何處か烏渡瑞拔のいたしたる處から二人は旅の退屈まぎれに聲を掛けますれば何處となく見覺へのありまする女で御座いますれば段〳〵樣子を見ますと正しく彼の會津屋のお辰で座いますゆへ八百吉は「お辰さんお久うぢ座いますねと言はれまして女は手に持てをりましたる旅笠を取り落しまして暫くもせずに二人の方を顧みますれば「ハヽア吃驚なさるも無理はチエお宅から三里と隔てない百目木の者さお辰は百目木と聞て一倍氣味惡くそて〳〵に立去らんといたしまするを新助は慌てゝ袖を捉へて「モシお辰さん何にもそんなに驚く〳〵することはねエ何うせ先を急かねエ旅なんたから江戸長崎は偖措き唐の横町までもお連れヤまスアねエ　辰「ハイ親切は嬉しうは座いますがッイ白河の親類まで　八「ヘイ白河の親類まで左樣で座

へますかそれにしては大層嚴重なお仕度でと言へばお辰は左あらぬ体で「ハイ供をも連れず一人旅では座いますからと皆まで言はせず今度は新助がグイトお辰の前へつき立て「お内儀さん其白河の親類てへのは富之助親分のこつて此座いますねと鼻の先で嘲笑いますればお辰は思はず小首を縮め「イエ如何いたして富之助親分とは三四年前に行衛知れずと口にはヤますれど何處やらに怪しき素振の見へますのに八百吉は歟さず「成程世間体は知らず茲に己達に出會たのが百年目だ滅富之助が在所を言ふならよし知らねへと云ふなら知らねへで濟してもやらうが正可にお前さんも與次郎哥兄の殺しにされた時の事は忘れや爲なからうの次手だから言ふが他等は與次郎哥兄たア切つても切れねへ生井身内の下總の金次か子分達の二人の者が憂身を窶して諸國を渡り歩

くのも實を言ひや富之助の在所を探そうと思ふ爲めなんだ併し他まで知れねねと云ふならそれまで今度の葛藤の種を蒔したお前に茲て出會たのは亡なつた與次郎哥兄の引會せかも知れねねから責ても自暴腹に不足ながらもお前の命を貰つて與次郎哥兄が位牌に手向る己達の了簡何の道免れねね為合だから今まで散々男を惱ました罪業消滅にお題目でも唱へて往生しなせねへと前後より道中差鐵を鳴して詰め寄りましたお辰は生きたる空はなくいたして手を摩り涙を流しまして生命ばかりはと打詫れますれば血氣にはやりまする両人は耳にもかけませず一時に白刃を拔き放てお辰の帶際取りまして突然胸板の邊りグザット突き立ちますればサット迸と走りまする血汐諸共に脆くも其場に息絶へました　八「ハヽヽヽ此口で與次郎哥兄を誑らかしやがつたか、と何も續けさまに聰の邊り

へ切りつけました　新「ヲイ哥兄モーでねているものを苛めた處で効いがねゑ　八「ハヽこれで幾干か胸の溜飲が下つたと言いながら八百吉は手早く手荷物も解り放ちまして若しや富之助の在所も知れはせぬかと心急きながら探りまする内に果せる哉江戸品川にて富之助よりお辰殿へとの表書ある手紙見出しました「ヲイ新公序でに刀の汚れだ阿摩のお辰首を剝てくんねゑ「そりや譯はないが剝て如何する　八「何にするて栗山まで此處からは左程でもないから其首を持て與次郎哥兄の墓へと云つてもあるめへが然うすりや第一與次郎哥兄の妄念も晴れるし金次親分の豫ての志も達するだろう「手前そういふならそのやうに遣つけやう元來新助と申するは數多の子分中にて有名な荒武者でゐ座いますれば露臆する氣色もなく首級を搔き落しまして「したが八百公此胴拵は如何する氣なん

だ「ナニ搗ふこたねへ義理知らずの淫亂女の懲戒に道の眞中へ座らせて置けと出放題に惡躰を吐きいきなり首級を風呂敷に包みまして跡をも見す在所の方へと分けいりました、然るにても聖婦お辰の末路の姿こそ淺猿しいことでゐ座います偖て彼の貞藏の金次は親分彌兵衛の大病といふ報知に取る物も取らずいたして子分も連れず只一人古郷へ無事に着ましたのは三日目でゐ座いました世を忍ぶ身の壹は流石に氣味惡く古河の町へも入り兼ねまして八木橋の昔馴染の卯兵衛と云へる者の處へ草鞋を脱ぎまして親分の容子を聞きました處苦心して歸つて來た甲斐もなく前々日冥土の旅へ赴き昨日葬式のすんだ跡と聞ましたる時は足摺いたして殘念がりましたそれから密に彌兵衛の寺へ詣でまして それから母の許へも訪ずれ無事再會の物語りをいたしました是れを聞き傳へまして集いまい

ります親分子分盃引きも切らさず中にも彼の彫常、彌造、縫吉なんぞの喜びは浮座いませんでした、さて是れから金次の身に一大の禍ひの生じますることは改めて後席に申上ます。

第十八席

偖而前席より引續けて居りますする邊見の貞藏の話で浮座いするが貞藏の金次古郷へ歸りまして親分彌兵衛の死に目にも逢はせずそうふういたして居りまする内に彼の彫常、彌造縫吉なんでまいりまして上を下へと久々の歸郷で浮座りまする故に大喜びでは座りましたそれからいたして彼等のやまするには大親分の亡くなつたも殘念ではあるが貞藏哥兄が旅から旅で磨き上げて來た腕を士産に勿怪の幸だから何にはとも あれ大親分の跡目は貞藏哥兄の外はねへからと口を酢くして

辭退いたしまする貞藏の金次にやますれば澁々ながら言靜かに「故郷とは言へ新參同樣な己をさはぜまで信じてくれる一同の志に免じて一先引受ける事に爲やう、したが一人同も知つての通り先年塚崎の丈助と出入から城下を騷しだ大罪人掟嚴しき土井家の事なれば十年二十年はおろか一生涯他國に潛で居ればとて赦免になることもなきゆへ譬ひ大親分の跡目を繼たとてマズ當分は公然きにもならず又二本松の方とても何の道此のまゝにはして置くわけにも行かねねからホンの當座は木像代りと思つて呉れなくちや困るせ」とやますれば皆一同が哥兄モウ安心だ必らず大丈夫だとやますゆへ油斷するでも浮座いませんが十日も過ぎ二十日も過ぎ三月餘りの月日を打過しました安じるより產むが安く別段手當てを喰ふべき容子も見へませぬゆへ何時まで一室の中に煙り居ると智惠もなき譯と

恰も其年の八月廿五日に古河の片在所なる仁連れの五平の鎮守祭で浮座いまして草相撲の興行あると聞き是れを見物旁々獨りぶらりと母の家なる三村屋を立出でましたのは正午稍過では座いました貞藏は只獨り仁連五平の草相撲を見物いたし久し振りにて好い氣散しを爲たりと心に喜びながら其打出しを待ちまして歸途に就きました丁度貞藏は八木橋村の中央までまいりました時に象て手笞でもしては座いましたものかパラ〳〵と前後より浮用だと云ふ聲のいたしまして二三十人の手先は貞藏を取り卷きました彙々貞藏が劒道を心得居りますること聞て誰一人近寄る者も

は座いませず只遠繞きにいたすばかりで貞藏もよもやと油斷をしてをりました突然の事では座いますが最て此位いの事はあるならんとの覺悟はして居りました貞藏はスラリと拔

き放しました白刀を持て寄れば斬らんと村境の棒杭を楯に取り屹度身構へましたが寄り來る者もなき手持無沙汰に白刀を大地に突き立て腰より煙草入を取り出して煙袋を取り出しふかり〳〵と燻らし始めます大膽に捕方の者は自駄々踏で歯搔く思ひまして猶々怖氣立て居りましたが斯ては果てしと氣をあせつて居りまするとと古河に八紋龍の藏六と云ふ無敵者が眞向より飛込でムヅと貞藏が胸倉を掴みました貞藏も稍不意を打たれましたる氣味で思はず後へ蹌踉く途端南無三寶續いて飛込來る他の二三人ムッと引き組で地上に突立てある白刀を奪つて遠か田の面へ投げ捨てました三面六臂は魯か譬ひ百人力の剛者では座いましても素手では防ぎやうもつく筈もなく如何いたさんかも氣を揉で居りまする内に十數人の捕方は一時に波を打如く押寄せまして足取り手取り揉みに揉

みまして詰りは情け容も荒々しく道の傍へなは泥田の中へ捻と伏せました、斯うなりし上は最初手出しもなり兼まして高手小手に縛され數多の者に取りまかれまして古河の役宅にて一應の下調ありまして其頃の掟てに是非なくも江戸表へ差立てらるゝ途次ら大層な見送り人で頭の方が道田に驛へまいりましても尻尾は栗橋の驛にある位いでは座いました勿論あと にて聞きますれば役向の方にても最早少なからぬ年月の經てをりまする事なれば貞藏さへ其身を憚りまして直に二本松へなり越後なりへ立ち去りますすれば强て捕縛しやうともの事はなかつたそうです此事につきましては役向の方も頗る議論がむつたのでは座いますが喧嘩の對手方の丈助一味の物が現存いたしてをりますのに役人の偏頗から遂に此始末に及びました、然れば差立ての際にも役人衆より殆更古河の町を白晝江戸

へ送りまするのも定めて不憫なるものなりゆへに夜中にすべしと言濟しますれば貞藏は頭を振りまして「皆樣の其思召は肝に銘じて難有ば禮ヲ上ますが苟めにも一鄕の名主の悴れと生れた私が身の放埒から期の仕合せでは座ます事なれば後々の若い奴等への懲戒にもなることゆへ何うか白晝にして頂戴たうは座いますそれに私がお手當てになつたと聞きましたら城下最寄より身内の奴等も五人三人はあるだらうと思ひますからと憶くする色もなく答へますれば然らば其の望みにまかせて取り計ふべしと翌日の正五ッと云ふに古河の城下を差立てられましたは是れ實に安政六未歲の九月一日の事で邊見の貞藏三十七歲の秋では座いました、それは偖而措きまして彼の八百吉新助はお辰を慘殺いたして其首級を與次郎の墓前にそなへまして それからいたしてお辰の持居りましたる手紙

から漸く富之助の在所も知れましたるゆへに江戸表へ上りかして品川驛に入込夜となく晝となく探り居りましたが狹きやうでも流石は擴き花の部ましてや花街はの品川でゆへ殆ど富之助の確しかなる住所は知れませぬそれから或夜の事驛内の遊女屋を素見歩行たる歸途道に唯ある家臺見世のおでん屋へ立寄り一酌の酒を飲んで太平樂を並へて居りましたる所フト小耳に入りましたのは品川の顔役に品川の新吉と云ふ親分がある其親分の身内に小濱の富之助と云ふ中々新吉の身内でも流行子たと云ふがあるが近頃は病氣で殆ど危篤との事と地廻り連中の話を聞込だ時は實に天へも上る喜びでは座いましした八百吉新助のは漸く富之助の假寓を着きまして或夜の事では座いましした宵の間より降り出しましたる雨は車軸を流す如く海邊の闇路を小走りに參りまする新助八百吉はわ

が富之助の詫住い門にまいりまして内の容子を覗いますれば別に子分輩のいふやうでもゆ座いませぬゆへ勝手知つたる八百吉は先づ彼の板塀を攀登り小庭へ飛下り窃に内を差覗ます れば殘燈の影ほの闇きあたり南の方を枕といたして病氣に疲て息もあはれにスヤ〳〵と眠り居ます る老爺こそ紛れもなき富之助でゆ座います、八百吉は飛立ばつり嬉さを堪へまして内より小庭の潜り戸を開け新吉を手招きいたしまして斯くと新吉に耳打いたしますれば両人共最早敵の首を取し如く心地いたしまして戸の小穴より手を差入れて輪鍵を外し戸を押開き首尾よく富之助が枕邊へ近寄りますれば富之助は漸く落凹た る眼を細く瞬て異形な二人の風体を見ると均くアと驚き「泥棒、押込み」と絞るが如き聲に叫びますれば二人も茲そ度胸の定め所と提け居たる白刃をヅブリと富之助が褥ねの上に左右よ

り突立て　八「富之助面を見ろへ押込や物取りに來るやうなさもしい己達じやねエや」と言いつゝ片手に行燈の火を掻き立て「伊達の八百吉、信夫の新吉を忘れたか手前のためには命の敵藥下總の金次親分に頼まれて毒酒の返禮に來た死損ねて居る手前の白髪首だけじや親分に不足だが五年以來雨風に晒され苦心の手形代りに貰つて行くから覺悟しろと面差付けて脅しかけまするれば　新「ヤイ老耄此容たけでも未だ世が名殘惜いか遺言があるなら同國の好誼に傳へてやる及物で斬られるか如何の道助からねへ事毒命だこれでも一度は奥州三界に男の敷に入つた小濱の富之助今まで散々汚ねへ事を仕盡した其切めては死際なり美しう爲るがいゝせ」と病はうけたる富之助の皺面へ唾吐をかけ尚もつゝいて蹴倒さん有樣を八百吉が慌てゝ押止め　「サア富之助温順に首を渡すかそれとも厭か愚圖〳〵しねエで返答しろ」流石の富之助も此期に及んで逃るに逃げられず退くも出來ず只口惜さに齒を切い縛りて二人の面を凝視まして　富「如何にも手前達が望み通り此白髪首渡してやらう」と初じめて男らしく首差延べ膝に手を置き　新「ウム好い覺悟だ早く往生してお辰の傍へ行け待ていらア」と毒突く語を聞咎め　富「そんなら小濱に殘したお辰も手前達の手にかゝつたか　新「知れた事だ先々月郡山の城下外れ恰度已達の眼に止まつたから運のつき仇の血祭りに彼奴の命は予受け手前の爲め最後の非を遂げた與次郎哥兄の墓へ手向られからゆる〳〵此方へ上つて來た早く三途の川の渡へ行てお辰と手に手を取つて渡るがいゝや」と云いながら突然富之助の背髓の邊りをグザリと貫きました　「ヤイ富之助少しは苦しいか」と心地よけに打笑い富之助の頭髪取つて引き倒しますれば新吉は胸

板の邊りへ乘りかゝつて積りし怨みの刄先に止めを刺しました富之助の白髮首掻き落さんといたしまする時に外にドヤドヤの人の馳せ來る音に二人膽を潰しとつかはの中に富之助が級首を掻落して刀を鞘に收め首尾よく多年の本望を遂し三十六計逃るが勝とトウ〳〵と音する浪をものともせず闇夜に紛れて行衛しれずと相成ました

第十九席

彼の大親分彌兵衛死去いたしましたる跡を引き受けましたるもつまりは傾きかけましたる生井一卷の氣運を挽回いたさんと心に誓いましたる貞藏の金次が不幸にも彼の仁遠五平の鐵守祭りの當日八州の手に召捕れまして江戸表へ差立てと相成ましたる後は越後の彫常古河の彌藏兩人にをきまして兎も角

も萬事を擔當いたしまする事と相成りました。茲に其頃彫常の子分に磯部の芳五郎とヤまする壯者がゐ座いましたが或日彫常と彌藏の許しを得まして境町の在方なる石下村とヤまする所へ大賭場を開き其夜に思ひがけなくも八州の手が入りまして芳五郎の勿論芳五郎が引き連れまいりましたる生井身内の者は一人も殘らず縄を打たれまして古河の新牢へ差送られましたる斯くと聞きましたる生井の彫常彌藏の驚きは一方なりまして直ちに探りを入れましたる處其頃相の川大親分大山の利八が身内の末孤に石下の兵吉若宮戸の榮次郎と呼ふ二人の者が生井一家の全盛を猜み折りがあらば小股をすくつて鼻を明かさんと思ひ居りましたる矢先大親分彌兵衛の死去いたしましたし又貞藏と云へる大敵は此程上の手に召捕れしと聞きまするより時こそ來れりと窃かに手術を回しまして磯部の芳五

郎が現在兵吉が居りまする村にて公然大賭場を開きまする事なれば何條堪りますべき兵吉兄弟は忽ち役向へ手を廻しまして召捕らせたる遂一の魂搗明白いたしました時に彫常彌造は無念さ口惜しきに遣る方もなく一議に及ばすいたしまして即時に四五十人の子分を彌造の家へ呼集め是れから直ぐに喧嘩の仕度せよとの指揮に一同は何事の起りて何處へ押掛るとも知らず喧嘩と聞いては仮よりも好物でゆ座いますれば命の遣り取りは西爪と南爪を交換るよりお易いぼ用と忽ちに其仕度に上を下へと混雜いたしてをりまする處へ表口から「ぼ兎下せ」と彌造親分ゆ至急お目にかゝりてへ事とがあつて奥州から態々まいりましたものと言ひ入れまするは二人の修業者体のもの折りか折りとて取次の若者は能くも二人の面ても見さだめる遑もなく「物貰へなら一昨日來やがれ内の親分は今命の

取遣りに出やうと云ふ處だ縁喜でもねえ」と口小叱言をいゝながらビシヤリ戸を閉じまして其まゝ奥へまいりました此方の二人の者は開いた口が塞がらず倘も其場を立去らる容子もなく本意なさそうに内の容子を窺いをりましたそも此二人の修業者とヤますは彼の品川にをきまして富之助の惨殺いたしましたる八百吉と新助の兩人でゆ座います此度こそは折角多年の敵と思ひました富之助の首級を持歸りまして親分金次の顔を久し振りで見て喜こばせん者をとよし其場にて召捕らゝも親分が好く打たとの一語さへ聞けば何により嬉しい決心を確めまして漸く古河まで尋ねまいりましたる甲斐もなく金次の貞藏は數日前に八州の手に捕れ江戸表へ差立てとなりました る跡と聞きまするより兩人の失望落膽譬るにものなくいたして一時は殆ど絶倒しないばかりでゆ座いました今更百目木へ

も引返しもならず責ては金次親分が腕の緒切りましたる土地へ足を止めんものと思ひまして彌造方を訪れましたる時に現在彌造が宅にありながら今や同勢が道を隔てる鬼怒川縁まで命の遣り取に向ふ仕度最中の處で思ひがけなくも門口より斷られましたも無理はありませんでしたそれにしても折の惡い時は惡い事のみあるものだと兩人とも嘆息いたしてをりましたが兩人とも此風俗じや先方で胡乱に思ふも無理もねねハテ何んとかいゝ思案はあるめいかと腕を組で思案に暮つゝ親分連の勇ましき首途を妨ぐるも氣の毒と素早く姿を物蔭に隠しまして尚も容子を覗てをりました彌造は元よりさる者の尋來るべきとは夢にも知りませず一同を先に達まして「サア續けの聲を合圖に駈け出しましすれば其頃生井一家の一粒撰と聞へましたる大堤の繁吉、仁連の爲吉、水戸の勝五郎、川邊の源三、葛

生の與吉なんとの面々目差すは鬼怒川の向ふぞと勢ひ込て繰出す折柄横町の方より小脇に五歳と見ゆる子を抱へ息きを切らして駈せまいりまする一人の男彌造の妻に「姉御すまないつい遅くなつて此餓鬼が無性に跡を追やがるものだから女ヲヤ義八さんちやアへかへ平生剛力の名を取つたお前が來ないので哥兄も折角待ていたヨそうかへ此兒が無理はないねエ妾しが確に預つて上るから心配をしでないヨ「すまないそれぢや姉御ぼ依頼みヤやしたゝ待や爺父か歸つて來るまで柔順くして居ろヨそれぢや姉御ぼ依頼ヤやしたせ萬一出入先の事だからふれつきりになつた時は何分姉御此餓鬼の行末へだけ見てやつてくださへ松や柔順くして居ろヨと滋面造で駄をこねる我子を突き放しまして一散に駈けまいりました、小蔭で先刻から此樣子見て居りました八百吉新助の二人も思はず貰ひ涙

を袖をぬらしました命を虫しけら同様に思ふてをります新吉も斯くばかり親子の情の厚きものかと今の初め身に染々と感じまして左も力なけに八百吉を顧みまして「哥兄己ア心底は今日から博徒は止だと云ふ聲も何處やら佛け息い事ですから　八「ヲヤ手前の氣性にも似合ねね、佛臭い事を云ふぢやねエか　新「イヤお前は笑ふかも知れねへが今日と云ふ今日限り巳ア心底から賭博は止める氣になつた愚知ぢやねねが巳も信夫には年老た阿父もあるしお袋も居るし矢張彼の通り巳の事を心配して居るに違いなね思へば無闇に涙が出てアゝ濟ねへが八百哥兄巳は是れからお前に別れて乞食をしてと國へ歸つて親に幸々をするつもりだ何卒跡の塲は宜敷たのむと果ては我手に我面てを打掩いましての述懐を聞く八百吉も首俯て悄然として居ります　新「のふ哥兄聞きやお前も伊達には六十になる

るお母がありてね話たがお前は彼の義八とか云ふ男のいつた事を何んとも思はねへ所が實ア巳も先刻から心で泣ている處だ長へ間旅から旅を渡つて來たものだからお母や哥兄の生死も知れねねがスッパリ此渡世は止め菩提の道と云ふは大袈裟だが責めて眞面目に人間になつて一生安樂に暮らしてへものだ　新「有難、哥兄お前も其の氣か善は急げだ其んならこれから直ぐと言ひさしまして新助は再び當惑の肩を蹙め「併し哥兄此一件は如何しやう「一件てへ「相變らずわからねへナ富之助の白髮首さ「然うかナア金次親分に折角見せやうと思つたも喰い違い迂闊な人に見付らうもんならそれてそ一大事二人の首道具だと八百吉は暫時考込みましたが終に二人が是迄艱難して親分の顏を立たせやうと思ふた事から此首を打て來た譯を細かに認めまして首の入れてあ

る瓶の中へ入れ彌造哥兄の家の縁の下へ埋け込んで置くことに相談極めまして近所の途ある木賃宿にて二人共曲らぬ筆の金針流に委細の始末を認めまして彌造が裏口へ忍び行きまして件の瓶を土中に埋め造化精妙と頷きつゝ義八が喧嘩の首途に臨みまして我子に別れを惜む哀れの容を見るよりつゝ博徒の果敢を身に感じ茲に斷然博徒の足を洗いあらて古河を立去りましたは殊勝にも又優しい擧動でゞ座いました。それからいたしまして其後半歳も過ぎましたる後背戸口のいと古びまして傾きますればとて三四人の者を頼みまして繕ひ普請に取りかゝり一日二人の壯者に土臺石の歪を据へ直んといたし床下の土を二尺餘り掘り起しますれば訝しや土中より一個の小瓶現れました「ヲット待ね」と滅法堅いじやねえか澤庵の古瓶でもあるめえし殊に依つた姉御の臍繰りかも知れねえと不

審たら〳〵一同窃に蓋をこぢ開けますれば觸らば崩れんばかしの首級と一封の手紙らしき物でゞ座いますゆへ二人は驚いて顔色を替へ彌兵衛の居室へ飛んでまいりまして其事を申すれば彌造も不審たら〳〵出てまいりまして氣味惡々蓋を取りますればやがて手紙を内より取り出し「何んだ信夫の八百吉伊達の新助両人よりハテナ此二人の者は貞藏哥兄か奥州に居た時分の子分と聞いたがそれにしても此生首は何奴だらうと小首を捻りながら封押破りて文句を拾ひ讀みいたします中に中央頃迄まいと彌造小膝を打て「ムヽ成心だ天晴れだる心掛だ博徒打とも云へ親と名乘り子と習ひを固めた以上にや此位い義理を守らなくつちやならねえ流石貞藏哥兄は好い子分を持て仕合せだと我を忘れて瓶の中なる生首に屹度睨へ「噂に聞た小濱の富之助たア手前であつたか貞藏哥兄に楯を突き

やがつた酬は覩んだ容ァ見やがれ子分衆の不審がるを「此首級は小濱の富之助と云ふ意句地なし野郎だ八百吉新助と云ふか貞藏哥兄のために五七年間の光陰を潰して漸う〳〵の事江戸の品川へ此富の野郎の仇を打て二人は回國修業者となつて古河町まで來た處頼みに思ふ貞藏哥兄は彼の始末加之亡達は石下の喧嘩に押出そうとする矢先たつたものたから二人は到頭此生首を床下へ埋めて歸つたどの事だ島にいる貞藏哥兄が此事を聞たら定めて喜悅ことたらうと彌造はそこらに八百吉新助の兩人の義心厚きにひたすら感じ入りました

第二十席

彌藏が信夫の新助伊達の八百吉の兩人が厚き義心に感じ入りまして思はず暗涙に咽び居りまする此時端しなくも門口にて

「眞平ば免下せゑまして」と小聲に訪ふ者のは座いまするに壯者の一人は何者ならんと氣を聞せて取次にいて見ますれば色蒼白ました五分月代の風体あやしき一人の旅人では座ますれば少しくけゃな顔をいたしまして見ますれば彼の旅人は菅笠を片手に小腰を屈めまして「江戸からまいつた者では座いますが此方の親分さんに内密にお目にかゝつてお話がいたしたいために態々まいりました何卒親分が宿宅なら此事をば取次ぎなさつて下せゑと顔付に似合ませを慇懃にヤまするに取次に出ました壯者は早速親分にヤし述ますれば彌藏は眉根を打感め「江戸から突然に訪ねて來るとあ變だなそうして江戸は何處の身内といつたか「エイ江戸は片門前の長門屋の身内だとやら何んだか面の色も蒼白てる處を見ると彼の男の月代の延たりした處を思ふと昨日か一昨日當り婆婆の風にあつたか

と思ふていやしたせ、彌造は初めて已が胸を叩いて「好し分かつたそれぢや此處へ案内しろと委細搆わず件の男を居室へ請じまして此道に法約ての挨拶を一通り濟しまして來意の趣を問いますれば件の男は聲をひそめまして「親分些と他聞を憚る一件なんですが」「如何んな内密のことかは知れないが内の壯者へ奴等の耳へ入つたからとて世間へ知れるやうな事ア入幡ありや爲ねから安心してお話なせね」「そのほ語で大に安心しなさる」と云ふなあ皆嘘でお聞、及もありやしやうが俺や長州狹の濱の生れで長州無宿の虎吉てへ暴れ人足でほ座ねやす柄にねね賭博の癖に浪人仲間へ飛込で切取り强盜を稼ぎ酬は覩ん三年前に喰ひ込んで佃島の牢内へ送れて以來貞藏親分の預りいなさる六番部屋へ投り込まれイヤモウ親分には一方ならぬ恩を受けて居やしたが今度

公方さまに何にかお目出度があつて俺等共は赦免のほ沙汰があつたのでやすが貞藏親分ばかしは今以てほ沙汰がねへ容子を聞て見やすと親分は表面向大島か八丈へでも流される筈になつて居なさるわけなんだそうでそれについて若し親分俺が婆婆へ出やうと云ふ日の朝貞藏親分が俺を膝近く呼寄せて言ひなさるにや己れも今一度婆婆の風にも當つて見いと思ふて居るが今度の大赦にも洩れる處を見ると到底モウ婆婆の風に當ることア出來めねと思ふと言ひて長州虎は一段聲を低め「次第に依つては一か八か島を破つて見やうと思ふがモウ途中でばれた日にやそれまでだ何にしても外から合圖桃を打てくれる者がなくては出來ねね仕事だ手前婆婆へ出たら氣の毒だが古河の彌造を訪ねて一番相談してくれめねかと實は懇々ぼ頼れ」て來たのです婆婆へ出ると其日に江戸を立て今日漸うほ

當地へ着りましたやうな始末でと語り終りまして密に彌造の面色を覗いました始終を只無言で聞てをりました彌造は此時漸く頭を擡げまして「イヤ虎さんとやら遠路の處飛んだ苦勞かけました貞藏に代りては禮は言いますが然し折角貞藏哥兄の傳言だが烏破りは些いと仕事が荒すぎるやうだと思いますれば虎は眼を丸くいたしまして「それぢや親分お前さんは不承知なんで「イヤナニ不承知てへわけはなにが計畫があんまり大き過るやうだから「それでも折角貞藏親分の依頼を不承知いしなさるなら俺一人で出來るだけの事ア遣て見る積りでも座へやすと虎は彌造の進まぬ顏色を見まして頗る不平の体でぼと座いました彌藏は態と落付拂いまして「折角俺親切は難有が此の彌造はそれぢやお頼みヤとは云われませんが遣る處まで遣るならお前の了簡で一つ遣つて見なさるが宜いと木

で鼻を括つたやうな返答に虎は勃如といたしまして「俠客の本塲とも言はれる古河の親分様にしちや餘り引込思案が勝過るちやありませんかと是れもそろ〳〵お珠を拂いはじめました「引込思案であらうと出過た思案であらうと要らぬ指揮だお前さんは何にも貞藏哥兄の傳言さへ聞かせてくれゝばそれで濟むのだそれから先は此方の勝手だと彌藏は鼻の先で嘲笑て取合はねば長州虎は今は是れまでと思ひましてか「如ういま座へやす貞藏親分とは血を分けた兄弟とも世間から云われて居なさるお前さんがその量見ぢやそれに從ふ子分の度胸玉も大低見へ透たものだコリャ彌造さん飛んだお邪魔を致しやしたと疊を蹴つて立ち上るを彌造は無理に留めんともいたしませず「野郎輩お客人のお歸りだぞと思ひ切つて澄しました斯くいたして立歸りまする長州虎のあとへ入れ替つて襖を開て

彌造の居室顔を出しまするは一人の壯者彌造は脂下りに煙らしいる銀の煙管を思ふまゝに手酷く灰吹の縁でたゝきチラト横目で壯者の顔を見まして「ヲヽ誰れかと思へば友次か」「親分俺では座ねやすと友次は常に變りまして改まりましたる音調で「ハヽ四五日姿が見へなかつなあ何處かのたかまちへでも行たのか　友「イヽエうちじやは座へませんと言ひながら彌藏の傍にジリ〳〵と寄りまして　友「モシ親分実然にそんなことを言ひ出しちや相濟みませんが些つと身の上に付て都合がは座へまますから俺に今日限りお暇を頂戴しとうは座いますと何樣突然の言ひ譯に彌造はいと仰天いたして「ナニお暇をくれ　友「ヘイお世話になる時ばかなりまして此樣ことを言つちや濟みませんが、と重ねて言ふを彌造は何氣なく聞き流しまして何にやらん嘲に頷き　彌「濟むも濟まぬもあるものか手前も

石下の仕返し以來滅切りと男を上て今ぢや此界隈での花形役者だ己のやうな沽券のねゝ親分の手許に居るなア面白くもあるめゝヨ氣の向く處へ行くがいゝと厭味まじりにヤますれば「モシ親分飛んでもねゝ俺はそんな量見でお暇をくれと云ふのではは座へませんそう親分に言われて見ると俺も本音を吐すにやいられやしませんがモシ親分實の處は俺やこれから江戸へ上つて貞藏親分の言傳通り島から親分を救ひ出す量見萬一ばれた曉にはお前さんの迷惑ともなるといけねへからそれでお暇を頂きたいと思ふて　「ウムそれぢや友次今已れも長州虎の話を聞たナ　「エヽ濟ねへとは思ひやしたが骨肉の親父より懇しい貞藏親分それに少年ときから世話になつて一人前の身体になつたも皆親分のお蔭たからそれて貞藏親分の言傳を如何も此儘には濟されねへからと思ひ定めましたるやうな友次

の面色を察しまして彌藏も俄に眼光を和げ「好く言つた汝と
いゝ伊達の八百吉信夫の新助貞藏哥兄が奥州で仕立た子分と
云ふ子分は只の一人の屑もねゝのは只た〳〵恐入ばかしだ汝
もそう言ふ決心なら俺も元より打捨てはをけねゝ二人一所に
江戸へ上つて一骨折るとしやう　友「エッ、それぢや親分お前さ
んも一所に「ヲヽサ先刻長州虎の話を聞た時直くに其量見は
定めたのだが異体の知れぬ奴と思ふてあんな奴に腹の底を明
して如何な者の耳へ入らぬとも限らねゝからいゝかけんなこ
とを云つてをつ拂つてやつたのだ「然うと知らずに飛んだ無
手勝を言ひやした「ナニ其詫にや及ばねへ歸する處は皆な哥
兄にあるのだ幸ゝ江戸の鐵砲洲にかね〳〵懇意な船宿がある
から何にかの手筈はそれへ行てからたと二人は是れより夜更
に至るまで種々密議を凝らしまして其の月の末つ方連れ添ふ

女房にも仔細を明かさずいたしまして密かに古河を出發いた
しまして翌くる霜月の上旬つがた江戸は鐵砲州の河岸の船宿
鶴屋と申する家へ草鞋を脱ぎ此處へ暫時の旅宿と定めまし
た、偖而彌造友次の両人は鐵砲州河岸の船宿鶴屋にありまして
晝夜の差別なくいたしまして島の容子を窺がい居まするが中
々普一ど通はりの手段では手紙一本遣り取りいたす事も叶い
ませず流石剛情我慢の両人なれども果てはほと〳〵思案に因
りまして一時は全たく絶望の餘まり空なしく故郷へ引き返へ
さんかとの相談を初めましたることさへありましたが中途
て意久地なく挫じけるもの本意でないと人前は遊里通いと見
せかけまして其の實は両人交はる〳〵深夜に及びまして浪荒き大川
の裏手に繋つてある座いまする田舟に棹さしまして鶴屋
を横切りまして石川嶋の洲まで乘り付け若し破牢にても企て

る者あればそれに金襴をはせ柵内に忍び入る手蔓になさんを的もなく事を的にいたしまして空しく効なき光陰を仇に過しました、待ては海路の日和汐干網の好時節と相成ました鶴屋の最負客の旦那連中日毎に四五人宛訪れまいりまして浪路長閑に春の景色を氣散しを試みる者も多く此座りまする中に渡邊桑三郎と呼びまする侍士こそ彌藏等の爲めには屈竟の手蔓を得まして桑三郎に取り入りまして網舟の供をいたしそれとなく貞藏が昨今の容子は元より一生涯赦免の見込み有や無しやを問ひ探りました儕てこれより彌造がいよ〳〵渡邊桑三郎の爲めに頗る氣に入られ終に親分たる貞藏に面會を遂けまするお話しは次席に讓つて下上升

第二十一席

儕而彌造は石川島の役人なる邊渡桑三郎と申す方に首尾よく取り入りまして段々島の容子から貞藏の自今の有樣は如何であるかと聞きますれば桑三郎も貞藏の俠客にいたして義に勇むの氣風を心に感じまして役人等にをきましても他の囚人などは侍遇を異にいたしまして永く貞藏の如き者を牢内へ止め置きまして盤伏させ置事の心外に思ふて居りましたる處彌造が貞藏の身内の者なりと心腹を打明しましての物語りまする れば渡邊殿も我々より早速池田播摩守殿まで言上に及びて乾度は赦免の儀を取計ふべし就ては其時節の到來いたするまでは獄中の貞藏は勿論彼れの身内の者に於ても必ず不心得のなきやう罪過に罪過を重ねぬやうと職掌柄とはいながらチャンと彌造等の今度の計畫を見抜きましたるらしき口振には彌造と思はず悸乎といたしました何れにもせよ貞藏の身には能き

緒口なればこそ一番先方の腹中に飛込て事を謀るより外なしと思ひ立つるも早ければ見切り早くいたすが彼等社會の常では座います何日か一度は赦面の見込あると聞きまするよりガラリと今までの心を翻し實は先頃長州虎が傳言より友次と二人して貞藏を連れ出す次第を逐一苟りにも上役人たる渡邊桑三郎の眼前にブチまけ偖改めて貞藏にも見遇せて頂きたしとの願ひを申出ますれば桑三郎は彌造が兄弟思ひの殊勝なる心掛を感服いたしまして公然は容しがたけれど極内にて鍵役に申付面談の事だけは取謀い遣す代りに拙者が口より出でしとはヤさず先刻其方がヤせし事を餘所ながら言ひ傳へて必ずく貞藏は元より其方にても破牢の烏破りのヒヤ恐ろしき企ては思い止まるべしと骨内も及ばざる懇々の說諭に彌造は天を拜し地に伏て深く其厚意を謝しましました其の翌夜深更に桑三

郎の指揮ありましたる時刻見計いまして一叺の天保錢乃至文久錢を準備いたしまして例の田舟に積み込まして石川島沖まで漕き出でましたるが幸ひなる哉宵に曇りましたる空も何時しか晴れ渡り月はさやかに浪靜けく艪さへ棹さへ平生よりはいと輕いやうな心地いたしまして我れ知らず島の淺瀨へ着ました此方は石川島第六番部屋の牢名主貞藏此日末の刻過ぎ牢役人大概退出すると聞もなくいたして赦免方なる渡邊殿より内密に言ひ聞かすべき事ありと鍵役人の手を以て通知ありしかば貞藏何事ならんと急ぎ出頭いたしますれば平生になく上役人輩も遠慮せしめまして貞藏を膝下に呼寄せ「今宵子の刻より丑の刻までの間にて其方に遇はすべき者あり牢内辰巳の方なる柵の内に相待つへしとのお辭、貞藏は突然の事と言ひ上役人より掟てを破ることと深夜に部屋を抜けいでよとの指揮

こそ奇怪至極の至りなりと思ひまするれど囚人の身と上役人の身に對して執念くも聞糺しもなりませず其場は謹んで請けをいたし部屋へ退りまして同牢の輩にまで不審されるばかり思案いたしましたれど思ふ當もなくいたして只不思儀と心配とに時を移しましていよ〳〵子の刻近く相成ましたる頃に誰たりとは知れず忍びやかにまいりまして外より部屋の戸を押開けしが物は言はずに咳拂ひ二つばかりいたしまして其のまゝ何處へか立ち去りました貞藏は是れも必ず濱邊殿が指揮と心に領きまして足音かすかに部屋を忍び出てまして跡は舊の如くに閉しまして油倉と作事小屋の間を過ぎまして辰巳の方へ志してまいりますれば月白く外なる浪打際に今しも一艘の小舟が繫って頻りと内の樣子を見て窺居る怪しの者あれをば我に逃はすべき人とは彼れならん先年長州の虎に言傳はしてやつた

が彌造も今は血氣の盛しとは違いなか〳〵其樣無分別な計畫はいたさぬに眼つている譬へ破牢して娑婆へ出たからとておなじもので一生を過すも彼やこれやを思へば破牢の事は思ひ諦きらめ居た今日此頃濱邊殿へ手を廻し態々此身を遇いに來るとは合点行かぬので妻は間近く眼に見るもまだ彌藏たる事を思はず柵の隙間から眺めいたるに船なる男はそれと知りてか眞裸になりてブンブと水中に飛込まして直に眼の下の石垣の傍へ泳ぎつきますれば貞藏はそれと知るより二度仰天忍びの身をも打忘れまして思はず知らず聲を上げ「ヲヽヽ其處へ來たのは彌藏ぢやねいかと此方より先づ聲をかけますれば彌藏も喜びの色を滿面に堪へまして「哥兄好くマア生きて居て呉れたと言ふさへ殆ど涙聲「ヲヽ彌藏か娑婆に居て娑婆に居ねゝ已が身体は仕方もねいが手前は能く此處へ所へ「哥兄諄へ

話は爲ている間はねねから詳細の事は婆婆へ出た上として面らたけでも見せて呉れねね長州虎の話ぢや別に痩ねね衰へないと云つても滅法長へ牢内たからと月の光りで染ねと貞藏の顔を見て哥兄も年を老つたナ貞藏も矢張彌藏の顔を守て「彌藏無駄な事た命のある間は到底も婆婆の風には當れねへ「ナイ哥兄、今夜無理な事をして逢いに來たは其事だモウ半年か一年の内には吃度婆婆へ出られるからモウ些しの窮命だ力を落さずに身体を大切にしていて呉んねね是れより長州虎の言傳から友次と二人出京して渡邊殿に取り入つた事の大略を話しますすれば貞藏も只聞きまする間は夢めに夢見る心地して男泣きに泣てをりましたが獄衣をビリビリと引き裂きまして柵の間より彌藏へ手渡しいたしまして「彌藏濟まねへふれが紀念だと言ひさしまして顔を反向ました。「哥兄實あ友の野郎も今

夜一緒に連れてこやうと思つたが渡邊樣のお内意もあつたからそれで餘義なく俺だけに爲ましたのさ併し友の野郎には此片袖をやつたら定めし喜ふだらうと彌藏は獄衣の片袖を受取一と先船中に立戻りまして積こみました當百の叺を背負ひまして彌藏は再び貞藏が許へまいりまして「哥兄こりやホンノ少しばかりだが婆婆へ出るまでの小使へ錢に爲て下せね話を爲ていりや限がねね却て渡邊樣の心配へも無にするやうなものだ名殘は惜いが哥兄モーウ別れるせ必らず餘計な心配せずと身体を大事にしてくださねと鬼とも組みまする大の男が手の甲に臉を押拭つて哀別に柵の内に居りまする貞藏は又今更に幾倍の悲しみを加へまして「それぢや彌藏最う行くのか己れの身体より手前の身体を大切にしてくれ友の野郎にも詰らねね心得違いを爲ねへやうに爲てやつてくれと眼を瞬きまし

て悄然として差俯きます る彌藏も血を吐く思ひで辛ひを忍び まして「マア〳〵哥兄運は寢て待つがいゝ今夜にも又如何な 旨へ目が起きるかもしれねゝから騷い音を吐かずに時節を待 ていて下せゝと思ひ切りて石垣を這ひ下りまして貞藏暫時と 呼ひ止まして用はなけれど又月影に彌藏が顏を視下しまして 「彌藏如何でも歸るか」「仕方がねゝ諦めて下せゝと言ひ捨てま して再水中へ飛り込まし た斯くあります程に籠中の鳥に均しう座いまする貞藏暫時只茫然といたしまして見返り見送り 岸邊を離れ行きまする彌藏の船の行方を見へぬまで見送りを りましたが夜廻りの木番の音に心付きまして空打佛きますれ ば月は何時しか西の空に傾きまして沖の小舟の漁火の影も朧 に相成ました「彌藏手前の親切は死んでも忘れねゝ今夜と云 ふ今夜ばかりは生みの親にも遇つたやうな心地がしたと獨語

しなら住馴ました六番部屋へ戻りました。過ぎ行く月日は人を 待たずとかゞまして其年も束の間に過ぎまして明くれば文久 三亥年の霜月の十日の事貞藏は曾て世にある時より金比羅大 權現の信仰者でゆ座いますれば牢内の上手に權現のお札を張 りまして一心に祈念を籠め我が配下なる二百人の囚人には些 少ながらも皆魚類を饗ひ遣わすの慣習とあいなりました此日 も矢張り晝のはどよりいたして一同へ其仕度を命じ今や夕餉 の盛膳飯に飯に着りかゝらんといたす折しも突然に川向の方 に當りけたゝましく半鐘を摺り鳴らしまする響きの聞ゑ初め まするとと均く叫喚の聲四方に立起りまして牢名主たる貞藏は 更らなり床に打並びます囚人一同スワ火事ヨと總立に立上り 窓近く差寄り見ませすれば神田より日本橋の邊り空一面に黑 烟猛火とに蔽れ容易ならざる大火でゆ座います。折しも筑波颪

一入猛烈くいたしまして火の手は見る〳〵八方へ燃廣がり宛然猛火八百八町は差込れたらん有樣で阿鼻叫喚の聲堂宇伽藍の甍棟木の燃へ落る響きは摺半鐘の音と打混しまして凄じう座いました「騒ぐな騒ぐなと貞藏は眼の色變まして立騒ぎまする二百人餘の囚人を手もつて靜かに制しまして已一人鍵役人の沙汰もあるやと待構へまず六番部屋と廊を並べし四番部屋の方に當りまして「飛火だ〳〵」牢内へ飛火と破れるばかり聲を振り絞りまして叫び立て板目を打鳴して騒ぎ出しました多勢の叫び聲物音など手に取る如く聞へますれば偖こそ一大事四番部屋の屋根より吐きいだしまする火烟は大蛇の火災かと思ひまするばかり斯くと見ましたる貞藏は早くも合点いたし「愈々牢内に火が入つたからにや切り解きのほ沙汰は今の間だ一同狼狽すに身仕度しろと下知いたしました

第二十二席

親分の赦しがあると思ひ〳〵の身仕度に取りかゝりまする時き思果せる歟多の役人鍵役の輩から何れも用の提灯高く楊げて持々の部屋々々に出張り大戸を開き大音聲に切り解き〳〵と布れを廻しますればスワこそ沙汰た怪我するナと先を競ふて潮の如くに押出しますれば元より狹き嶋でも座いまするすれば不意に起りまして出來事でも座いまするゆへ船の準備とては座いませず押合ひへし合ひ雨の如く降る火の粉の間を叫び居る間に貞藏一人悠々と部屋の上手に据へ置きました金比羅樓現のお札を把り内懐に入れまして持合せたる天保錢文久錢の束を頭株なる四人の仲間囚人に少しつゝ分け與へまして心にかゝる事なしとあはれ最期の戸口まで立ち出てま

したる頃はわれ今宵の火元たる四番の部屋は既に大概焼け盡しまして次なる第五の部屋も又もや火に包まれましたる上に災々たる尻火に風の煽りに煽られまするに返へされまして今や將に嶋内唯一の寶藏とも云ふべき油倉の大戸前に燃へ移らんといたしまする「油倉々々誰にもあれ火を防く者は後日の特典ありしと提灯を打振りまして駈せ違ふ役人衆の叫び聲をチラと耳に押みまして貞藏は「ウム迂濶に飛び出す處じゃねゐ何時そや彌藏が必付は茲だわへと獨語いたしながら柵を乘越へ土塀を突き崩しと我先にと川へ飛び入り海へ落込む四人等が方へ眼さへも呉れませずして一散に油倉目掛けて走りましたる我から好んで炎々たる火中へ躍り込ましたる六番部屋の牢名主貞藏われ彼の油倉一棟の運命こそ即ち我が運命の決する處なれと南無や讃岐の金刀羅大權現貞藏が運のまだ

地に落ずは油倉の火を防がせ玉へと一心の祈念を籠めながら猛火を潜り群集を掻き分けて漸うに今油倉の戸前近くに駈せついりますれば茲には嶋中の諸役人を始め數百の非常人足殿かに倉の八方取圍只管消防に力をつくしますれど火の手は益々盛りまして毫も鎮まるべき氣色さへなく左しも堅固なる油倉の片隅も今や紅の舌に舐り去られんする有樣では座いまず然れど他の建物と違いまして危險極りまする油倉の事では座いますれば流石に火水を防きまする生粋の江戸ッ子等も梯子を打渡して大屋根へ攀ぢ上らんほどの勇氣もなく只遙かに塡所より龍吐水の水もつて注き或は石瓦を投散らしまして馳せ違ひに呼び騒ぐのみでは座いまする役人の面前をも忘れまして一眞縱に大戸前へ突き進みましたる貞藏尻目に敵多の非常人足を睨めつけながら竹梯

「遅れたか殘念だと居並

子へ片足掛けて屹度打見よけたる途端に「貞藏大儀じや汝の來るを待ていたぞと左も怡こばしげに聲をかけまするに名を呼れましたのに何者と振り返り見ますれば、思ひきや赦免方の渡邊桑三郎殿では座いますれば「ヲヽ旦那樣御免下せゐめし」と言ひ捨てゝ又々二段餘り駈け上りましたる時渡邊殿はは用提灯我手に持をりましたを高く差上貞藏に渡しまして「貞藏今夜はかりは予が代理ゆるすちましたら貞藏が最期の時節では座へます」と莞爾り笑つて猿の如く廂の上まで攀登り上れば「男一四無下に殺すなそれつしけど大音に下知いたしまする渡邊殿か頓才役向の威光とヤ牢内名高き邊見の貞藏が命を的の先鉅に屋上に馳せ上りましたる數百の人足一同の元氣も百倍いたし忽ち屋上にて必死となりて立働きますれば左しのも猛火と人の勢に避易いたして

危機一髪に廻りたる油倉も廂を燒きしたるのみで美事火先は作事小屋の方へ避け一同ホット太息を吐きました其の翌日嶋内六棟の牢舍合計千餘人の四中中此の未曾有の切り解きに遇ながらいたして神妙に嶋に踏み止まりたる者は貞藏以下些かに百五十人にて貞藏が衆に卒先いたして油倉を防禦に力をつくしましたるも此貞藏の力に依りまするもので渡邊殿より早速此由を書面にて池田殿へ上申に及びました貞藏も一入渡邊殿の厚意のほどを膽に銘じてそゝろに嬉し涙に咽びました役人向へ最負を受ける餘光とはヤながら大火の夜の大働きをいたしましてより一層牢内に義俠の名を轟かしましたる貞藏は我が預の囚人輩は云ふまでもは座りませず縲も由縲も俵座いませぬ博徒といふ博徒俠客といふ俠客は江戸ッ子となく國者となく强て手蔓を求め貞藏に親子の縲を ヤ込もの數多は座

いました貞藏は其砌り出火後の牢番頭を承り數多の囚人を指揮いたしまして日々工事に從事いたして居りましたるが貞藏が受持の場所に限りまして豫定の日數よりか手落もなく出來いたしましたのに彌よ〳〵信用を博しまして翌る元治元年子年の五月に牢番頭の出來いたしますると同時に特別の恩典を持まして赦免いたすべき旨を渡邊殿よりいたして貞藏に申渡しましたる時に貞藏は譬へん方なく喜びまして婆〻にありましても婆〻の風は通はせ命あれども死したるに均く鉄窓の苦患を忍び居りましたが茲に六年餘り七年に近き月日を經ました る今日世は軒に菖蒲の風薫る端午の節句日正八つ時と云ふに目出度出獄を赦れまして久し振りにて日本晴れの富士の山を打仰きましたる時の心地は如何では座いませました。それからいたしまして古河の方にては何日何者が知らせましたるもので

は座いますか來五月の節句日には貞藏親分が赦免になり故郷へ立ち歸るとの回答專らでは座まするゆへ彌藏彫常の両親分様を初めといたしまして上邊見の多三郎古河の宇兵衛栗野の吉藏職人町の吉五郎同弟安五郎力士の元吉なんぞの重立ましたる面々凡五六十人打揃いまして江戸表へ立越へ彼の鉄砲州河岸の船宿鶴屋方を本陣といたしまして盛んに貞藏が無事の出獄を出迎ひまして其混雜は實に形容いたしまして申上てよいがわかりませぬ貞藏は七年振りに古郷へ歸りまして脫い酒に身も心寸暇なきまで忙しく半は夢中に日を重ねて居りました。さて親分貞藏古郷の古河へ歸りましてより種すと又も身に降りかゝりまする一大事件は彼の我子同様に養育いたしました る友次が彌藏の異見を聞かずに自分一味の者張と語ひまして大恩ある親分なる貞藏の身を再び八州より嫌疑を受けて入

牢となりましたがそれはホンノ一時の事では座いましたが終に友次が鉄砲腹を切るは話では座いますが丁數に限りあるものでは座いますからそれはいずれ又編を改めましてゞ上る事と いたします。偖而貞藏は俠客益々近國に響きわたりまして生井一家の盛運彌兵衛が生前の昔しにも優りまして彌藏(先年病死)彫常(當時越後の五仙在にあり)の兩人股肱といたして總州野州の兩國は忽論遠きは東京福島越後信州に渡る數百の乾分を顧使しついたし邊見の大親居と崇められまして衣食にてとかゝす他の身内を怨まず今現に七十八歳の高齢に相成ましして身体鑠鑠たる事は壯者も及ばぬ程では座いました家は茨城縣古河町二丁目には座へますれど常に東京福島の間を往來いたして此處に半月彼處に一月と悠々自適いたし世を安樂に送つてをります長々ゞ續きましたる邊見の貞藏のは話もこれで結局と

いたしますハイは退屈さま……

俠客邊見貞藏 終

明治卅四年四月十日印刷
明治卅四年四月十三日發行

編輯兼發行者　東京市淺草區黑舟町十五番地　瀨山佐吉

印刷者　東京市神田區南乘物町十五番地　大塲沃美

印刷所　東京市神田區南乘物町十五番地　龍雲堂

發行所　東京市淺草區黑舟町十五番地　順成堂

不許復製

落